

川柳塔

平成二十九年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇七七号



日川協加盟

特集 こんにちは新同人です

No.1077

二月号

第五回 春の川柳塔まつり誌上大会募集

川柳塔社では、日頃句会などにお出掛けになれない方々を含め、結社を越えて広く川柳をお楽しみいただく機会として、第五回誌上大会を企画いたしました。参加要領は左記のとおりです。是非皆様のご参加をお待ち申し上げます。

課題と選者(各題二句 共選)

川柳塔社

課題吟 「友」 「長島敏子(ふあうと川柳社)」

「書く」 「高瀬霜石(川柳塔社)」

雑詠

「植野美津江(番傘川柳本社)」

「投句要領 規定の用紙(コピー可)または、用紙の入手できない場合は便箋などご使用いただいても結構です。」

「投句料 一〇〇〇円(切手は不可)」

「投句締切 二月二十日(月)消印有効」

「送付先 〒543-0052」

大阪市天王寺区大道一―一四―一七―二〇―一

川柳塔社 誌上大会係 宛

TEL/FAX(〇六)六七七九―三四九〇

賞及び発表

各題特選2句に賞呈・発表は川柳塔誌五月号誌上川柳塔誌を購読されていない方には発表誌呈

心を尽くし 思いを尽くし 知性を尽くし
力を尽くして全人的に仕える医療と福祉

医療法人社団 湯川胃腸病院



消化器科 放射線科 脳神経外科
緩和ケア(ホスピス)
デイサービスセンター併設



大阪市天王寺区堂ヶ芝2-10-2 TEL 06-6771-4861

<http://www.yukawa.or.jp>

出 会 い

小 島 蘭 幸

私は高校卒業を期に雅号を本名の和幸から蘭幸に改名しました。蘭幸になって初めて大会に出席したのが、昭和41年6月26日に開催された呉柳10周年記念柳大会です。その席で初めてお会いしたのが選者として出席されていた土居哲秋氏です。10人の選者の中で一際若く、颯爽としておられました。

平成29年1月9日、番傘川柳本社おめでとうの会がホテル大阪ベイタワーで開催されました。その席で土居哲秋氏は第3回磯野いさむ賞を受賞されました。「岸本水府先生のお墓に受賞の報告をさせていただきます」哲秋氏の受賞のことは聞いていますと、51年前に初めてお会いした時のことが鮮やかに浮かんできたのです。

今日も掌を合わせて午前五時の水 哲秋

新年おめでとうの会は、田中新一主幹の力強いあいさつから始まりました。新同人紹介、永年同人表

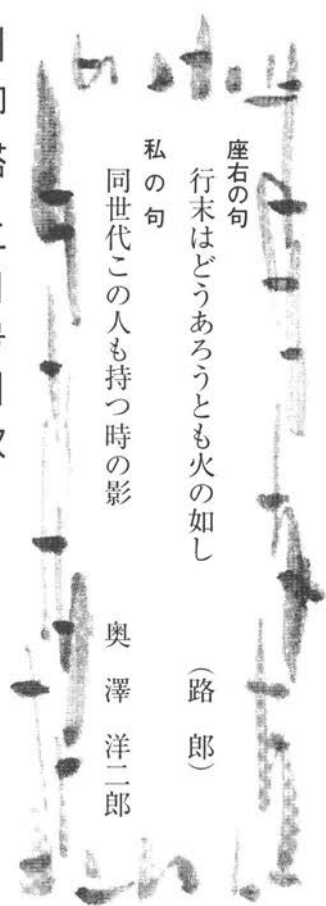
彰、第3回磯野いさむ賞表彰、第2回水府賞、番傘賞表彰に続いて本社句会、選者は、事前投句・森中恵美子、当日投句は私と宮村典子、福本清美、阪本高士の4名が務めました。私の課題は「ベット」、我が家では、12年間シェットランドシープドッグを飼っていましたので、この体験が選をする上で大いに役立ちました。佳句が沢山あって選も披露もとても楽しいものでした。懇親会は、来賓の木津川計先生、森中恵美子先生をはじめ、選者、受賞者の皆様と同じテーブルでした。その席で初めてお会いしたのが第2回番傘賞を受賞された菊地良雄氏です。

辞退するつもりで待っている叙勲 良雄

川柳塔社誌友として活躍されている八王子市の川名洋子さんと友人ということで、竹原の銘酒幻のアルミ缶にサインを求められました。

あなたにもぼくにもきつとある翼 蘭幸

後日、川名洋子さんから「吟醸まぼろし良雄さんから頂きました。この缶は記念に大切にしておきます」とお便りを頂きました。懐かしい出会いと新しい出会い。新年おめでとうの会のますますのご発展を願っています。



座右の句

行末はどうあろうとも火の如し

(路郎)

私の句

同世代この人も持つ時の影

奥澤 洋二郎

川柳塔 二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「津軽・斜陽館」

■巻頭言 出会い

ボケる 呆ける 惚ける

小島 蘭 幸 … (1)
都 倉 求 芽 … (2)

川柳塔 (同人吟)

小島 蘭 幸 選 … (4)

川柳塔の川柳讃歌

木津 川 計 … (44)

新川柳鑑賞

麻生 路 郎 … (45)

自選集

細 川 花 門 … (49)

■ショートエッセイ 川柳との出逢い

温故知新

西 出 楓 楽 選 … (50)

水煙抄

吉村 侑久代 … (71)

英語 de Senryu

新 家 完 司 選 … (72)

俳風柳多留一二篇研究

安土理恵共選 … (74)

愛染帖

北野 哲男・安土理恵共選 … (78)

檸檬抄「チクチク」

橘高薫風句抄 … (81)

ボケる 呆ける 惚ける

都 倉 求 芽

家の中では「おじいちゃん」句会へ来ればまだ「若手」。そんな声にいい気になっていたのが、いつのまにやら句界でも高齢者になっていた。まことにうかうかとした話。

紙と鉛筆があれば誰にでも入れる世界と誘惑されて始めたのが、川柳をしておれば惚けない、ところまでとうとう来てしまった。ところがなんのなんの最近自分でも呆れるほどの呆けかた。

先日、生ゴミの回収日のこと。いつも前夜のうちに袋に詰めておいて、朝すぐ出せるようにしておいたのだが、その日もそのとおりにしておいた。それが朝食をすませてあとの洗い物にかかろうとした時、ふと横にゴミ袋がある。アッ。慌てて通りまで持って出たがすでに回収車は行ったあと。

また朝食の支度のこと。わたしは毎朝モロヘイヤと大根下ろしの混ぜたのを

一路集「防身」

西口いわゑ選……(82)

初歩教室「人形」

丹下凱夫選……(83)

川柳塔鑑賞

居谷真理子……(84)

水煙抄鑑賞

栗原道夫……(86)

せんりゅう飛行船⁽⁷⁴⁾

仁部四郎……(88)

『麻生路郎読本』余滴⁽³⁹⁾

新家完司……(89)

特集 こんにちは 新同人です

栗原道夫……(90)

朝日なわ柳壇 今年の十秀

大西泰世……(101)

インスピレーション・ナビ 印象吟

……(102)

一月本社句会

……(104)

句会燦燦

岩崎眞里子……(108)

各地柳壇(佳句地十選/村上直樹・谷口 義)

……(109)

二月各地句会案内

……(122)

柳界展望

……(124)

■編集後記(ひとこと/初代正彦)

朱夏・勝弘……(126)

座右の句

さまよえる小ひつじ一人経を読む

(義人)

私の句

変な世をチェンジするのはあんただよ

棚田 大

味噌汁と一緒に食べているが、ある朝青
首大根を5センチほどすり下ろした時、
家内が悲鳴に近い声で呼んだ。飛んでい
った方がいいが戻ってきたところ、今すっ
ていた大根下ろしがない? よく見るとな
んと洗ひ桶の中に広がっている。またす
りなおし。

こんなことも。家内の入院中、最初の
病棟では各部屋の中にトイレがあったの
で問題はなかったが、病棟が変わってか
らは通路のトイレへ。それが何回行って
も部屋に戻るのに反対方向へ行っては引
き返し。

その家内は毎日、朝9、昼5、夕9、
寝る前3、計26個の錠剤を服んでいる。
それを私が一週間の薬ケースに分けて食
事ごとに服ませているのだが、これは間
違ったことはない。(つもり)

以下は私の句。

暑さボケただでも呆けてきてるのに
目の玉はまだ黒いのにボケてきた
なんとなく時雨れるとこが身のうちに
もの忘れ 私自身に慣れてきた
血管のところどころにバス停が



小島蘭幸選

鳥取市 森山盛桜

「神ってる」まさしく妻の底力

主義主張なくガラボンの玉が出る

日本も変わる賭博の合法化

腕組みを解いたら隙だらけの男

堂々と見せる二度泣き三度泣き

殿をつとめる器には非ず

寝屋川市 藤村亜成

公園がおしゃれになつてきた紅葉

無一物になればやり直せるだろう

油注さねば背骨が軋む縄のれん

傷口をしつかり洗い出直そう

余命を刻み今日一日が消える

スケジュール狂う怠け癖呪う

神戸市 奥澤洋次郎

廃校の廊下走つてはいけません

一人より淋しいこともある二人

戦いは終らず年は暮れてゆく

働き蜂に用意されたはこの老後

マニュアル化された笑顔はとどかない

思いきり笑えた今日よおめでとう

米子市 吉田陽子

輪が好きでいつも綻び縫っている

大イチョウまだ七十二かと笑う

見ぬ振りをしようボタンの掛け違い

おおよその見当外れなくなつた

尽くしても尽くしても子が遠ざかる

ギブアップ出来ない虹が追つて来る

大阪市 栃尾奏子

誰に恋したのか君が美しい

チヨコレイト私に勇気下さいね

親友がライバルになる14日

スキなんて言うから意識してしまふ

触れもせず君はハートに火をつける

恋という魔物が暴れ出す妬心

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

人見知りするから旅はお預けに

気どらずに生きたつもり of イヤリング

鏡とは近頃ちよつと仲違い

里は夕焼けからすも妹も遠い

初笑いの予約だけでもしておこう

春告げる鳥を今から呼んでみる

奈良市 大久保 眞澄

傘はいらん行く先々に置いてある

広めてほしい気もちよつとある内緒

トシだ呆けたと輪番もお断り

愛用の包丁不意に牙をむく

規格外の子です父親似なんです

畏まってディナーずり落ちるナプキン

藤井寺市 鈴木 いさお

千年の古都に溢れるチャイニーズ

哲学の道のそぞろに聞く挽歌

老骨に鞭打ち登る二寧坂

銀閣を愛で金閣に酔い痴れる

湯豆腐をハフハフハフと食う古利

壬生逍遥沖田総司の声を聞く

岡山市 工藤 千代子

大人しくなったが丸くはならない

足の裏くすぐる子猫の魂胆

ブランドを買って心は飢えている

わたくしに見栄という切り札がある
ライバルに会うため眉を描きあげる
甘言のなかにいっぱいあった棘

岡山市 永見 心咲

リスペクトされたい鳶のビーヒョロロ

エピグラフとても大事に生みました

それらしいもので束ねている懺悔

脱皮する三従説の鑄型から

穴のあくほど見られても褪せぬ薔薇

放水が過ぎて私の底が出る

鳥取市 岸 本孝子

家事の手抜き歳のせいにはしてならぬ

非常持出自己責任を詰めている

他人の子もしつけが出来たのは昭和

コンビニが手抜きをせよとおでん売

ワンパターンだけ寅さん好きでした

天才と錯覚させる三歳児

和歌山市 木本 朱夏

数え日のひとりは限りなく寂し

もう誰も戻ってこない木守柿

まだ遊び足りない朝のお月さま

枝雀でも聴いて泣きたい笑いたい

頬杖をついて歳月見送った

まだ夢を見ている鳥を絵の中へ

鳥取県 斉尾 くにこ

根菜類あまやかにして冬がきた
怒ったら負けだとハープティーごく
魅せられてしまうのはその佇まい
良心はただいま留守にしています
真実は語らず語るのは事実
苺ハウスにハチミツ工場ありました

松江市 石橋 芳山

散らばっているのは人格の欠片
まだ影を引き摺る片肺の翼
手の平をずるりと落ちていく記憶
死ぬまでの匍匐前進ウサギ跳び
無秩序な流れで辿り着く酒場
背中から社会が剥がれ落ちていく

榎原市 居谷 真理子

古コート冬の重さが肩に乗る
耳はいつも君の霧笛を待っている
痩せた犬太った猫のいる小島
飼い主も犬も無口で優しい目
銛を打つ筋肉ペンを持つ力
アルバイト貧しきサンタできあがる

尼崎市 藤井 宏造

妻と瓜二つの小煩い長女
五歳孫我が家の内部告発者
百均でもいい加減には選ばない

A型が折ればきつちり千羽鶴
視力検査勘で言ってもよく当たる
卵までくしゃつと割れた苛つく日

大阪市 川端 一步

お互いに杖になろうと喜寿半寿
菜根譚十年経って三合目
謎かけか花の切手が三合目
恋人は酒と将棋と川柳で
句会にも小さい地獄と極楽と
無職とはこんな忙しいものなのか

大阪市 榎本 舞夢

べっぴんさん戦後の自分だぶらせる
元気な内会いたい人と会って置く
忘れ物半年振りの店で会う
年女頑張るために手帖買う
娘から正月料理まかしとき
老い二人御先祖様に御挨拶

富田林市 中井 アキ

此所からが勝負泣きたい時笑う
円周を飛び出してゆく認知症
背もたれの椅子に歳月盗まれる
踏まれ強いと亡母の遺伝子継いでいる
痴呆と駆けっこをしているのはヒト科
ゴミですか いえ愛憎のパーツです

神戸市 富永恭子

閉じている私を開けに行く書店

千歳鮎ゆつくりとけて子の育ち

決戦日ハチマキはまだ縫えてない

干柿が呼び寄せているお正月

温かいお粥で癒す手術痕

これでもかと山茶花舞って道掃除

高槻市 片山かずお

駅近の家でタクシー乗りにくい

いい医者だちゃんと触診やっている

赤を着てよけい年寄り臭くなる

金運有りと言われた手相じつと見る

人の道少し外せば楽しかる

俺も居るぞと長老の咳払い

三田市 久保田千代

自然体に生きたが借りはきつとある

思い出のページ重ねて今朝の水

ごはん炊く匂いファイトを呼び起こす

生き下手なわたし空くじばかり引き

人相を見る犬がいて遠回り

曇り空友の病気が治らない

大阪市 谷口義

考えて作った手抜き料理です

アイウエオ順が歳の順になり

大袈裟に言うから点滴をされる

居留守など使えぬ動物園の象

大阪のおばさんの世界があった

おばあさんになる特訓を受けてます

堺市 村上玄也

無名選手の末路は哀れプロ野球

下積みで終えて生涯名を成さず

ドラフトの裏で戦力外告知

トライアウトまでも粘って諦める

補強策もう来年の星勘定

憧れのメジャーへ行つて非力知る

米子市 竹村紀の治

咳ひとつ命盗られるほど脅え

天国へ届いたらしい熱下がる

窓口に行ったら呼んでないと言う

針千本飲ませたい人もう居ない

三日目に腰痛がくる天主閣

原木に戻してくれる郷の酒

貝塚市 石田ひろ子

木陰から涼しさくれた落葉掃く

予防注射済ませて孫の帰省待つ

振り向くのはやめよう影に叱られる

図書館の時計師走を忘れさせ

千両の赤くなるのを鳥と待つ

綿菓子のような心になる読書

さいたま市 星 野 育 子

世界遺産で夜まつり最高潮
カジノで美しい国はできますか
戦前と戦後昭和に国二つ
過去未来今をどう生きるかにある
転勤後半年でもうカープファン

東京都 川 本 真理子

魂が落ちていないか道の上
天気雨 亡父はもういないのだけど
現在地とあるがどこだかわからない
君の眼に美しいならそれでいい
津波警報 立ち止まるな引き返すな

横浜市 菊 地 政 勝

期限切れいつも毒見をやらされる
不器用で本音ばかりを吐いている
健康法いろいろやって続かない
生ゴミがめっきり減った野菜高
風船も僕も萎んでゆく定め

富山市 島 ひかる

九十二歳の影絵の中へ迷い込む
メルヘンへこころ躍らす清治の絵
一日の思いに浸るロゼワイン
瞑想にふける脳活信じつつ
外は雪鰯大根を旨く煮る

可見市 板 山 まみ子

会費ぶん吞んで帰るとクラス会
早世の友を話題にクラス会
毎日が日曜だから忙しい
大卒も中卒もないクラス会
妻よりも犬の気持がよくわかり

大山市 金 子 美千代

ローカルの駅でのびのびストレッツ
軒下に吊す玉ねぎ柿すだれ
おめでとう亡夫にこつとしてくれる
若返るためにたまには街に出る
大切な事は一言だけがよい

大山市 関 本 かつ子

足払い掛けられたみたい転び
レントゲン私の骨と初対面
診察に身を乗り出して聞く夫
ハプニング続いた年を笑い合い
言い方を変えてお笑いぐさで済み

愛知県 早 川 遯 行

出世もう諦め丸い影法師
良心を試す無人販売所
何が起きるか分からない十二月
都議会のドンの沈黙不気味なり
一人分のランチでさえも食べ残し

京都市 清水英旺

誰となく便りをしたくなる夜長

雨戸繰る明日も佳い日であるように

やれやれと腰下ろすにはまだ早い

下一桁九円にする心理戦

お出かけは女房好みの服装で

京都市 藤井文代

修理代聞いてびつくりゴミにする

悩み事聞いてくれるだけでクリア

ワンクッション置いた返事で包む刺

プライドを脱げば立ち位置高くなり

安い物見るとときめく主婦の癖

京都市 榎本宏子

朝食は一汁一菜娘のダイエツト

楽しみを奪う臨時の慶弔費

生涯を田舎役場の知恵袋

受けた恩きつとあの世で倍返し

花一輪で乾き忘れる安いこと

京都市 三宅満子

ノーベル賞内助の功が認められ

オートファジー未だに何かわからない

俗世間濁った川を泳ぎ切る

来年の手帳病院予約のみ

大掃除プロに頼めば高くつく

長岡京市 山田葉子

海のうた怖い音色も響かせる

もうとまだの間で揺れる後期です

また帽子どこかへ置いて来たみたい

目を見ては無理横顔になら言える

もう少し生きてみようかわかるかも

八幡市 今井万紗子

進む道もう決めてある迷わない

山頂から私にエール誰だろう

これからもこの来た道をまた選ぶ

夫と舞う最終章の幕が開く

老いたけど可愛いおまえ知っている

大阪市 池上清治

すき焼鍋遅れて行けば肉はなし

夜桜に誘われ今は夢気分

桜見に今年もあの子誘いたい

誘われて出る気満々祝賀会

英会話できたら出たい座談会

大阪市 井丸昌紀

誰にでもすぐに馴染んでいる孤独

富士山を飲み込む北斎のうねり

ちゃんと目が覚めますように明日もまた

なぐさめの言葉で谷底へ沈む

お隣の暮らしの音が聞こえた日

大阪市 内田 志津子

鯛雲大漁船の予感する

テロいじめ若き命の軽いこと

おばちゃんは聞くのが苦手よく喋る

全没に機嫌直しの吟醸酒

嫁の愚痴どんと構えて聞いてやる

大阪市 宇都 満知子

ケイタイ忘れ公衆電話久しぶり

行列のお店主人は行きません

秋の香り熟れたぎんなんいいもんだ

甘よりの毛糸みたいな日向ぼこ

サンタの荷物あずかつてます婆ちゃん家

大阪市 江島谷 勝弘

年金カットされるとカジノ行けまへん

曇天は白内障をたじろがす

困ったもんだオレが一番多すぎる

あぶないぞ地球の果てへ自衛隊

食えんなあブーチンさんと習とキム

大阪市 榎本 日の出

天国が近くなったと教えられ

問診でお薬一個増えました

割り箸がタクトになって甘い酒

今日の愚痴ビールが全部処理をする

借金はせずに貯金もしない主義

大阪市 大川 桃花

安静にしていると気力萎えてくる

小遣いをもらえば孫の用はすむ

御無沙汰の友も骨折したと言う

スマホ持つ子供が怖いコルセット

意外にも商売上手な石頭

大阪市 大治 重信

柿実り鈴生りのまま過疎の村

預金見て終の棲家はここときめ

団栗をベンチに残し日は暮れぬ

熱燗や兄弟揃った一昔

リハビリを兼ねて散歩の夫婦愛

大阪市 奥村 五月

過労死の言葉知らない蟻の群れ

ボーナズで年に一度はカニ料理

有名人サイン煙らす焼肉屋

白鳥にきつとなれるとカラスの子

旨いけど会計怖い時価のすし

大阪市 笠嶋 恵美

心から笑わせ指導医師の技

京都ハリストス正教会の空気吸う

春日大社の葉書が届く縁うれし

落葉踏む心ゆらゆら童心に

美に酔えば全身無垢に浄化され

大阪市 熊代 菜月

手の筋を数えて思う過ぎた日々
爪切りが出来なくなつた認知症
電話帳消さねばならぬ名がふえる
亡母の歳こしても私まだ元氣
ウラ切りをゆるした今日の茶がうまい

大阪府 桑田 ゆきの

捨てきれぬ古い日記を読み返す
古日記老人介護を事こまか
ほくほくと冬至かぼちゃ祖母恋し
無住寺の塀をのぼりし薦紅葉
古日記起伏に富みし世を写す

大阪市 古今堂 蕉子

住民より案山子の多い案山子村
耳鼻科五軒耳鳴り治す医者はなし
片思い雲間の月や雨夜月
亭主風吹かせば妻は遠くなる
要の釘抜けたかからだ下降気味

大阪市 小谷 集一

原点に戻ると視野が広くなる
自撮りカメラへ笑顔の妻とツーショット
人生の余白へ欲の種を蒔く
好きだった人美しく凜と老い
最後まで燃やし続けている野心

大阪市 近藤 正

安保法荷が重すぎる自衛隊
カジノ好きテラ銭欲しいのか維新
異常気象オゾンホールを塞ぎたい
日本人横綱締めるのは誰だ
トランプにアベはチョロいと見透かされ

大阪府 坂 裕之

脇役で盛り上げていく方に居る
寒い日は犬の散歩もランニング
遣つてみる値打ちあつたかお手伝い
知らん間に五十年過ぎフルムーン
出来るだけ車に乗らず自転車で

大阪市 佐藤 忠昭

親は「ない」子供は「ある」と言うお金
孫出来た孫の名前で積んである
無い無い暴走留める牽制だ
子の前で泣き事もつと言うべきだ
失敗は通帳印鑑妻管理

大阪市 田浦 實

秋の奈良大仏様はお若いな
若沖の群鶏何かやるかまえ
地図を読むきつと上手な渡り鳥
うやむやの解決上手老いの会
法事の里倉の卓袱台寂しそう

北陸に立つ白波の鎮魂歌

大阪市 津村 志華子

日本の味ほんわかと梅こぶ茶

とりとめもなく妹と夜もすがら

プライドはいつか崩れる赤いバラ

元気に暮らそ春に桜も見たいから

大阪市 津守 なぎさ

尻尾振る犬でみんなに愛される

嬰鑠と米寿の友を追いかける

初旅にはずむ心の準備する

寒暖の差が解るので大丈夫

餌狙うカラスが怖い猫屋敷

大阪市 寺井 弘子

ゼロ金利赤鉛筆をまた削る

靴下の穴から足の溜息が

先頭はどこ進軍の蟻の列

目移りを鏡が笑う試着室

五分粥になって自信を取り戻す

大阪市 寺本 実

責任を逃れるために第三者

外人の間を抜けて宮参り

すっぴんと言って写真を撮る勇氣

結果聞く必要もない笑みを見る

母と妻間に生きてやせ細る

大鍋で私を煮るとアクが出る

順調に年を重ねて医者通い

右足は歩け左は安静に

人ごとでない老々介護とは

古希近し憎まれ口の熟成期

大阪市 中井 萌

雨上がりラッシュアワの散歩犬

検診は受けず覚悟も不十分

降りそうで降らない君の得意技

難民か昭和の写真セピア色

強い人に拍手弱い人に共感

大阪市 原田 すみ子

林住期今を大事に生きていく

皆元氣古稀を迎えたクラス会

九条持つ戦後生まれの幸思う

テロ難民世界平和は遠い夢

一日で風景変えたトランプ氏

大阪市 平賀 国和

レッテルの中でもがいた僕の意地

あらすじは無い九回の表裏

遠距離も新幹線で日帰りだ

松明に浮く能面の面構え

伝えようゴジラは核の犠牲者だ

大阪市 藤田 武人

大阪市 升成 好

愚痴ひとつ言わぬ案山子を見習おう

力学か美学か太鼓橋の反り

汗すれば実る大地にある魅力

半分の我慢を知らぬ一人っ子

鈍感で打たれ強いと褒められる

大阪市 山本 加お里

明日よりも今が大事な歳となり

聞こえないときはニコニコ笑つとく

好きな道何度こけてもあきらめず

それなりの歳それなりの知恵を出す

愛無限今日もホームへ足が向く

大阪市 吉内 タカ子

好奇心さわぐ予定に怪我の邪魔

不注意を今年切りやと願ひ札

孫五人入試しんばい後すこし

元氣かな友が恋しい賀状書き

あかあかと負けじ千両春を待つ

大阪市 若本 安代

表裏見せ合いながら深くなる

偲ぶとは懐かしむこと父年忌

風の子が消えてブランコ寂しそう

リフォームで何とか済ます冬支度

明日の夢語る酒なら付き合うよ

堺市 奥時 雄

天皇に鳥の遺骨は何語る

忘れたかとぼけているか分からない

妻相手とぼけおおせる訳がない

自慢抜きで過去語るのは難しい

あの日から生涯預け合う夫婦

堺市 柿花 和夫

銭湯で大人になった昭和の子

ていねいな包装で届けます私

よれよれの脳に恵みの吟醸酒

先輩は頭でのれんかき分ける

美人には優しいのねとつねられる

堺市 源田 八千代

ルミナリエ誘ってくれた人いずこ

スーダン派遣父見送った日と重ね

冬木立人の形にシルエット

リハビリに行けば彼方此方馴じみ顔

喪が明けて今年は皆で初詣で

堺市 齋藤 さくら

寒い日はみんな無口になるんだね

赤ちゃん的笑顔見てたら元氣沸く

置き忘れ探し疲れて日が暮れる

気付かない振りをするのも夫婦なり

散蒔きの日本金持ちなんだろう

堺市坂上淳司

冗談じゃないよカジノの法制化
超高齢化冥土へ行くのも一苦勞
丁寧なお辞儀に慌てまたお辞儀
デバ地下の試食選り好みはしない
寝なあかんと焦れば焦る程冴える

堺市澤井敏治

八十路坂の峠を越えた丸い背な
空っぱの頭にだって夢がある
送り迎え園児の足に追いつけず
物忘れとがめぬ孫の居てくれる
優しさに触れてやさしさ湧いてくる

堺市遠山唯教

巢籠りのベッドに里の夢つづく
霧ふかく大事なものを見失う
身にまとう絆たぐって生きる術
一歩ずつ欲ばりになる万歩計
スランプは気にせず生きてゆくつもり

堺市内藤憲彦

六甲から神風ほしいタイガース
ノーベル賞お人柄までさすがだな
朝刊も明るいニュース聞きたがる
紅葉より君が目立っていたあの日
ていねいに季節を添える里料理

堺市矢倉五月

冬籠り十津川警部をお相手に
よう飲んだ後はお粥と梅干しと
熟睡が出来た良い日になりそうだ
家もハートもバリアフリーにしています
声も姿も亡母そっくりの姉が来た

池田市栗田久子

救命の恩への感謝生きている
静脈を探るナースの手に祈る
かすかな痛み臓器は何を訴える
ナースコール言葉を越える命綱
点滴を離れ身軽になった朝

和泉市横山捷也

声だけは良いとカラオケ褒められる
口出しが過ぎて気付いた残る悔い
商売にならぬ夫のお人好し
多趣味です一寸かじっただけですが
所詮無理先祖に美人居りません

茨木市島田誠一

一人ずついづれ大地に還る定
先人の遺産磨いて古都は生き
延命拒否書いては破る古希の冬
好き勝手言える高みの外野席
お辞儀する数競い合う和の流儀

茨木市 藤井正雄

朝市の茄子の紫紺に惚れて買う
浮雲の端に詩情を置いておく
会費分飲めず注いでばかりいる
貸し一つできた上司が誘う酒
課長補佐止まり部下には好かれてる

大阪狭山市 矢野 梓

周りからやさしさ貰い老い覚る
生きる事死ぬこと話題増えて来る
ミスばかり重ねて八十路坂登る
葛湯飲むふと母の事姉の事
思い出し笑い一人のティータイム

河内長野市 大島 ともこ

情熱を詰めた堪忍袋持つ
体力気力戻すりハビリ励む今
相談をしてまた迷い揺らぐ日日
スローダウン違う景色が見えてくる
美と健康保つサブリが陣を取る

河内長野市 梶原弘光

几帳面な質で譜面を放せない
ここ最近想定外を耳にせず
年輩の運転嘲うお年寄り
落ち込めば、威風堂堂、かけてます
アベノミクス カジノプランの矢を放つ

河内長野市 木見谷 孝代

野菜の値上がり汗水報われる
あくせくと生きてあの世でのんびりと
データどおり行けば寿命にまだ余裕
ほどの丸をもらって主婦でいる
家買ったとたん転勤子の憂い

河内長野市 黒岩 靖博

今の俺明日につながる道しるべ
鎧脱ぎ心ひらけば俺の顔
口惜しさを励みにかえて待つチャンス
不死鳥の夢がかなえと初日の出
戦争と平和で生きる幸不幸

河内長野市 谷 久美子

二度と無い人生今が正念場
迷路から抜けて明日は花咲かす
仲間達とはめを外した旅の宿
人生の旅は夫を道連れに
紅の色少し濃くして明日を待つ

河内長野市 辻村 ヒロ

老いしらず主婦のおしゃべり無限大
話すたび手柄の枝が伸びている
息合わせスローに漕いだ夫婦船
マンネリの時間忘れるメロドラマ
自信あった体力気力かくれんぼ

河内長野市 藤塚 克三

老後の智慧慣れた火かげん水かげん

二人暮らし心段差でけつまずく

余白だらけの日記懲りずに来年も

悪友こそ良き理解者との歳で

教育者も酒が入ると赤ん坊

河内長野市 村上 直樹

日課です酒と畑と妻の秘書

主夫業の仕上げはいつも風呂掃除

ベテランに大ベテランと煽てられ

大名気分タグ付き蟹のフルコース

きつと懸かるぞ戦争のない夢の橋

河内長野市 山岡 富美子

バスワード私をどこへ連れてゆく

焼きたてのパンが匂って小春日に

構内をお洒落なベビーカーがゆく

街の冷え路上ライブが灯を点す

真実というのはなぜかほろにがい

河内長野市 山室 光弘

人生の終り見えても消えぬ欲

四世代同居家族の鍋料理

天使だった母の記憶は割烹着

天使と悪魔妻は上手に使い分け

尊敬が愛に変わった分岐点

岸和田市 岩佐 ダン吉

大勢に媚びずに骨を見せなさい

単四で開くでっかい広辞苑

ていねいな説明軽い言葉だな

列の中いつもひとりが空を見る

摘花するひとつひとつが汗だろう

岸和田市 雪本 珠子

靴を見て人間性の出来を知る

猫と住み人生観が変わりだす

湯豆腐でひっそり過ごす京の宿

待ち惚け見上げた空に流れ星

愚痴不満ノートに書いてガスを抜く

四條畷市 吉岡 修

大法螺と言うけど夢のかけらです

一枚だが自由自在の舌がある

コピートした噂に尾鰭つけておく

大国はいくつも顔があるらしい

黒メガネ取ればまあるい目が笑う

吹田市 太田 昭

玉ねぎを剥けど真実まだ見えず

七度目の酉年だとは伏せておく

楽しみながら今日も生きます凡夫婦

自然界まで狂わせている人の欲

カレンダー捲り余命が一つ消え

吹田市 木下敏子

紅葉の庭ほんやりと独り占め
スクワットして温もったいい笑顔
長寿国の中で私も息してる
山茶花が私の方を向いて咲き
年齢は忘れていきます歳の暮

吹田市 須磨活恵

弱音吐く私を叱咤する私
小さくて強くて可憐福寿草
拘泥を捨てよと冴える冬の月
少しづつ出不精になった冬帽子
ほころびを繕っておく笑い袋

吹田市 野下之男

好きな事言うて世界がとおすかな
一族を愛しすぎるは皆同じ
よくやった氷上に咲く笑顔です
可愛いねたまには歌手のコマーシャル
どうだと問いかけているイルカの目

吹田市 山本希久子

どの顔も羽ばたいている年賀状
パーツみな揃い迎えるお正月
八十路を生きる真剣勝負だな
いさぎよく脱帽スマホ手に余り
信心も観光も行く太鼓橋

高石市 浅野房子

また一つ年を取るのだしんどいな
百人一首一人でもやるお正月
その昔家でお餅をつきました
一人分ですがお節は作らねば
痛いのも痒いのも何かの罰ですか

高槻市 井上照子

おーいお茶言っても自分でいれて飲む
物忘れ増えて狭まるお付き合い
うまそうに水飲む男たのもしそ
娘の介護感謝のことばのみこんで
バラリンピック為せば成ること知らされる

高槻市 指宿千枝子

湯の宿で汚れを流す年の暮
年忘れ女ふたりの牡丹鍋
人ひとのウオッチングで待つホーム
人は他人わたしは私であるがまま
巡り来る八十二歳 春を待つ

高槻市 島田千鶴子

モノクロの風景君のいない街
決め科白のようにドクター加齢です
頬杖をついて聞いているポプデイルン
観点がずれて心が読めません
アイディアはさっぱり文句なら言える

高槻市 初代 正彦
急ぐことないがさつさと片づける

二歳児の夜寒に耐えた命の灯

出番ないマイナンのぼやき節

ボンコツの四駆まだまだよう棄てぬ

米朝の古典落語の語り口

高槻市 杉本 義昭

百歳の笑顔に時が刻まれる

居酒屋に酸欠の雑魚浮かんでる

ドキドキのページに付箋貼っておく

奥の手は入院という隠れ蓑

ファミレスでずらり並べる飲み薬

高槻市 左右田 泰雄

わだかまり溶かしてくれた缶ジュース

寝返りを打つ潮時がむづかしい

輪をえがき別れを惜しむ渡り鳥

人影に瞳を凝らす霧の朝

虫すだく夜道をひとり靴の音

高槻市 富田 美義

それからを趣味と暮らして恙無し

どう暮らす追加予算の無い宅は

物件の手抜き見つける大地震

年金の暮らしもネタが細くなり

左遷地で踊り覚えてきた手足

高槻市 富田 保子
家計簿に何を削るか聞いて見る

家中を清め今年も無事に終え

てんこ盛り裕福そうな市場カゴ

ベッピンさんなのに残念箸使い

この世では言えぬ本音を遺書に書く

高槻市 原 洋志

こだわらずフリーサイズで生きている

どんでん返し期待しているエピソード

猫の手も借りずにすます冬仕度

年の瀬に心の奥もすす払い

独り寝の聖しこの夜雪しぐれ

高槻市 松岡 篤

後継げぬ墓の墓場が要る時代

先生が生徒にスマホ教わって

金の卵出では帰らず過疎進み

末っ子も赤子抱くさま母らしく

午後の五時遊びのマップ出来ている

高槻市 安田 忠子

多事多難の二〇一六年も過ぎ

一泊旅行話がつきぬ三姉妹

気持ち良い独りぼっちの露天風呂

みっちり頭に入れて直ぐ忘れ

怪しげな足音ついてくる夜道

豊中市 藤井則彦

繚いた古典に浮かぶいいヒント

沈黙を一人楽しむボブ・ディラン

何かある妻からバレンタインチョコ

チームプレーで流す涙は拭うまい

ニッポンよりやはりニホニウムという名

豊中市 松尾美智代

脳トレは三日後れの日記書く

他愛ない話して気分変えてます

友と会うやさしい風に包まれる

沈む気分ヨイショと上げるロゼワイン

降り立てばふる里の駅風ばかり

豊中市 松村里江

ジングルベルに買物客もおおられて

今年またサンタの役を果たせ候

自画自賛デコボコ坂を越え卒寿

浮世です吐かねばならぬ嘘もあり

サンタ役神にお命返すまで

豊中市 水野黒兎

しとR小学生が聞き分ける

見つけたぞチリメンジャコの中にエビ

こつてりの後は茶漬けでしめくくる

ささやきは波紋となってまた戻る

むき出しの闘志に勝る沈着さ

富田林市 片岡智恵子

つらい時逃げよう恥では無いから

仲直りできる笑顔に気を許す

三猿で丸く生きるも息づまり

老いてもう坂の長崎へは行けず

ドライだな遅刻をしても悪びれず

富田林市 関よしみ

鐘の音にすべて洗って無に晒す

漫画から学んで背負う歴史跡

春さがし寄り添って来る赤い靴

さよならのドラが濃霧の向こうから

揺るぎない心を亡夫の床柱

富田林市 中村恵

花束を抱えたままで不意の秋

こがらしは私の冬の応援歌

一言も文句を言わぬ影法師

名もない人にもそれぞれの歴史

負けましたいっそ清清しいほどに

富田林市 肥山一文

飲み会で冗談だけで盛り上げる

飲み会で話の腰を折る上司

よっこらしよ重たい腰が歳を知る

いやなこと知らされている二枚腰

腰伸ばし今朝もゆっくり三千歩

富田林市 山野寿之

バースデー鳴く宿差し向い
取れ立ての刺身と地酒今日の幸
アルバムのモノクロ写真青い僕
正座して妻の正座に身構える
ちゃん付けで呼ばれ昭和へUターン

寝屋川市 伊達郁夫

優しさにポロリと貝の口開く
古日記過去を悲しいほど喋る
キムチ鍋突くと冬が笑いだす
余白にはバラ一輪を添えておく
僕にだけ光ってくれる星がある

寝屋川市 籠島恵子

おせち料理お尻たたいているチラシ
融通は持ち合わせない寒卵
ブランドと言われましても無関心
虹が出てますよとメール二通くる
あやとりの名人ですと孫自慢

寝屋川市 富山ルイ子

切り取り線後悔をすることばかり
十二月気ばかりあせり手はお留守
役に立つか役に立たぬか傘寿すぎ
こわされた地藏90罰当たり
年末に年始痛みが出ぬように

寝屋川市 平松かすみ

悪い所みんな直して黄泉の国
お幸せだったでしようかデスマスク
逝く時も私の趣味の邪魔をせず
質問へ字引を引くと論された
ご安心下さい朝昼晩を食べてます

寝屋川市 森茜

菊ほめて通りすがりの輪ができる
とんとんとん木枯らし屋上へと駆ける
白鷺が啄む街の用水路
エプロンをきりとさあてお晩菜
抽出しに前略ずつと畏まる

羽曳野市 安芸田泰子

生きている証届ける年賀状
落葉掃く風の気儘を恨みつつ
冬眠の熊羨まし朝の冷え
一年の計病まぬこと生きる事
決心がつかぬ歩幅は狭くなる

羽曳野市 宇都宮ちづる

サンタ服着せられチワワ散歩する
お歳暮に自分で買えぬ酒届く
若者が使う略語でボケ防止
メールでは見えぬ体調声で聞く
座敷まで届く陽射しに昼寝する

羽曳野市 徳山みつこ

毛皮より温い亡母のちゃんちゃんこ

健気な足跡わたしを褒めてやる

守っている気がふわり囲まれていた

長生きへじわじわ嫌味いう政治

会者定離綿毛になると決めました

羽曳野市 中川ひろ介

厳冬に川柳ひとつ灯を点す

おでん鍋継ぎ足し残る去年今年

朴落葉我が行く末を見る様な

時雨闇はんはん時計五時を打つ

耐えながら春の兆しを待つ雪野

羽曳野市 永田章司

赤ちゃんの無心の笑顔打算なし

一善を積んで功德を待つ余生

典範が生前退位妨げる

綱取りの立場譲れぬ意地を見せ

次の一手コンピュータに聞いてくる

羽曳野市 藤原大子

物忘れカバーしている日記帳

心広くなれば私が救われる

モズが鳴く孤高うらやんでる私

忘れてく事に馴染むか抗うか

家事終えて一服のお茶この至福

羽曳野市 三好専平

月並みであるが月詠む月夜です

トロ寿司に集りべらべら中国語

トランプを真似て子供があばれだし

テレビだけしあわせそうに笑ってる

迷い箸やっぱり河豚の上にする

羽曳野市 吉村久仁雄

性善説に生きて勝ち負け気にならず

ベテランと言われ引き際急かされる

習性妻へ気配り欠かさない

悔しさはさつと塩ゆでして食べる

肩肘を張りすぎ直らない猫背

東大阪市 北村賢子

散歩道目が合う犬に会釈する

なにごとがあるのか長蛇出来ている

進む退く今も自在に動く足

刻まれた皺にそれぞれ生きた道

美しく年を重ねた同期会

東大阪市 佐々木満作

情報の過多に真実埋もれる

美辞麗句結論見えてこぬ議会

おぼろげな知ったかぶりは恥をかく

菜食をベースに養生のメニュー

きままるの苦の凝縮にある笑い

枚方市 海老池 洋

明けまして鳥百態のおめでとう
長い夏秋を跨いで早い冬
インフルの鳥にはすまぬ酉の年
脳脊に励む私の五七五
時刻む音がせわしなくなる老後

枚方市 小林 わこ

なるようになってまたまた冬が来る
新米届く作り手知って味が増す
誰に何といおうと大好きなんです
言い張ってストレスずんと胃に重い
聞こえないふりして逃げることにする

枚方市 丹後屋 肇

雪囲い覗けば温い寒椿
瀬戸遊覧果てに神々しい落暉
仏壇と対座している走馬灯
裾隠す富士の気品にまた惚れる
最終章真人間にはなり切れず

枚方市 寺川 弘一

ワンルーム一輪挿しは造花です
善悪の数読んでみる不眠の夜
見せかけはみんなと同じことをする
内視鏡こころの濁り見えますか
飲み放題は限界を忘れさせ

枚方市 二宮 山久

脇役に徹しきつてる晴れ舞台
トンネルを抜けると待ってた落し穴
同情はするがと友は突き放し
病み上がり登り切れたぞ鞍馬寺
靴のひも締めて弱気でない男

枚方市 二宮 紫鳳

鞍馬路の紅葉はさんだ日記帳
木漏れ日に紅葉映えて古都ウオーク
身の丈にあつた幸せ老いの午後
彼岸花大和路染めて癒し旅
ひと言が妙薬となる病み上がり

藤井寺市 伊藤 アヤ子

不便だが返納に皆賛成し
くり返し三分間の砂時計
一枚に成った曆に有難う
忙しい師走にはそば食べにゆく
達成に届かなかつたダイエット

藤井寺市 太田 扶美代

波平さんの声が残っている茶の間
川柳を聞かされている如来さま
わらべ歌心の中に棲むメダカ
平凡が好きで掃除機洗濯機
痩せてきた命を一度裏返す

藤井寺市 高田 美代子

大阪の魅力が消えた街寂しい町だったなあ五座のあった頃何処へ消えたのか大劇もいづもやも歌舞伎座も何度引つ越しするのやら夕方の散歩は父と中之島

藤井寺市 田付 絹枝

豊洲市場見学ツアー宙に舞う我無者羅に生きて悔いなし待つ余韻張り詰めた氣力断ち切る息子の訃報紅葉に囲まれ茶菓の美味に酔う慰めは風雅を添える紅い風

藤井寺市 増井 ヨシ枝

慕情さんの句愛の深さと哀しさと二ヶ月の寒さ逢いたい人がいる雪コンコあなたの愛が醒めた日よ山茶花の咲いてる道ではっこりと義父母みとった感謝へ夫のボックリ死

藤井寺市 吉田 喜代子

塵置場カラスの知恵に負けそうで十分が長い短い感じる日姿勢がいいねなんと嬉しい褒め言葉若い日に鍛えた足はまだ丈夫此れからの丈夫な足に得る仲間

藤井寺市 若松 雅枝

小粒だが甘い蜜柑が父の便ブルまで無理に送った子が選手恒例の祖母の手作り吊し柿抽出しに期限の過ぎたバスポート夢で見たのは古い昔の人ばかり

松原市 森松 まつお

行列の窓口選ぶジャンボクジ我が街に増えているのはケアハウス休刊日朝のテンボが少しずれレジの列流れが早い両隣どうしても歯医者椅子に馴染めない

箕面市 大浦 初音

悩まない人がまわりを悩ませる古い服微妙にちがう色と型告別式風が別れを告げにくる好きなこととしている時の荷は軽い引き出しの中の過去にも挨拶を

箕面市 酒井 紀華

私も家も耐震こけぬうちしずかに動く電気自動車しのび足街中にスマホと遊ぶ金次郎迷ったら遺影の声に聞いてみる許してね仏壇の花枯れだした

箕面市 出口 セツ子

野菜もらい情も煮込んでいるおでん
減塩でお節作るのがやめにする
成長をすると遠くになる心
新年を異国で夫独り旅
不透明な一年ピリリ初暦

箕面市 広島 巴子

京都御所蔭ビイヒヨ口警護の輪
御神木まわって生気お受けする
ヨガクラブ立ち上げシニア澆刺と
忍耐の修行二時間受診待つ
豆腐ねぎ白菜常備今日も鍋

八尾市 内海 幸生

若冲の鶏が今年をこじ開けた
口出した相手が有段者とは知らず
満身創痍何故生さるかと言われても
八卦など信じかけたよ負けるまい
明日散ると決めた紅葉の深彩

八尾市 高杉 千歩

スマホ制覇三日がかりのケアハウス
自分史へひとさし指が弾んでる
九十の指が踊って長メール
ひとさし指昔話が大好きだ
看取られる姿ありありケアハウス

八尾市 寺川 はじむ

喋るまでうつとりさせた兩宿り
九条が突っ支い棒を探してる
美しい嘘だこのまま酔うた振り
休耕田スマイレが背伸びする平和
一回のために一年眠ってる農機

八尾市 宮崎 シマ子

隣組みな老いたりな五十年
寝正月してたら脳に微
のびのびと返事来たのは期限切れ
妻の留守オーイお茶と言うてみる
クリスマスに騒ぎ正月おとなしい

八尾市 村上 ミツ子

十二月十三月はないのです
十二月ただ忙しない忙しない
好き嫌いスキスキクライ十二月
十二月娘のハッピーバースデー
いろいろあつてお役所を見直した

八尾市 山根 妙子

カレンダー一枚めくり雪景色
過去帖に折節想う吾子のこと
ちぎれ布パッチワークで生き返る
日を捲りせわし振りして出かけてる
神楽鈴心の鐘も打ち鳴らす

大阪府 米澤 俣子

ずわい蟹すたこら冬がやってきた

ぎりぎりの決着に顔出す諭吉

聞き上手他人に見せぬ胸の内

休まずと前頭葉が固くなる

老人と世間話ではやる医者

神戸市 上田 和宏

木守り柿鳥も掟守ってる

大阪でまた万博やブラボーっ

脱ぎ捨てても文句を言わぬ妻がいる

普段着で晩酌できるゆとりです

水の泡ビールの泡に癒される

神戸市 能勢 利子

幸せはぼうつと向うに見えている

ルミナリエ今更止めれない神戸

暮れの風邪何もするなと言うてはる

諭吉だと没収されるお年玉

生きてるぞとりんご送ってくれる友

神戸市 細川 花門

泣き笑い瞳の中にある孤独

メタボにはならぬ野菜と麦ごはん

加齢臭隠す男のコロン買う

別れない別れられない恐妻家

お月さま表の顔は知っている

神戸市 松井 文香

錯覚でもいいの幸せなんだから

愛されているので愛しつづけます

健康と絵馬に大きく書く二文字

いいですよ自慢話は聞いたげる

顔よりも心磨けと言う鏡

神戸市 山口 光久

妻手術何もできずに手を合わす

正座して色よい返事待っている

どうしても自分に甘くなる愚か

趣味一つ心の隙間埋めている

寂しいとふと古里が目には浮かぶ

神戸市 山口 美穂

もうひとりのわたしが愚図へ指図する

万歩計今日はお休み降りつつく

つるし柿へ魔法をかける寒気団

長生きは駄目と年金下げられる

回り道も失敗も糧ノーベル賞

神戸市 山崎 武彦

夕陽けてひと日の無事を折りたたむ

真心は通じたらうか毛糸編む

ひと言が優しい風になる介護

ちぎれ雲ひとは生まれて逝く定め

ちゅらの海ジュゴンは哭いているのです

明石市 糀谷和郎

尼崎市 長浜美籠

しがらみを解くと私も無垢の身に
手が届きそうで届かぬ夢続く
吐く息は水の中では丸かった
十字星亡父は瞼の裏にいる
ずれる日はちよつと支点を変えてみる

芦屋市 黒田能子

神様の試練であれば仕方なし
プラスマイナスバランスとっている夫婦
アンコールに応え長生きするつもり
都会に疲れ田舎暮らしに憧れる
憧れの恩師今でも胸の奥

尼崎市 市坪武臣

身を慎むもうすぐに喪が明けるから
町工場身を削ってる音がする
ほとんどの場合秘密は漏れてます
月となら切ないことも話せそう
余熱もつ名前は胸に包み置く

尼崎市 加川靖鬼

ポランティアの指へ容赦のない荊
一人づつ生まれひとりで去るこの世
若冲の羽根に隠れていた産毛
言い過ぎて言い足らなくて眠れない
筋骨隆隆猛暑を耐えた冬木立

焦るまい肌に馴染んで来た結城
一区切りつけろと月が冴えている
メールより葉書にします愛をこめ
行く先は告げずに木の葉風にのる
笹の舟母の手順を思い出す

尼崎市 山田耕治

芒原どこかに狐いるような
保母さんが眠い保育所の昼寝
お守りが縫い込んだある作業服
十年を生きた金魚のお葬式
原子の火重たいツケを負う日本

加西市 金川宣子

独り居に家電言葉と会話する
旅先の地酒をまずは買って置き
コンビニにおふくろの味買いに行く
喜寿過ぎて傘寿目指してジム通い
老いの知恵たまには出して見直され

川西市 山口不動

枡目埋め恋物語創ってる
先生の白寿を祝う傘寿達
もういいか生命保険解約す
湯舟から今日一日の幸想う
通帳は支払欄に傾いて

篠山市 北澤 稠民

生きる道死ぬ道思う冬木立
面影を思い浮べて賀状書く
吹く風に任せた背中運が押す
お正月お神酒飲みつつ農を練る
求めるより与える側にまわりたい

篠山市 酒井 健二

シガラミがバネと成るほど強くない
非正規が歌い空しいメーデー歌
人工の知能に勝てるはずがない
晩学の健康学で命乞い
歯が抜けて朽ちていくとはこのことか

篠山市 酒井 真由

ひらりと塀へ口惜しかったら来るがよい
なんてことでしようと三毛が尾を立てる
ため息がばつと笑顔に変わるとき
歳月が奏でる愛のシンフォニー
ノクターンふたたび海の寒きいろ

三田市 足立 つな子

橋渡しの巡り合いから五十年
やっこさ好き嫌いない夫婦仲
ポストまでやつと気がつく休刊日
眼を細め重くなったと孫を抱く
お福分け向こう三軒両隣

三田市 石原 歳子

暖かい冬の日差しに虫が這う
朝一番窓を開けたが視界ゼロ
独りぼっち今朝も元気でキャベツ切る
私の元気はキャベツから貰う
独りでも正月は来る忙しい

三田市 上垣 キヨミ

すくやかな笑顔うるわし愛子さま
束の間の名画に出合う雁の列
真珠湾長い眠りを起こされる
除夜の鐘ウルサイと言う人のエゴ
酉年の暦に託す年賀状

三田市 上田 ひとみ

そんな私も大切なわたしです
タイトルをつけるべきだと言われても
傷つけた数わたしの贖罪と
いとおしい何度も書いてまた消して
読み進むあなたの今を知るために

三田市 尾崎 一子

いい夢を見たのでしょうか笑い皺
万物の命育む地の恵み
凡でよい生きる命があたたい
ナースにも母にもなって孫の風邪
おだやかに老いる命を慈しむ

三田市 北野 哲男

気安めのサブリいろいろ試して見
物忘れ検診受けに行くつもり
盃にさざ波の立つクラス会
携帯と言えばラジオのことだった
掛け軸の尉と姥とのお正月

三田市 多田 雅尚

飲み会を外し病気にされた僕
湿布にも使用期限があると知り
生態を壊し住み着く外来種
偏差値に自分の進路預けられ
虫の音も聞かず木枯らしやって来た

三田市 野口 晶子

凍る滝なげく紅葉を閉じ込める
熱っぽいため息まじる街ネオン
しぶく滝産声みんなたくましい
言わなけりゃ還付されない税となる
本物の核あり僕は動じない

三田市 福田 好文

今の世に干支が廃らぬ訳を聞く
追突をされた日に買う宝くじ
プチ整形したら男が寄って来た
生前葬終えて十年まだ達者
欠席で存在感が増す男

三田市 堀 正和

涙そうそう空も海も蒼かった
国道が米基地の中通る島
グランドビュー名前前立派なホテルだが
人間が面倒になり冬籠り
筋書きは神様まかせよろしくね

高砂市 松尾 柳右子

庭の花活けて部屋中香り立つ
青空に家族同士でドライブに
高砂市少し慣れたか買物に
孫が来て背が高いねと見上げてる
二人居に主の元気が励みなり

宝塚市 田中 章子

猿から鶏へ上手くバトンが渡せない
感謝していただくころ大切に
正座してしほり出しても句はできぬ
逃げた句を追いかけている小半日
駅中の蕎麦屋に入れますひとり

西宮市 秋元 てる

軍配は今も男だ白眉の美
にこにこスウィッチ切り替え輪の中へ
年寄りで見縊る勿れ歯は丈夫
相談と言うが聞いて欲しいだけ
駄句もまた生きてた証捨てられぬ

西宮市 緒方美津子

新米に感謝して案山子にも礼
安いの少ないものを選ぶ二人
虫がいるみなばあちゃんを呼びにくる
諦めが早くついたらトラファン
気まぐれな風にさまよう日本丸

西宮市 亀岡哲子

長生きは出来ぬ家系と思ったが
母さんと今の世生きてみたかった
ふる里は都会になって地下歩く
おいしいものさつさと食べておく余命
デイサービス麻雀組もあるそう

西宮市 西口いわゑ

肝心なところで詰まる一夜漬け
ウインドー覗くわたしの宇宙です
風たちに落葉のことは任せよう
トンネルは抜けた自由な蝶になる
忘却が生きる味方をしてくれる

西宮市 福島弘子

大器晩成埋もれる力信じ込む
役立った大陥没を埋める技
酔い止めはアメとおしゃべりバス旅行
レインコート犬とマダムのペアルック
子のお古とても似合うと鏡言う

西脇市 七反田順子

先を読む息子を頼る母である
行き詰まりジャンプしてみる風の向き
旨そうに落とした葉犬が飲む
ハイキング全国雨の日であった
虹が立つ持ちつ持たれつ夫婦滝

姫路市 古川奮水

部屋飾る気分で掛けたカレンダー
花電車生まれ変わってルミナリエ
瀬戸は晴れ山陰海岸時雨ている
お正月医院休診確かめる
おせちあり新年を待つ除夜の鐘

南あわじ市 萩原狸月

十五から耐えて小さな今日の幸
七五三見て来たあとの虐待死
来賓の祝辞自分を売りすぎる
選抜へ野球留学実を結び
入場の肩がきりりと歩調とる

奈良市 阿部紀子

グリークラブ験潤んで聞くOB
学祭の企画の多さに驚いた
学生がロボット操作子に教え
学祭にベビーを抱いて若いペア
トランプ家古いアメリカ大家族

奈良市 加門 萌子

ピーク時はとても行けない紅葉狩り
かつて行った所テレビで愛でている
加害者よルミナリエ見て改心を
ボランティア多くやさしい国なのに
鎌の月見れば師の句とかの姿

奈良市 辻内 げんえい

終活を早々済ました元氣
家事ならば何でもできる留守亭主
秘密主義と攻める妻にもある秘密
息子宅片付けたいが手は出せぬ
百円安い物買いにバス二百円

奈良市 山本 昌代

わたくしへ私を論す独り言
おこころのままにと伸びてゆく輪ゴム
陽の匂いさせてニコニコ孫が来る
いい日だった喋り笑って孫が去ぬ
一ツ風呂浴びてゆっくり取る夕餉

奈良市 米田 恭昌

ボランティア珠玉の汗というエール
メールより彼の癖字が懐かしい
アルバムにセピア色した妻の青春
落とし物届く日本なればこそ
先斗町の浮気梨園の肥やしにもならぬ

生駒市 飛永 ふりこ

新雪に酉を見習い踏む一步
心して有限の刻使わねば
ダイエットもがくばかりで本気出ず
地蔵画になんともいえぬ慈悲がある
信念を持ってピンクのわたし流

香芝市 大内 朝子

初恋の人に逢いたい見納めに
あたたかい亡母の残したちゃんちゃんこ
日溜まりを抱いた余生の絵はぬくい
諦めていた娘に春が来たらしい
氣遣いのリップサービスから誤解

香芝市 山下 純子

文句ない嫁で息子の株上がる
若冲展一足早い干支に会う
タイトルに魅かれ孫連れ「君の名は。」
好物の歳暮の礼はていねいに
追い風を味方につけて突っ走る

桜井市 安土 理恵

半分こできぬ悩みの重いこと
親権を真ん中にしてやじろべえ
神仏に祈る時間が長くなる
甘やかな秘密もなくて黄昏れる
根性のせいか円が歪んでる

奈良市 安福和夫

パチンコで既に溢れる依存症
ギャンブル狂脱して最早二十年
取り憑かれ札束消えた夢今も
勝負師は別の世界に生きる人
大儲け必ず賭場に還るとか

奈良県 谷川 憲

紙の手帳やはり一番役に立つ
老犬とゆつくり散歩小春の日
海山が遊び場だった昭和の子
四十年いまだ救えぬ北の拉致
喜寿まぢか残照の夢追つていく

奈良県 渡辺 富子

真珠湾のみ魂へ届け反戦歌
出版の祝いへ妻と杖連れて
不機嫌な群れが行き交う首都東京
駆け抜けた戦士同志の熱いハグ
喝采だ富士を拜めた日本晴れ

和歌山市 磯部 義雄

身の丈で終らせまいと八十路坂
リスクなど気にせず進む茨道
聴診器当てれば地球温暖化
帳尻を合わせ聞いてた除夜の鐘
横綱を食っておいしい殊勲賞

和歌山市 上田 紀子

生きている証鉛筆小さくなる
お金と同様心もゆとりいる老後
風評に負けぬ女の心意気
未知数を抱えて冬がやって来た
駄目押しの後の一歩で蹴躓く

和歌山市 柏原 夕胡

観覧車ひとりぼっちで乗っている
揺れていた記憶修正ペンで消す
冗談がすました顔で刺しに来る
何となく浮いて何となく沈む
かくれんぼですか棺の中の君

和歌山市 喜田 准一

酒はもう飲めぬがめしはまだ食える
八十路には八十路生き方暮らし方
逆走は法度高速人の道
本論と外れた所にある本音
ぶっちゃけてカネが大事に異論なし

和歌山市 楠見 章子

ドッコイショと言えば体がついてくる
おしゃべりが惚け防止とは有り難い
マンションがニョキニョキ故郷他人めく
まだ見たい秘境があつてスクワット
恨みっこ水に流して旅に出る

和歌山市 坂部 紀久子

毎日が赤信号で暮らして
うちのストーブ焼きいもの匂いする
おしゃべりの輪に咲き出した趣味の花
辛抱をするのもお付き合いのこつ
脳味噌を掻き混ぜてます終夜

和歌山市 武本 碧

兎小屋だけ大きな窓がある
トランプで占う未来などはない
飼い主のランクは問わぬマルチーズ
ありがとう空気のように居てくれて
色褪せぬように五感に水をやる

和歌山市 玉置 当代

何色を足そうかわたし未完成
匙加減亡母のレシピが生きている
何やかや言っても後のない親子
古傷に触れると今も疼きだす
逆上がり出来たと孫の上機嫌

和歌山市 土屋 起世子

後からやさしい影に包まれる
まだ若いよいしょと言って一人立つ
ブライドを捨てたら杖の助けいる
蟹の足ほぐして嫁のおもてなし
深読みをし過ぎ小石に躓いた

和歌山市 福井 菜摘

どちらにも転がる舌にある孤独
ひと休みしたくなる日もある振子
迂回路でこっそり明日を立て直す
ひと言を控え同居の灯が丸い
やさしさに触れて未来の森が見え

和歌山市 古久保 和子

仏壇に赤いりんごがよく似合う
北国の噂を連れてくるリング
負ける気はしない夕陽が真っ赤
大掃除まずは私の頭から
ナイシヨナイシヨ私の夢は非売品

和歌山市 堀 富美子

棘ひとつ抜くと笑顔が寄って来た
日日ピーク信じて明日の絵を描く
ときめきがまだ残ってた傘寿坂
仏壇へ先ず手を合わす娘が帰る
正直な鏡がカルテ読んでいる

和歌山市 松原 寿子

頑張って半端な夢に灯を点す
柔らかい言葉でいつも癒やされる
山ひとつ越えた苦労を噛みしめる
寒風の中はいはいと和む趣味
謎いまだ解けず眠ったまま日記

岩出市 藤原 ほか

とりあえずスタートライン立つてみる

キラキラと生きて感謝の仕舞風呂

名言を拾い集めて生き延びる

断捨離をしては思い出拾つてゐる

一休みすると妙案沸き上がる

海南市 小谷 小雪

おしゃべりも感謝を言えぬまま別れ

肩ポンの音が発奮させたのか

軽やかに君とステップ踏んでいる

冬の日に二者択一を迫られる

ありがとうを小さな声で水に言う

海南市 堂上 泰女

心寒くて一杯に買う欲しい物

気儘な娘と思いやりある息子

ひもじさを知らぬ娘の捨てっぷり

断捨離は止めてと思ひ出の衣服

クリスマスサンタになれる孫が来る

紀の川市 宇野 幹子

自画像をゆると満たす水の音

遮断機を跳びこえてゆく反抗期

煮ころがし揺すって鬼の角をとる

性善説信じて渦の中に立つ

格差社会へ浮きあがれない深海魚

紀の川市 北山 絹子

新しい器へ夢を天こ盛り

なつかしい人に出会った始発駅

ストレスを拾い集めてゴミに出す

ユニークな顔で会社の人気者

この街に長寿の数も増えている

紀の川市 楠原 富香

妥協する事も大事な途中下車

やりくりが上手な妻の隠し芸

ライバルに弱音を吐いた日の不覚

ケータイにはまり見えない水たまり

地球儀の上で探している平和

紀の川市 辻内 次根

靴下の穴で現在地がわかる

初心者の頃の真が留守になる

懐かしい一番鶏という時刻

忘却に恨み辛みもいれてある

音の無い部屋で手紙の整理する

紀の川市 山東 日出男

自分にも人にも甘く生きてます

電線に憩う雀のメヌエツト

人の暮らしをジッと観るカラス

ババゴリラ一家を守る大きな背

猫可愛がりされて不審を抱く犬

田辺市 岡本 昇

看護師は笑顔のプロだなと思う
何よりも三食こなす胃に感謝
老い坂は謙虚に人の世話になる
すんだこと忘れる主義で生きている
年の瀬はゆっくり渡ることにする

橋本市 石田 隆彦

福祉課は温かそうで冷めている
人間の心を染めて散る紅葉
余生へのスタートまずは趣味探し
数の力強行という民主主義
わが恋に涙を誘う名場面

鳥取市 池澤 大鯨

カメレオン変色途中隙だらけ
平常はジーンズそと出勝負服
不精でも外出時にはヒゲを剃り
毛染めして心もそとも若返る
いでたちにあわせて動き変えている

鳥取市 加藤 茶人

大根は葉っぱも付けて売ってくれ
生と死が隣合わせの運不運
子は便りせぬが燕はまた帰る
マイナンバー俺もひとりの日本人
四季の香や景色を愛でるウォーキング

鳥取市 岸本 宏章

蔵の町ブルーシートが痛ましい
健康長寿伸ばす散歩と川柳と
百までも動けと子らに使われる
馬鹿になる芸なら多分地で行ける
カジノなど無くても誰も困らない

鳥取市 倉益 一瑤

貧乏神が知恵も力もくれました
他人のような顔で夫とすれ違い
ポケットに夢のかけらがまだあった
夕暮れに好きと聞いたは耳鳴りか
遠景に灯りが見えるから歩く

鳥取市 坂本 とも湖

殺生はするなとアラうなぞ説かぬ
秋の雲愛と憎乗せどこへ行く
人間の弱さ予言が無視できぬ
渡り鳥戦の国を見てエンド
しがらみも恋も故郷に捨てて来た

鳥取市 棚田 大

メリハリは明日からだと今日も言う
実りの秋求めすぎたか疲れ果て
マイナンバー覚えたはずが出てこない
ゼロからの初心忘れず出発だ
白紙撤回そういう奴の芯見えぬ

鳥取市 谷 口 回春子

気づかない心の揺れは震度七
もの言わぬ孫は涙で訴える
菓子袋の音が目覚まし孫三つ
じつと見る孫の瞳に嘘つけず
孫の守若くなったり歳をとったり

鳥取市 永 原 昌 鼓

ご意見はなるほどそうと聞いておく
世直しの御意見ならば聞いてみる
年賀状今年のけじめまだ出来ず
戸締まりをチェック一日の締めくくり
秋日和飛行機雲がまだ消えぬ

鳥取市 中 村 金 祥

一冊の絵本人生変えてくれ
元気ある声に應える気力持つ
世界中びっくりさせて夜が明けた
赤瓦ブルーシートは似合わない(倉吉)
たどり着く先は極楽豆を撒く

鳥取市 夏 目 一 粹

別れると言われ吐く息白くなる
死ぬことを考えさせるお葬式
落ち葉には裏も表も運まかせ
がんばってありがたい光景だ
身から出た錆みがけども光らない

鳥取市 西 川 和 子

病床の文字にならないありがとう
母の文字何度読んでもほっとする
選り好みでは無いけどちよつと手が出ない
なんとなく頭痛の続く空模様
余震でもないのに身体まだ揺れる

鳥取市 平 尾 菜 美

三代目伸るか反るかの正念場
謂れなき砦我が家の城にある
介護綱子等と紡げば太くなり
門の前立てば砦の風が吹く
今日もまた得休知れない世相切る

鳥取市 福 西 茶 子

古い川柳同感だけど笑えない
免許証返すと句会にも行けず
電話口老女は偽の晴れマーク
早口の心経父母に届いたか
千分の一なら乗ってみるチャンス

鳥取市 前 田 楓 花

人生の旅の途中で猫を飼う
幸せの形か猫が目を細め
石段を登ると猫がお出迎え
隣より少し遅れて陽がのぼる
人間をチャンと仕上げて逝くつもり

鳥取市 山下 凱 柳

かいつまみと断りながら一時間

世界中トランプ風を読み違え

愛と憎乗り越え生きて黄泉の国

頭の回転流石に年だ鈍くなる

年貢収め飲む打つ買うはもう止めた

鳥取市 吉田 孔美子

幸の一つ同級生と云う他人

子の無関心他人の方がましだ

看ると云った娘を深く観るようになる

玉子かけごはん独り居見せつける

スーパームーン恋は海峡へと走る

鳥取市 吉田 弘子

有頂天ほめ殺しとはつゆ知らず

比較せず私色で楽に生き

生き上手近くの他人大切に

どこ行っても老いの二文字が離れない

縦書きは日本文化の誇りです

倉吉市 猪川 由美子

スマホ無い昔の恋を懐かしむ

ウン十年生きてまさかの被災過酷です

高齢ドライバー車離せず事故多発

トランプ氏で日本の暮らし変わるわな

政治家は隠し上手で演技者だ

倉吉市 牧野 芳光

思い出がグラリと動く時がある

背伸びしてみても何でもない景色

勝負しろ勝負しろよと波が来る

赤い血が苦労話の中にある

けだるさが降るふる日曜日の午後

倉吉市 山中 康子

人並みに動けば婆はクタクタだ

ミサイルで脅す手口はこりごりだ

今コケタラ母さんどうなる座つとれ

限界の糸がぶきつちよだと笑う

いつの日かアナタの傍に埋められる

米子市 池田 美穂

鐘に苦情煩惱何処に捨てようか

酒税一律これからはチャンボン派

ボルトより速く駆けてく師走どき

授賞式盛った頭が重かった

ノーベル賞取らせる妻が理想です

米子市 後藤 宏之

国民は黒本人は白と言う

年金が色々引かれ溺れそう

二千円たしかに札はありました

都議会の椅子にゆっくり座れない

無口な父をスーパーマンにさせた酒

米子市 後藤 美恵子

十二月の梢に一葉しがみつく
隙間風決めたルールを無視してる
子との距離スーブが冷めぬよう保つ
冬將軍こたつ砦に迎え撃つ
来る年もプラスマイナスゼロ目指す

米子市 中原 章子

おしゃれして心も軽く輪の中へ
震度六落ちない梨が人気者
復興を支える消費しています
冷蔵庫牛乳卵切らずに
人間の根っこ変わらぬ回帰性

米子市 成田 雨奇

日本の空気だんだんおかしいぞ
チャップリンの後ろ姿を忘れない
他人の目ばかり気にした母だった
意識した時から透明度は落ちる
苦と楽のスーブを吸るいい味だ

鳥取県 竹信 照彦

山陰に降る雪東京に降った
エアコンがあるのに炬燵出している
炬燵にはみんな寄るからいい家族
竜巻警報に脅威感が無い
雪便り東北北海道ばかり

鳥取県 鳥越 鬼一

築百年震度6にも負けません
震度3余震に慣れてあわてない
訪ねたい元祖混浴露天風呂
軽口が大臣の座を危うくす
安全な自動運転もうすぐ

鳥取県 西谷 悦子

それなりに自由と孤独合わせ持つ
趣味仲間みんな昭和の生まれです
主婦という職があるから良しとする
大輪の菊風とダンスをしたかろう
放されてすぐ帰る籠の鳥である

鳥取県 松川 行男

銃持たすコルクの弾に糸がつき
老いたけど恋の代筆飯の種
のた打って失恋または恋してる
娘にもそういう話無しにして
夕飯よ探せば二階辞書枕

鳥取県 山下 節子

父母逝きてふる里少し遠くなる
子も孫も遠くに住んで独居です
駅名もローマ字あってやっと読め
娘の料理へたっぴーでも父は褒め
ダメージを受けて発憤して励む

松江市 小川 注 湖

地球儀回すほんま小さい日本国

爆音を立ち続け見る空平和

一直線引いて描いた未来絵図

マスク掛け咳き込む人と並び待つ

今日の会防ぐ言葉を持って出る

松江市 川 本 畔

残菊の淫らとわたくしのみだら

塵芥残しお舟は悠と出る

メモ拾う息子のゴルフ得点表

驟雨の中を走り続けて無人駅

俳句と川柳狭間で揺れ出したわたし

松江市 藤 井 寿 代

今年こそ坂本九になりきって

山茶花のはらり冬日はレクイエム

芒野をやっと出たのに行き止まり

萎むなと春の空気に入れ変える

美しい錯覚でした黒揚羽

松江市 松 本 文 子

生前贈与貰ってくれてありがとう

二つの顔持たねばこの世生きられぬ

野草辞典に出てない花が多くなり

ギザギザの心ありがとうと逝けぬ

錯覚は錯覚のまま逝けばいい

出雲市 伊 藤 玲 子

冬ごもりさせてはならぬ脳回路

年金で余生楽しむ寡婦二人

危機一髪やっとなで老いを知る

我が家が一番炬燵の守が似合い出す

綿々と尼師の句会繋ぎつつ

出雲市 岸 桂 子

ひとつふたつと座右の銘を捨てはじめ

喪中札町の大人を黙らせる

ポケットの中にわたしを庇う金

秋の辞書淋しい文字を引いている

平凡な暮らし沸騰点がない

出雲市 小白金 房 子

誕生を祝う似顔絵貼っておく

トップなど言わぬドングリよく笑う

絵馬堂で母子思いの鈴ふるう

箒の目神と対話の朝を掃く

短日へ灯りが点る団地窓

雲南市 松 本 昌

ボン菓子意外に美味しい八十路

孫と食うボン菓子昔と違う味

遷宮が済めば静かな村祭り

世代交替零細企業ままならず

百均はメイドインチャイナばかりなり

雲南市 松本 はるみ

山里の道はどこまで散る紅葉
その刻のわたしの前に母が居た
昭和ひと桁得がたき世情を今にして
これが夢これが現と嬉しくて
晩秋の斐伊川ゆったり音もなし

島根県 伊藤 寿美

捨てられぬ亡母の文宮の軍事便
箝口令敷いて優しい嘘をつく
削除キー老友の名一人消す師走
九回裏わたしの儀打が役に立ち
後期高齢だんだん肩身狭くなる

岡山市 丹下 凱夫

楽しい日になるぞ朝から柿貰う
楓林の月は寒むざむとしていた
ポケットに三千院の散り紅葉
じろじろと見てたら熟柿落ちてきた
MRI居眠りしてる間に終わる

岡山市 藤成 操江

諦めぬ去年と同じ夢を抱く
まだいける化粧濃い目に初鏡
目標はちょっと低目に古稀の春
聞き上手忘れ上手を年頭に
抱負書く三日坊主で終わるとも

岡山市 前田 恵美子

娘とは影で支える黒衣なり
癌告知されて一人前となる
部分麻酔「痛かったなら言ってよね」
食べて寝ておしゃべり付きの治療宿
猫たちもきつと私を探してる

笠岡市 藤井 智史

アデイショナルタイムで愛を勝ち取ろう
君の手でカスタマイズをされるボク
お抱え地藏軽い軽いと自己暗示
たまゆらもマッサンも好き酒も好き
曇天に向かつて一撃を放つ

岡山市 池田 たか子

まだ翔べる夢は一途に羽繕い
新芽だく裸木に母を重ねみる
体操の十分今日が動きだす
二刀流もう使えない鍋こがす
くもの巣の露は真珠のティアラかと

岡山市 高岡 茂子

妖怪にまねかれて行くハルカスへ
足止める地獄の絵巻国宝だ
怖い顔なぜか可愛いエンマサマ
水木しげると語り合いたい帰路のバス
八十路きて陽気な妖怪はばめざす

岡山県 田中 恵

初恋は野菊の束を呉れた人

ジョギングのあの子待ってる猫じやらし

豚汁を鍋ごと提げてやってくる

塩辛い声で「おふくろさん」歌う

障子の灯オンリーワンの温かさ

岡山県 山縣 のぶ子

夕暮れの空いっぱい母がいる

宙を舞うもみじ押し葉に甦る

苺大福かぶれば冬が満ちて来る

ハルカスの妖怪と見るビルの海

ひとまわり大きくなった春の子ら

広島市 岸本 清

極楽は車で五分露天風呂

凹んでる僕にだあれも気づかない

呑み込んだひと言がちくちく痛む

抒情歌に小節が入る演歌好き

政治家に持たせたい嘘発見器

竹原市 石原 淑子

自宅介護二十四時間体制に

二ヶ月のお地蔵様のニット帽

本当の宝を孫に気付かされ

のんびりと生きようルール変えてみる

カープ優勝なんとひびきのよいことか

竹原市 岩本 笑子

元氣下さい薬いっぱい飲んでます

甲狀腺術後の声をご存知か

体重が戻らぬ付き添い三ヶ月

ミカンむくもう正月が来るんだね

静かに静かに雪は黙って降るのです

宇部市 平田 実男

陰日向なくて貧乏しています

ちよい悪のいるグループが生き生きし

食う物も食わずオレオレ詐欺に遭う

初夢はやっぱり富士の山がいい

盆もない正月もない救急車

防府市 坂本 加代

つい走り転んで齢を思い知る

土俵際足の指先砂つかむ

チャン付けで呼ばれるうちは色っぽい

ジバングの旅に目覚めて地図なぞる

流された三つの願いまだ胸に

東かがわ市 川崎 ひかり

もし翼生えたら亡夫に会いに行く

丁寧に畳む明日へ翔ぶ翼

母の樹でゆっくり翼休ませる

ボジティブに生きる時計のネジを巻く

さあ春だ喜寿の翼を広げよう

松山市 栗田忠士

お静かに私只今脱皮中

老化ですと言われ術ない老いの耳

ぎりぎりという人生の処方箋

ほんとうにあるのでしょうか加齢臭

金平糖尖ってみてもすぐ溶ける

松山市 古手川 光

錦秋の故郷丸ごと美術品

年末の掃除も手抜きして済ます

妻病んで解った広い守備範囲

半分っとして食べる相手が居てくれぬ

病院は繁盛少子高齢化

松山市 宮尾みのり

路面電車頑固は譲らない城下

オールマイティーその完璧に落とし穴

パソコンにかかればみんな丸裸

息子恋し恋しと孫と三回忌

食べさせて着させて祖母という役目

大洲市 中居善信

平均寿命越えて何するみな余白

告白をするか最後のクラス会

血の検査くらいで医者が大丈夫

凄いい男だ翔平という男

胃カメラもCTも撮りお正月

西予市 黒田茂代

朝昼夕柿の落葉を掃く日課

スーパームーン二度と見られぬのに曇り

色も味も濃いいわが家の無農薬

闊歩する脚力寂しいが消えた

鈍くさいわたしの一日は早い

高知県 小澤幸泉

孫と子はまだかまだかと十二月

山茶花のひとつ淋しいボクの庭

走り過ぎ空しさだけが胃に残る

七十余年義兄は戻らぬ鰯雲

信教と愛と希望を手に入れる

唐津市 坂本蜂朗

百薬の長に感謝をする傘寿

親の介護済んで傘寿に迎えられ

べからずの籠で飼育をされ傘寿

お医者好きにしたいのです傘寿

コップ差し出すママの二の腕

唐津市 山口高明

姑さんと両手合わせる鬼子母神

テレビ見てさえも涙腺弛む父

当事者で無いから拉致も無関心

エレベーターに閉じ込められた日の恐怖

米寿でも虫歯一本無いわたし

熊本市 杉野羅天

冬露天胸にもみじと言う風情
ファッションチェック女性同士は抜け目なく

貧富の差民はいつもの指定席
孫自慢ない人も聞く世の無念
尖っても旬は一時だけのこと

熊本県 岩切康子

隣席と対話していて羽田着く
誘惑の熱心さには負けました
欲しい頃届く物ある ああ不思議
免許証返すか迷う八十路坂
諦めて心身共に楽になる

沖縄県 森山文切

人間に真似をされ続けるゴリラ
空っぽになるまで耐えた蟹の爪
ふしだらなかんけいのまま死ねません
ばらばらのままで眠れる森の美女
下向いて帰る子供の長い影

札幌市 小沢淳

北国に湯たんぽという優れもの
政治家の辞典に消えたマニフェスト
読書百巻凡な男も目が肥える
四捨五入民主主義とは恐いもの
不足なら国債あるさホーホケキョ

札幌市 三浦強一

スタートは一緒定年での格差
定型の男です可も不可もなし
能率を旨とし乱雑なる机上
寿限無寿限無唱えています呆け防止
ヘルパーを娘と思う慈愛の目

弘前市 浅田隆樹

来年の課題今年も積み上げる
雪国の四季に根深い冬がある
湯たんぽを抱けば吹雪も子守歌
神様へりんごひとつを取り残す
断捨離が妻のところで引っかかる

弘前市 稲見則彦

アイスバーン僕の運転見てごさる
必着の二文字が肩に伸し掛かる
ビジュアルデイ聴いて地吹雪避ける夜
筆順が違うと正座させられる
冬だから冬の風読む風見鶏

弘前市 岡本花匠

予防注射終えて安堵の冬構え
さあ根雪スノーダンブの出番です
ダイヤ婚模範となれぬ凡夫婦
立春にこころの窓も開かれる
カラオケが体に良いと勧められ

弘前市 今 愁 女

早や師走町は墨絵のように暮れ
少子化に年々校舎立派なり
草の根を地に眠らせて積もる雪
気前よく断捨離できぬ昭和
人
経済にギャンブルだけは反対だ

弘前市 須 郷 井 蛙

爺ちゃんスキー教室里帰り
トランプの本心知らぬ世界中
絵葉書で短文よし二刀流
手の平に最後のコトバ記しておく
古釘が仕事しました雪囲い

弘前市 高 橋 洋 子

身の丈を心に置いて楽人生
荒れた指指紋認識ままならぬ
いつの間に話が外れる遠い耳
輪の中で昔を恋うる角砂糖
生きている証を送る年賀状

弘前市 福 士 慕 情

立ち止まる蟻にも迷いあるらしい
風向きが変わってチャイム高くなる
糞虫が浮世の風に蓋をする
飲み干して一輪挿しになった瓶
長寿とや野辺に送った人の数

第17回 春はくろぼこ川柳大会

日 時 平成29年4月10日(日) 午前10時開場 出句締切 11時
場 所 さざんか会館(JR鳥取駅下車南口徒歩5分)

I・事前投句の部 出欠不問(各題2句)

投句締切 2月20日(月) 消印有効

「カード」	向	川	無	限	選
「花」	永	見	心	咲	選
「包む」	鴨	田	昭	紀	選
「星」	大	田	かつ	ら	選
「破る」	村	上	永	筆	選

II・当日の部(欠席投句可・各題2句)

投句締切 3月20日(月) 消印有効

「帯」	新	家	完	司	選
「外す」	小	梶	忠	雄	選
「ゲーム」	矢	沢	和	女	選
「自由吟」	天	根	夢	草	選
「自由吟」	小	島	蘭	幸	選

当日会費 2000円(弁当呈)

投句要領 I・IIともに所定の用紙(コピー可)または任意の用紙に宿題
選者名と作品を連記のうえ郵便番号・住所・氏名・電話番号・
所属結社名を添記。封書の表面に「春くろ」を朱書きしてください。

投句料 事前の部及び当日の欠席投句それぞれに1000円(定額小為替)

事前投句及び欠席投句/問合せ先

〒689-0343 鳥取市気高町飯里84-4 鈴木公弘 宛 電話 0857-84-2886

主 催 川柳同友会みらい

悪いのはいつももう一人のわたし
針穴を母の指先通り抜け
はみ出した色と宥める大人たち
ゼロ番線から蝶一匹が発つ
マンシヨンの隣が遠い都市砂漠

青森県 松 山 芳 生

川柳塔の

川柳讃歌

(146)

上方芸能評論家 木津川 計

裏方で閉会の辞を聞いている

山田 耕 治

「裏方は裏方のまま虹を見る」(鈴木咲子)を思い出す。初めて虹を見た女の子が「パパ、あれは何の広告?」と尋ねた話は書いた。広告ではない。あれは門だ。だからルナールは「虹よ/百姓の/凱旋門よ」と祝福した。裏方にも百姓にも虹は輝き、迎える凱旋門がある筈なのに、栄光の立方の影で裏方のまま虹も見ず、人知れず消えてゆく人生がある。人の世の哀感が耕治さんには分かる。開会ではない「閉会の辞」がこの句を一層切なくする。

ゆずり合った座席ぼつんと残される

森 茜

満員の電車に乗ったのは詩人・吉野弘だった。うつむいていた娘が立つて年寄りに席をゆずった。礼も言わず年寄りが次の駅で降りたあとへ娘は座った。また年寄りが来たから娘はゆずった。二度あることは三度ある。別

の年寄りが娘の前に押し出された。が、今度は立たなかった。うつむいて下唇をキュッと噛み、身体をこわばらせ。やさしい心に責められながら「娘はどこまで行つたろう」と詩人は思いやる。茜さんもうらい座席でしたね。

身の上話きちんと聞いてから無口

高瀬 霜 石

どなたの句か、しかもウロ覚え、「何もかも話した方がよく眠り」。こんなことなら聞かねばよかったのだ。明かした方はすーっとしたのでろう、熟睡しているというのに。霜石さんも困惑した。「帰るのかそうかと急に物を言い」(楳元紋太)になるまでの気づまりどころではない深刻な話に、失礼ながらわが身の無力を悟ろうとは、になりやすいから、徒やおろそかに身の上話は聞くな、という諭え話にこの句をよまれたのでしょうか。

ベースなどおまへん道は真つしぐら

岩佐 ダン吉

一本道である。武者小路実篤の「この道より我を生かす道なし、この道を歩く」真実一路の「道程」である。「ほくの前に道はない/ほくの後ろに道は出来る」高村光太郎の気概である。そんな道の中になぜ「首」があるのか。古代の中国では未知の土地へ行くに戦さで手に入れた人間の首を携えた証だ。悪霊

を鎮め、怨霊を払う霊力が首にはあると信じられていた。白川漢字学白眉の解釈だ。ダン吉さんの「帰らざる河」の生き方である。

主人に聞いてみまうと言ったことはない

谷 口 義

「わたしを名付けないで/娘という名妻という名/重々しい母という名でしつらえた座に/坐りきりにさせないでください。わたしは風/りんごの木と/泉のありかを知っている風」、詩人・新川和江の「わたしを束ねないで」、凜とした主張だった。束ねられることをきっぱり拒否した詩人・石垣りんも名詩「表札」で自らの精神のありか、その尊厳を宣言した。右の句のミセスXもそんな女性だった。義さん、支配と従属は否定しよう。

散りぎわの苦しみあつたはずだらう

中崎 深 雪

「散る」と言われた最期は華々しく飾られた。「散兵線の華と散れ」「見事散りましょ国のため」「笑って散ったその心」……、いずれも軍歌の一節だ。記録映画で見た特攻は水盂を交わした後、操縦席で右手をわずかに挙げて発ち、勇敢に突っ込んで「散華」したと讃えられたが、その散りぎわの恐怖と苦しみを私たちは無視した。紅葉だって苦しかった筈だ。深雪さんはそこを察して覆えした。

新川柳鑑賞 (60)

麻生 路郎

そんなに見るなイと象いもを喰べ

(しげお)

象の食物は藁を何貫目とか、芋を何貫目とかいう喰べ方で喰べる単位が人間どもとは全くケタ違いである。流石にズウタイが大きいだけのことはある。人間にジロジロ見られるので、少しはテレたのであろう。「そんなに見るなイ」と言つたところの写生句である。尤もこれは作者の主観が、そう感じたのであることは言うまでもない。

見て貰う氣をいつ頃か孔雀持ち

(水客)

動物園の孔雀であらう。別に見て貰うために羽根をひろげている訳ではないが、羽根をひろげるとみんな珍しそうに寄つて来て眼をみはるので、いつのほどにか見て貰うために羽根をひろげるようになったというのである。これは作者の主観がそう感じただのである。人間にもそんなところがあるので、この句は諷刺句だと言える。

立話長つて犬も坐り換え

(薫風子)

立話を詠んだ句もいろいろあるが、これは又面白い観方の句である。

犬がキチンと坐つて立話をしている飼主をジツと見上げているが、なかなか話が尽きそうもないので、とうとう坐り換えたというのである。

空もソロソロ曇つて来そうだ。

境内のあひるでさえがアベツクか

(半休)

境内へ写真機を肩にして這入つて来たのがアベツク。極言すると近ごろの神社仏閣はカメラの対照でしかないようだ。アツ又アベツクが来たが、それはアベツクには違いないが、アヒルのアベツクだったというのである。時代を諷したユーモラスな句である。

春の雪解けて流れて家鴨浮き

(夜湖)

叙景川柳として秀れている。田園風景ののびのびとした詩情が感じられる。「解けて流れて家鴨浮き」の中七、下五のなだらかな措字が「春の雪」と巧みにマッチしている点を賞揚したい。

稲妻へ蛙ゆつくり向き直り

(水客)

稲妻がピカリピカリと光る。その光りの中に浮き彫りにされた蛙が、ゆつくりとこちらへ向き直つたのを作者は面白く感じたのである。人間たちが、恐怖を感じる稲妻に平然として動じない蛙の姿に一種の驚きを感じたのである。

まだ雨が来そうに線路蟹が這つ

(ひさみ)

雲が低くおりにている。一ト雨あつて、線路の砂が洗い出されている。まだまだ雨が来そうだ。ふと眼をやると蟹が這うている。何んと言う静かな情景であらう。作者の寂びしい気持ちがある情景にピタツと来たのである。叙景川柳として秀れている。バケツとは知らない蟹のものがきよう

(暁明)

ふとしたことで蟹が捕えられ、バケツに投げこまれた。バケツがどんなものであるかを知る筈もなかった。そこは視野が狭くてすぐ壁に突き当たった。外へののがれようとしてものがれるすべがなかった。

海にあこがれ、自由を求めてもがき苦しんでいるさまを詠んだのであるが、これは蟹に限ったことではなく人間も亦こうした苦難を持つことを諷したのである。

自選集

小島蘭幸

川柳塔と生きた半世紀が重い
誰も知らないだろう同人五十年
菩提寺の銀杏てのひらに受ける
もうひとりのわたし句集の中にいる
鬘も鶏冠も男前だった

両川洋々

人情が通じる鬼に飼い慣らす
赤い糸解くと独居が二人でき
変身願望大人の寓話かも知れぬ
文春のペンが都政の闇を裂く
心変わりしたのかナビが狂い出す

板尾岳人

ふる里を家出して来た鬼蜻蛉
静寂の森でオシッコしているメダカ
厚化粧してもべっぴんになれぬ
福寿草胡坐をかいている日陰
猿よりも長生き出来る有がたさ

奥田みつ子

亡き妻をしきりに褒める父だった
やさしさに触れて元気が湧いてきた
父の努力母のやさしさ見習って
おめでとう言われ受賞に気がついた
無事な顔見るまで心落ちつかぬ

川上大輪

賀状書く今年も年が越せそうで
お正月そんなに騒ぐことはない
拾ってきた内緒話をどうしよう
する事もないのに何か忙しい
ありがとうと父には言った事が無い

小西雄々

鼻歌も近頃でない老いてきた
寒い音させて新聞とどけられ
スピードは出さぬ愛車へ君のせて
玉砂利へ新しい靴しあわせだ
戦争の話する友みな逝った

斉藤 昴

お日様が好きでたまらぬ冬牡丹
冬の葦まだ水分は残ってる
山柿がぼとんと落ちていく別れ
ひまわりの種をこぼしておく冬野
地吹雪の底からわいてくる闘志

新家 完司

吉兆と喜び過ぎた朝の虹
大阪のおばちゃん五人トルネード
縄張りはおこう三軒両隣
昨日より衰えている歩行力
クソツタレつぶやき冬に耐えている

津 守 柳 伸

新米が届く身内の暖かさ
喪のハガキ喜怒哀楽の12月
ああショック妹が杖でお買物
お裾分け行ったり来たり隣組
拍子木の音も年末警戒中

都 倉 求 芽

早い年遅い年もみじにも裏事情
春夏秋冬古都と添い寝の東山
鴨川にただいまと舞うユリカモメ
年の瀬も年始も介護の二十四時
休刊日ひと味足りぬ朝ご飯

西 出 楓 楽

亡夫かないえいえあれは風の音
子の命に比べわたしの命など
平穏な日が続くようただ祈る
ご先祖よ息子を呼びに来るでない
口角を上げて幸せ呼び込もう

仁 部 四 郎

先送り先送りしてきた八十路
年齢にふさわしい字といわれたい
曾良の句が気になる干支も八巡め
なるべくは年齢不詳ですごしたい
年齢は不問とあつた入門書

前 たもつ

小春日がこんなにやさし柔らかい
川柳塔時間楽しみ読破する
肩の力抜けば気楽な趣味の道
進化論の世界に生きて狭い知恵
残り時間神に任せて今日の生

三 宅 保 州

焦っても仕方がないという焦り
雪の降る夜は一本追加する
老人会つまらぬような顔で行く
お気張りやすと言われその気になりました
空気感染しますここだけの話

宮 西 弥 生

体調から先に聞かれる久し振り
今日もまた独り芝居のふとん干す
きらきらが大好き八十の勲章だ
年齢の差で美しく負けておく
百態の風万葉の大舞台

林 瑞 枝

世界地図見ながら私も宇宙人

泣き虫の昔を語る父と辞書

ごく自然なポーズで埋める父と美女

笑顔して元氣下さる眼が奇麗

一ぴきの蠅が私の病む床に

春の匂い

八 木 千 代

誰も見ていないと羽搏きのポーズ

こわばった肩甲骨をおそろおそろ

そろりそろり枯れた翼を撫でながら

忘れてはいないか日々の羽繕い

羽搏けば少し春めく風の匂い

.....

水煙草

(つづき)

沖繩県 宮 すみれ

親父似ポッチャリ母で嗚呼親子

シャイナ人演歌うたえば別人だ

波うねり汗と涙のシヨガー達

仏壇に留守番願い同期会

寒中お見舞申し上げます

富 柳 会

池	森子	河野彦次
中井	アキ	石橋未知
中崎	深雪	久世高鷺
山野	寿之	井澤壽峰
肥山	一文	田嶋伸雄
関	よしみ	沢田和子
中村	恵	松本正治
栃尾	奏子	岸本慶子
藤田	武人	福元田鶴子
林	澄子	都筑文重
前田	登子	他一同

川柳との出逢い

細 川 花 門

三十有余年、俳句に慣れ親しんできたが、古稀の半ばを迎え、残された人生にたのしい趣味をもう一ツ見出したかと思っていた。

昨年しねんの春、三田市役所の武庫川沿いの桜並木に短冊たんさくが結ばれていた。最初は何気なく目で文字を追っていたのであるが、「これは川柳だ」と気付いた。今迄は、川柳に距離を置いていたが、踵かかとを返して最初から最後の一句までを丁寧ていねいに読んでいる内に「このような素晴らしい川柳のグループもあるのだ」と嬉しくなり、平成十五年七月に「川柳さんだ」の門を叩いた。当日の勉強の資料として川上富湖さんの十句が配布され「愛」というてもほこほこした葉はの句が一番目に記載されていた。富湖さんについての知識はなかったが、瞬時に作句の原点に出逢えたと思った。

この一年余りで多くの先人の句を閲し、感銘を受けた川柳は枚挙に遑あわがないが、平明にして心地の良い川柳を目指したいと思っている。

温故知新

『高杉鬼遊川柳句集』から

見渡せばどの親戚も貧しかり
名曲もおけさも同じチンドン屋
長生きをすればおでんにコロがない
よく撮れた多くの写真が何時か要る
口紅をさせばおんなが生きかえり
顔よりも心といつて下さるが
核のないつぎの世紀を信じよう
美人だと言う冗談をまにうける
あれほどの女が連れている男
火葬場へ行くバスに乗り生きている
嫁はん甘いのではない怖いだけ
玄米がよい煙草が悪いのと
紙風船やさしい人に巡り会う
破られる不安をだいている記録
世界地図ひろげて飢えが見えますか
缶ビール提げて仲間にしてもらう
貧しさに負けたりしない太い指
老眼鏡 郵便局の弱を借り



西出楓楽選

米子市 野川宣子

終章は感謝の文字で結びます

沢山の手を借り年が越えられた

遺産分け知恵を授ける他人様

張り詰めた空気緩める大くしゃみ

ホールインワン偶にあるから止められぬ

主婦業も手抜き息抜き大事です

大阪府 小栢こずえ

予定した事の半分日の短か

夜なべして綻び縫った日を偲び

継ぎ接ぎの記憶をたどる良夜です

見るよりも見られる心地冬の月

ゆらゆらと窓辺に遊ぶ柿簾

明朝も目覚めますよう祈り寝る

大阪府 柴本ばっは

恐かったけど大好きだった父でした

雑草の強さ教えてくれた父

いつも大声大往生の父でした

仕事一途の父の静かなデスマスク

下駄箱で母の利久がねむってる

おっとりの母で家計は火の車

加西市 山端なつみ

投票箱開けてトランプ出る手品

世界に一つ S M A P の花消える

しまったと自分を笑う物忘れ

外遊び教える仕事ある時代

住むのなら心のバリアない町に

わが老後身体が軽い月に住む

篠山市 藤井美智子

句作りを極めて恩師千の風

旅立たれ奥様の手へとわの愛

句の道は生涯友と師の教え

聴き慣れた師のあのお声もう過去に

師を偲び川柳ささやま巣立つ明日

また今日も捜し物あり時間ロス

三原市 鴨田昭紀

爽やかな笑顔が呼んでくる笑顔
喜怒哀楽の海を漂い生きている
大吉が今日も続いている不安
ゴミ箱に埋もれる排他的意見
スイスイと植木等のように生き
職退いて喪服一着あれば済む

和歌山市 北原昭枝

にぎやかに初春が始まる朝の膳
角削り話をまるく和ませる
懐かしいにおいの記憶ははの味
この道を共に歩いた土踏まず
失敗がやがて自信になってゆく
餅つきの賑わいにいた父や母

三原市 笹重耕三

十二月の風が尖ってくる痛い
医療費が嵩んで年金が軋む
心電図異常なくとも出る薬
あやふやにまた一年が通り過ぎ
もう二度と逢えない今日という平和
またひとつ年を取るんだ生きてやる

泉大津市 助川和美

まるで猫背を丸くして爪を切る
和服着て素敵に目立つ砂被り
ぶつかってだんだん丸い石になる

関西弁真似してばれる国訛
宅配のイケメンを待つ妻おしゃれ
ベテランは斬られ上手な村芝居

羽曳野市 磯本洋一

五十年都会に住めど田舎者
レガシーとマネーファースト予算戦
方言が帰省の車中耳の中
テストびり優しさだけはトップなり
小芥子買う孫に似た顔所望して
菊花展終えて間無しの土づくり

堺市 羽田野洋介

やる気なら条件なんかつけるなよ
もう今さら無心になれと言われても
歳重ねドライな心ウエットに
足音で全てが分かる古い仲
人生の樹界どこまで続くやら
ていねいな言葉の裏に何かある

交野市 田岡九好

八十一手柄を立てたわけじゃない
老いに寄りかかるなよみつともないよ
波のまにまに揺られてゆれて今日も生き
うつりゆくよしなしごとを織る句作
日本を丸ごと欲しい習近平
トランプの裏をかえして何が出る

東京都 高岡弥生

末の子もやはり来たのは反抗期
犬にだけ話すトーンが高くなる
大人にも来て欲しいよねサントさん
赤や黄の落ち葉眩しい陽の光
くじ運がないのはやはり意味がある

八王子市 川名洋子

私には細すぎていた蜘蛛の糸
口論の後はケーキで仲直り
食べ残すことが出来ずにゴムズボン
囁くとすぐに広まる内緒ごと
寒気団が来てこたつの番をする

横浜市 巖田かず枝

けんかして仲の深まることもある
ママのより旨いと孫に褒められた
偽物でいいの真心あるならば
下りる術知らずに煽てられている
地球ではなくて人間壊れてる

横浜市 川島良子

クルクルと月日丸めて十二月
長生きはイヤでも葉忘れない
六十路坂脳が縮む日弾ける日
若さとはシャキシヤキ林檎丸かじり
絡まった糸が解けた年の暮れ

佐渡市 高野不二

眠れないとぐちこぼしては昼寝する
米代の何倍もいる灯油代
元旦に書くのが本当のおめでとう
テレビ見て笑える内はしあわせだ
冬になるとやっぱり暑い方がいい

福井市 伊藤良一

奥歯噛み締めて笑顔でいる立場
不条理を受けつつ子には説く条理
能力の順には出世せぬ不思議
潔く詫びれば晴れてくる心
愚痴混じるうちは反省まだ途中

江南市 脇田雅美

百の数逆から数え呆け封じ
祝い酒赤い切子の猪口で飲む
気を若く後期高齢ジム通い
終活に妻が家宝を捨てちゃった
ポイントにもう一点に買い過ぎる

豊橋市 藤田千休

てにをはで悩む私はハムレット
空クジは無いと自負する茄子の花
弟は秀才ボクは落ちこぼれ
レガシーの連呼にスバル悦に入る
モンタンの歌から秋が深まりぬ

大阪市 磯島 福貴子

くるくると剥いてせっせと柿簾
卒免の決断難し高齢者
ネット駆使お取り寄せでの味めぐり
冬の夜火鉢囲んだ遠い日日
三代代同時襲名高麗屋

大阪市 高杉 力

台本のない人生で面白い
野菜高騰もやし炒めが続く
野球など観てない外野自由席
お通しでいたい分かる店の格
三億円もう決まってる使い道

大阪市 田中 ゆみ子

一日が短く過ぎて十二月
研ぎあげて包丁匂う十二月
除夜の鐘満足少し悔い少し
胃カメラを終えて一杯寒の水
待つことのときめきありて初日の出

大阪市 平井 美智子

押し入れに内緒で買ったルイ・ヴィトン
納豆を食べる 昨日が糸を引く
淋しさにたっぷりかける粉砂糖
父を流して母を流してまだ此の世
次の世も私を選ぶのは私

大阪市 松田 聰

トランプへ一番乗りで得意顔
政治家の不正問題多すぎる
語り合い酔いつぶれてた友が逝く
月や星観ることさえもないゆとり
初井さん政策に沿い嫌われる

大阪市 宮村 満寿恵

おしゃべりは外の暗さも気が付かず
赤い服今日は気合を見せて着る
硬い脳消費期限はとうに過ぎ
幼な友声で体調解る仲
雲のよう悩みは湧いてまた消える

大阪市 森 廣子

哀悼と祈りで歩むルミナリエ
許すとも許さないとも昼の月
二世代の同居暮らしのアラカルト
陽炎の真ん中辺で笑う亡母
滝壺の底に秘密を眠らせる

池田市 上山 堅坊

親の願いあつさり破り子は育つ
フラットな余生にぎわす趣味一つ
川柳と酒とを糧にしてあした
秋深し街路樹みんな素っ裸
しみじみと過去を語って社友会

池田市 太田省三

朝ドラの女が見せる男意氣

喫茶店顔一斉に窓の雪

局面を十手も戻すへボ将棋

祖母からの重石が座る樽の上

廃校を永遠と称えた校歌あり

貝塚市 吉道あかね

古稀近くゆらりゆらりと参りましょ

喪中ハガキ歳の順ではないのです

美しく生きる女の袋縫い

妥協して丸は歪になっている

脳みそがカラカラ冬の音がする

河内長野市 中島一彌

黄落の夕日に映えている孤独

もみじ落ち紅蓮の炎地に還る

頼りない尿の音する年の暮れ

ラジオから第九が流れ今日は鍋

湯たんぽでスローライフを真似てみる

河内長野市 穂口正子

照れ笑いどなたがしても素敵です

シルバーがスマホ操る得意顔

ていねいに日日を重ねた台所

いろいろ有ったが戦争はなかった

愛を積む許し合おうと言えるまで

河内長野市 森田旅人

震災の景色の中で舞う神楽

外つ国の景色にとける一人旅

冬枯れの景色の好きなスニーカー

冗談の行き交う町にある温み

難風もあつたであらう渡り鳥

河内長野市 渡邊修

九度山は真田巡りで人五倍

夢洲の万博までは死にはせん

陽だまりでミケとねころぶ至福時

出世出来ぬおれの人生よく見とけ

豚まんにシヨウ油ソース派もめている

堺市 小林若芽

満たされてだんだん鈍くなる右脳

歩かねば思案の末の道だから

反論の出来ぬ時代を生きた歳

何もかも許してしまう秋の天

この余白のんびり魔女と笑い合う

堺市 近藤治子

助走して飛び立つ夢を見るあひる

終活へ骨つば焼いて総仕上げ

英語力ノーとイエスで切り抜ける

首伸ばしニッポンチャチャチャ五輪待つ

それからを問うて後悔長話し

堺市 松永庄三

いつ終わる老老介護もうもたん
垂れてくる目じり頼った尻こぶた
長講義欠伸堪えて目に涙
五七五は指りハビリの役に立ち
荒波を生きてぼつぼつ終活か

堺市 大和峯二

文太さんあなたの思い実らせる
生きる知恵いくら学べど終りなし
今日は今日明日は明日の空模様
はめることできる余裕が欲しいもの
よく笑う妻で家中光さす

豊中市 荒木郁子

保険料取り介護切り捨てアカンゼよ
垣根越し安否気づかう言葉掛け
青春は夜行列車のスキー旅
入院が怪我の功名ダイエット
月一度墓参り兼ねての姉妹会

豊中市 上出修

鴨川の風に襟立てまねき見る
もみじ散りもう師走だとベルが鳴る
トランプに右往左往の地球人
ノーベル賞どこ吹く風のボブデイルン
インパウンド街の風景様変わり

豊中市 貝塚正子

どれ選ぶ自販機の前迷う指
謎かけのように誘われ妻となる
ほほえみは残しておこう謎のまま
寒中の苗にケキレイ肥料撒く
日溜りに猫一匹と古木梅

豊中市 木藤こみつ

悪口を聞いて耳垢よくたまる
ホスピスのどこかよそらしい空気
人の孫興味はないが誉めておく
雨の日のブランコとてもさみしそう
浮いた話人事だから面白い

箕面市 中山春代

幸せは空気のような夫という
一病息災やと悟った十年目
終バスへおちおちできぬコンサート
もともとはお宝だった粗大ゴミ
木枯しに人を探しているチラシ

八尾市 前田紀雄

桧舞台昔も今も縁がない
勝ち組はみんな戦争好きな人
少子化が進み年金減らされる
カジノ万博より平凡な暮らし
伏魔殿掃除をすれば黒ネズミ

八尾市 山川 寧

金木犀となりの庭へ散つていく
単身の夫を思う吟醸酒
ソバージュにムースを付ける九十歳
錦織と同じラケット持つてます
歩行器に母の面影小雪舞う

大阪府 神野 千恵子

何事もなかったように一番星
ヒラヒラもボトリにもある自己主張
染まりたい色と避けたい色がある
時々作り笑いをして忍ぶ
自分では汗をかかない権力者

神戸市 近藤 勝正

どこ行くも一緒の友が独り逝く
欲を出しても一回り生きてやる
冬日和心の窓を開け放つ
冬日和日向拾つて朝ウオーク
雄鶏が冷氣ふるわす里の朝

尼崎市 清水 久美子

計報聞くたびに生命線を見る
予防注射打ったその夜に風邪を引く
家計簿に走り書きする五七五
スランプの隙に付け入る人が居る
家湯より外湯が好きな淋しがり

尼崎市 藤田 雪菜

計画も半分残し来年へ
お茶の間では座席指定を決めている
天高し休日もなく人が逝く
十二色並べて画布の無限大
家事分担夫シヤキシヤキ米を研ぐ

尼崎市 永田 紀恵

居眠りのコクリコクリにあるリズム
友の彼すぐ欲しくなるイヤな質
仕事よりイクメンめざす優男
没一〇〇年吾輩うれし猫ブーム
ブティックが百合子ファッション仕入れする

小野市 田中 辰夫

独り暮し小春日和の外出着
20年ネコも長寿のわが家です
乾杯が済んで無口なカニの味
おとつとバリアフリーに油断する
途方もない夢を見ていた宝クジ

篠山市 永井 かほる

勉強も遊びも忘れ手伝った
農繁期すんで学校すきになり
若い頃こんな長生き夢の様
寒くなり味の出きた大根煮
菜園が一番すきなオアシスだ

三田市 谷口修平

怒つたらすぐに飛び出す河内弁
義理で行く通夜はサインですぐ帰る
祖先の田腰の曲がった親守る
どつしりとしていないのが代理です
朝ドラの方言なぜか馴染めない

三田市 馬場貴美江

腺ガンの告知返上今がある
ガン告知治療断り生きてみる
黄泉へ迷わず旅をしてみたい
ハイヒールお役目ごめん箱の隅
姑は言う白いカラスもいるそう

三田市 松本ゆかり

ことごとく花咲き終り籠る日々
里山も年に一度の晴れ着見せ
青い葉が赤く色づくだけなの
うらやまし牡蠣の大往生
はつはつと列島蟹のファンファーレ

宝塚市 太田としお

父母が夢に出て来て叱られた
腹立つ時は腹立てなさい思い切り
手抜きするこれも上手な生き方だ
四コーナー回りラストに鞭入れる
トランプミクスさてさて世界その先は

宝塚市 丸山孔一

バナナ剥くゴリラの姿浮べつつ
終活のノートに書けぬ名前有り
何処へ行く古いカーナビ道が無い
カラオケは新譜落語は古典好き
イヤホン曲の途中で降りる駅

三木市 山口久子

師走声軽い財布も悲鳴あげ
補助車押してもらって庭散歩
われ九〇家族の力ありがたい
お年玉どこからくるのひ孫問う
毎食後デザート変りにが菓

奈良市 森中博一

重い腰よつこらしよと誌友人り
認知症ボツクリよりもガンがよい
犬逝って一人散歩もまた気楽
妻と娘が免許更新止めと言う
八十路きて眺望よしの下り坂

和歌山市 平田元三

餅好きのお隣さんも炭火焼き
聞き損なうからと夫婦で受診する
かと言って免許証いる老農夫
病身は誌上大会だけ土俵
貰い物まず行先はお仏壇

鳥取市 奥田 由美

母の声聞いた気がする三回忌
さあ蟹とメールも届く解禁日
ボブディラン反骨のまま平和賞
保育所の昼寝に一人徘徊児
マツコから脱出したら買うドレス

倉吉市 大羽 雄大

一晩に夢見る夢に草臥れる
転た寝すると寝夜便の世話に
三食におやつ腹減る訳がない
持ち味をうまく引き出すコブカツオ
指切りをしたが今でも迷ってる

倉吉市 岡崎 美知江

震度6ブルーシートの屋根・屋根・屋根
震度6位牌仏具が飛び出した
屋根と墓無事な姿に手をあわす
リュック毛布ズック揃えて床につく
毎日の揺れにこの頃なれました

倉吉市 中村 毅

バスツアー高い買い物させられる
木枯しが鍋を奨めて通り過ぎ
どっこいしょ立って座ってよっこらしょ
口飲みをペットボトルに許される
あの大臣百年もつと言ったのに

倉吉市 宮田 風露

サンタ待った孫が今では彼女待つ
寒風にサンタ鼻水垂らしてた
句会には笑い袋が置いてある
師走の風懷までも寒くする
ボーナスはなし節約のお正月

米子市 生田 和之

改革はまず年金と狙われる
脳トレを句作一筋絞り込む
孫が来てキンコンカンと鳴るチャイム
気が付けば袋小路に居る後期
昨日越え今日は越えれぬ老いの坂

米子市 川本 美津子

便りない友をおくやみ欄で知る
おしどりに聞いてみたいな夫婦仲
夕暮れに影とふたりで帰路急ぐ
座禅して白紙の心とりもどす
何時の間に古希が来たのか覚えなし

島根県 福岡 左余

歛握り長生き法と汗を拭く
生き残る術と坂道朝散歩
盗まれた野菜与えたと腹収め
南天がまだ赤々と小鳥呼ぶ
なまけるな亡夫の写真眼が叱咤

瀬戸内市 東 横 ますみ

外面は淑女に見せて爪を研ぐ
マニキュアの小指は甘え上手です
足し算をしながら明日へ向ける靴
きつかけはとうに忘れて口ゲンカ
古傷を思い出させる冬の風

美作市 大 杉 敏 夫

寅さんの口上消えた村まつり
知り合いの外より逢わぬ散歩道
お日様の後から起きて先に寝る
柿熟れてぼたりと落ちて過疎進む
川柳で楊貴妃に逢う母に逢う

尾道市 小 畑 宣 之

スクリーンにエンド涙をそつと拭く
風を読む上手な友は偉くなり
憎い奴涼しい顔できつい事
待人はついにあの世で僕を待つ
大小の足跡続く潮干狩

竹原市 若 年 幸 子

ふわり出てスーパームーン酒を呼ぶ
来春を信じて紅葉潔し
ちよつとだけ歩み寄せると分かりあえ
屋根に雪載せて電車が遅刻する
チヨコレート想いの丈を背負わされ

府中市 岸 田 武

曖昧な返事で蟹を食っている
賀状書く喪中はがきを傍らに
デザートは錠剤三種欠かせない
折り返すまではトッブでいたものを
ぷちぷちをプチプチしたら晴れますか

三次市 伊 藤 寿 子

働けど働けどもへ御時世か
後継者いない死ぬまで社長業
病氣の名仕事虫かも我が夫
限界と抜歯一本歳思う
予防接種いつ受けようか風邪逃げぬ

広島県 松 尾 信 彦

秋の日に大きく踊るコンバイン
止まり木に邂逅ありき一人酒
頂点に立ちて人格醸し出る
一病を宥め許して乞う明日
わが途轍道なき道のオフロード

山口市 青 木 隆 子

群青の空見ないまま秋過ぎる
ザビエルの塔に似合うは鎌の月
今ならば父に素直になれる愛
耳遠いことを気にせぬ母達者
差し出す手じつと我慢す惚けぬよう

山口市 中前 幸子

大洲市 花岡 順子

振り子時計がそれからを問うてくる
コーヒーが冷めてしまった未完の絵
着服れて少し悪巧みをしよう
欠けた月見ているわたし傍観者
傾いた椅子へこころも傾けて

松山市 郷田 みや

西予市 西田 美恵子

降ろしたい荷にどんどんと積る雪
毎日を記念日にして日記書く
幸せの位置を動かすのは私
任された仕事シャキッと目が覚める
結論は出す宴会の席になる

松山市 柳田 かおる

佐賀県 真島 久美子

みんなから煙たがられる正義感
好きになることに訳などありません
おぼろ月こころの中を見透かされ
嬉しい日ゆっくり時計すすんでよ
車間距離守ったままのふたりです

今治市 渡邊 伊津志

沖縄県 あら さくら

晩酌に今日の安堵を足して飲む
歳時記に忘れられてる杵の音
鈍感になれぬ五感が病んでいる
人間が実ると老いが待っている
まだ夢が枯れてないから生きられる

肩こりが少し治った旅の宿
うっかりが続く不安もある独り
やれやれの時に思わぬ怪我をする
笑ったら次のステップ踏み出せる
やれやれと座ってばかりおれぬ主婦
スポーツライト浴びて棚田は守られる
海の深さ森の深さを知る挫折
覚悟とはこういう事か紙おむつ
竹とんぼ空の広さをまだ知らぬ
父の胸に深いみどりの森がある
入院の父がなんだか嬉しそう
父の顔だらうか寝顔じつと見る
父であることを止めさせない治療
お見舞いは何の用事もない顔で
退院の日を入院の日に尋ね
夢でいい逢えたらいい天仰ぐ
陳列に目で訴える魚あり
ほめられてルンルンはねてこけちゃった
今でしよう重い腰あげ変化球
年金日右から左流れます

沖縄県 島尻 卓

お開きはドライな奴がいつも言い

スーパ―の魚は食べぬ漁師町

終戦で誓った不戦忘れそう

試食品食べて負い目も少し持ち

今日もまた不安を乗せて救急車

シドニー 坂上のり子

ジャカランタ散つて天刺すような枝

サボテンが花の帽子を着てた朝

大地が揺れるではない私揺れている

趣味合わぬ二人すっかり意気が合う

きれいな事ばかりではない生きる事

札幌市 斉藤 宏子

過疎の町 長と民の力こぶ

咲きはこる野菊の中の廃鉄路

つきぬける青空痛い無人駅

ぬいぐるみ幼い匂いまき散らし

音たてて年が飛んでくお正月

塩竈市 木田 比呂朗

型どおり妻を相手の福は内

熱爛が持て囃される凍てる宵

湯豆腐のゆげは我慢をするメガネ

壮健を裏で演出するサブリ

免許返納へ我が家の多数決

男鹿市 伊藤 のぶよし

玄関の靴で賑わう帰省の日

命が揺れる引き際と散り際と

おもいきり風を聞いている過疎の森

いよいよ佳境三昧の音も地吹雪も

転た寝の冬眠夢はすでに春

白河市 鈴木 たけし

免許返納キーホルダーが軽くなる

免許返納巷の風の暖かさ

返納は正解だった今日も事故

枝なりに止まるお庭の雪の精

地球儀にしめ縄張って祈りたい

上尾市 中村 伸子

埼玉なのに小池都知事の顔ばかり

パソコンにこっそり頼る物忘れ

流行語大賞神は怒らぬか

十億とは言いませんけど少しだけ

AIが川柳作る日は来るか

松戸市 山下 明子

風さそう安曇野ひとり道祖神

夕焼け空わがもの顔に鳶が舞う

冒険へお茶とおやつと虫めがね

酉の市明日の希望買い求め

しまい釜花炭の美は利休から

札幌市 富永恵子

玄関に並ぶ鉢花越える冬

秋空に菊一輪と庭仕舞

喪の葉書年頃ですの声潜め

雪はたるふわりと肩に季節告げ

弘前市 高森一吞

父母も土に還った風の街

合併で過疎化偽装の故郷です

じんわりと真綿で締める動脈瘤

約束を反故にさせます阿弥陀クジ

横浜市 長島亜希子

ちよつとした部品がなくて買い換える

おばあちゃんわたしのことだったんですか

賽銭の額で差別はしませんね

縫った亡母思い着物が捨てられぬ

伊勢原市 小田幸子

片付けで父よみがえる時をこえ

亡き父のポケットの中ごみ一つ

満月と並んで笑う亡き父が

泣き虫の子の頑張りに親涙

静岡市 渡辺芳子

背のびせず迷わず道を歩きたい

信じ合う友のある幸高^{さち}齢者

ノ一^{さいわい}天気幸^{さいわい}いしてか病^さ気せず

車窓より突如現る雪の富士

沼津市 鳥沢無午

私より馬鹿なAIないですか

クリスマス関係ないと冬の月

生き延びるのに必死スカンクだつて

極楽へ行ったら酒は飲めないぜ

愛知県 西郷紀美代

線香を一本立てて孫帰る

どん底に落ちた時知る人の情

うさぎだと言われ食べてるキャベツ好き

身なりなど構っておれぬ孫の守

鈴鹿市 小河柳女

どのチャンネルもおいしいと叫んでいる

手作りの味噌が染みついている舌に

味噌汁の深いところに家族愛

急ぎ来て振りかえ見れば芒の原

京都市 櫻崎篤子

若い人集め戦の日の話

冬枯れの木立へ初雪の化粧

千体の仏が笑う念仏寺

ご老体の猫のフードを替えてみる

大阪市 田中廣子

テレビつけ並んで宵寝しています

時計止めねむりむさぼる心地良さ

公園で落葉踏み締め春を待つ

御堂筋光の祭典目を奪う

大阪市 中島 栄子

ほんの一言安らぐ言葉欲しいもの
ニュース解説テレビの中で世界中

五十回忌亡き人を知る人僅か

止められればよい飲みたいなあお酒

大阪市 梅里 南天

同窓会玉手箱開け美少女が

気管支が木枯しの音冬が来た

年齢のさば読みがたし同窓会

夢枕あわてて電話それも夢

大阪市 堀田 温子

公園に子供の居ないスベリ台

けじめつけ犬は犬小屋水とえさ

若かった夢中で読んだ資本論

明日の夢持つてゐる種に水をやる

大阪市 前川 善之

良薬も恋の病は話せない

たまたまが人生変える道になる

平成は女性の力見逃せぬ

老夫婦空気の様な間柄

大阪市 横山 里子

流水聴くペットボトルを凍らせて

何しても裏目それでも空は澄み

好きだった焚火みつめる横顔が

人肌が恋し落葉も冬の音

大阪市 吉田 知之

反省心無いと後悔残るだけ
働くとき過去の努力が生きてくる

神仏の誰が偉いか分からない

神様のくれる寿命の長短

河内長野市 原熊 知津子

少しだけ自分削って平和主義

初入選何度も開くそのページ

つなぐ手がぎこちなくなる四年生

公園を駆けるオレンジ色の声

岸和田市 宮野 みつ江

言葉よりキラキラ揺れる眼が語る

ルンルの言葉溢れて出る若さ

はらはらとさせる言葉を吐く娘

ふんわりと言葉真綿に包み母

堺市 梅木 澄空

転ばぬか怖怖走る気が急いて

ほどほどの充電タイム母はデイ

葉ボタンとポインセチアに焦り出す

お忘れか惚けてゐるのか気抜けする

四条畷市 西川 ひろし

独居老鏡の前で会話する

秋晴れも爆煙けむるシリアでは

新聞を読んで一人で怒ってる

人いないフクシマの猿不思議がり

高槻市 三谷白黒

羽曳野市 安本美喜

何もかもカーブカーブの年でした
仕事とは我慢が全て他になし
暇だなあ今日一日を何しよう
リモコンをどれに使うか分らない

豊中市 荒巻夢

杖を手を今今今を生きてゆく
住む人も家屋も本もセピア色
八十年代四人混じえてコーラス部
真心は言葉の数に反比例

豊中市 源田啓生

人生の苦さちよっぴりうるか酒
足裏の皮がだんだん薄くなる
人恋し人煩わし老い暮し
サラサラと流れて止まる時の川

富田林市 小出修三

イノシシと密柑農家の知恵くらべ
美容院帰りの妻に目を見張る
いそいそと娘来る日の老い二人
認知症童謡聴いて遅らせる

寝屋川市 岡本勲

バーゲンが我慢のサイフこじあける
路地裏からサンマでごわす秋の風
物忘れ腹が立ったり笑ったり
今日も又同じ歩幅で日が暮れた

その人と心に映し賀状書く
若冲の描く鶏ちよつと借り
台詞なき羊となりて聖夜劇
ハルカスもユニクロにも孫に連れられて

枚方市 山口弘委智

毒舌を冗舌に変え煙に巻く
高望みせねば楽しい老い二人
君への想い風をのりつぎ届けたい
師の教え胸の扉をノックする

箕面市 寺井柳童

靴の紐結び直して就活へ
午前様悟られぬようそつとドア
カウンター目を覚ましたら俺一人
酉年へ幸せつなぎ申は去る

八尾市 田邊浩三

美しく生きたつもりは八十年
傘寿だがメール来たのは孫一人
全世界やつと認めた温暖化
ふんばってやつと傘寿に辿り着く

大阪府 高木道子

有情無情包み遺影は笑ってる
住まぬ家の山茶花ぶっくらぼうに咲く
七回忌亡母の時計もギブアップ
廃校の庭で落葉の運動会

大阪府 畑中節子

秋夜長ページをめくる音静か
何気ない自由五体に日々感謝
連絡網メールですます地区行事
人恋し一人暮しのそぞろ寒

神戸市 井上忠貞

くじ当たり手にしたとたん目が覚めた
かけちがいあの一言が今もなお
決着後今更言うな遅すぎる
手袋が左手ばかり残ってる

神戸市 玄番美恵子

美酒に酔い夢分け合った日の遠く
丁寧な言葉でずばり突いてくる
母さんの一言ずばり胸を刺す
今更に上げた拳が下ろせない

神戸市 輿水弘

母の知恵のろけて茶化し父なだめ
ついてこい割り勘ならば行きません
大雨も日照りも地球をいじめてる
のろけても最後は尻に敷かれてる

伊丹市 平井富夫

元旦に神と仏に手を合す
痩せがまんつい手が出るの卑しんぼ
恋文も昔直筆今メール
鍋の後メはうどんか雑炊か

川西市 日野岡和之

常識をとことん変える匙加減
あと何歩角を曲がれば再軍備
その一票活かし平和の要石
足早に急ぐ師走の通院日

篠山市 長澤喜弘

ヘイト法チヨゴリきりりと紐結ぶ
PKO安否気遣う留守家族
豊洲盛り土彷彿させる大本営
迷惑かけた恩師のおかげ今日の幸

篠山市 長谷川善輔

SFが現実になる世界観
友の計報心に沁みる一人酒
災厄の町も穏やか年明ける
秋の色散って悲しく掃除する

三田市 幸田厚子

どっしりと赤字が根付く我が家計
私の価値平均数値ありますか
事後報告主人退社で目まいする
銘々の手塩に盛られ子沢山

三田市 宗福清司

五分五分の戦いは見て面白い
なぜ咬むのメダルが痛く可哀そう
依頼メールに返信遅いマナー無視
妻にばれても慌てるのが減ってきた

三田市 辻 開子

恒例の年末掃除また遅れ
ワクチンは終えた気力で頑張りう
同窓会なまりの会話安堵する
真夜中に目覚めいびきが邪魔をする

三田市 東内 美智子

呑んべえさん街歩くにも酒どころ
病院の関所診察券が紋所
齋藤さんさいの字略字駄目ですか
病窓の山赤が茶色く早三月

奈良市 尾畑 なを江

久々のたよりはなんと喪中なり
たつぷりの若さはあった金がない
十六夜はどこかなぞめく月明かり
ふる里はいいなりんごに野菜来る

奈良市 高橋 敬子

正月をまち構えてる塾部活
一族連れ孫ひらひらと七五三
歳も歳これが最後と城巡り
福島原発秘密あつても口にごす

和歌山市 倉橋 悦子

稀なこと重なるニュース見る悲哀
いい言葉並べてころ丸洗い
ひと言で花が咲いたり折られたり
苦も楽もすべてご縁と消化する

和歌山市 鍋嶋 澄子

師走きて逃げゆく年を惜しむ君
十三夜夫婦で愛でて月に酔う
紅い糸しつかり結ぶ夫婦離
病院の待ちつかれ明日休養日

岩出市 村中 悦男

足腰の弱さ自慢の初対面
掛け声に力を借りて席を立つ
高砂や舟は出て行く誓い乗せ
指輪交換誓いの心はめ合って

和歌山県 森下 よりこ

舞う木の葉千のかたちの秋の彩
花みずきのもみじが映える新興地
高齢化みかん畑も荒れている
お嬢さん苦勞知らずを売り物に

鳥取市 大前 安子

ウインドウへ映る姿に夢目覚め
今年またワクワクサント引き受ける
節約と浪費の会議十二月
剪定の庭木は春を秘めて見せ

鳥取市 津村 律子

頂点の孤独に嵌るバク政治
ふかふかのお餅が届く師走便
杖たより歩けるだけで感謝する
一二三掛け声かけてやっと立つ

倉吉市 田中紀美恵

減る命孫の笑顔にすくわれる
夢食べて心豊かに喜寿祝う
悲しい夢壺に納めてさようなら
元彼女衿元しつとり夢に出る

倉吉市 田中けいこ

自家製の頂いた胡麻ゴミがある
元氣よくラジオ体操うた歌う
赤ちゃんのお名前きいてすぐ忘れ
何とかなる卵を使う料理なら

境港市 中井虎尾

食べ放題飲み放題は裏があり
初詣善男善女長い列
今師走師でない俺はかたつむり
ウインドにうつった老人俺だった

倉吉市 堀かずこ

太い足ズボンはけない情ない
遊びでは人の心は計れない
食細いおいしい物が食べたいな
年の瀬に出ていかないで諭吉さん

米子市 池岡たけし

晴れ晴れと心も身体も秋の空
苦しくて肩で呼吸する厳しい世
厳しくて生きるいとまの置き所
目覚めどきうまい空気はなによりと

米子市 田村周子

八十路坂犬づき合いも息切れる
酉女いつも忙しくけたたまし
年末も感慨わかず年をとる
いい空気を吸って生きたい地球上

米子市 見山温子

秋日和パンが焼けたと嫁が来る
焼きたてのパンのお礼に葱持たす
下手なりに続け楽しむ五七五
さんまより高い大根半分こ

米子市 永井三津子

人間が大地次次破壊する
文明を呪い地球が病んで行く
仕来たりの渦巻く村へ嫁に行く
歳ことのしがらみ纏い丸くなる

鳥取県 飯野菖子

スランプは何時も私と生きている
手塩かけ投げ売りできぬこの野菜
今日もまた好きな畑で日が沈む
耕して牛が支えた国土です

鳥取県 門村幸子

気配なく予告もなしに震度6
断捨離を後押しさせた震度6
あせつてもあせらなくても今日の床
へこんでいる私に活を入れる風

鳥取県 児 玉 規 雄

亡き友の十八番僕には歌えない
イントロはどれも同じに聞こえます
ヒーローはテーマソングでお出ました
ガンバロウ東北熊本鳥取も

鳥取県 下 田 茂 登 子

心持ちいい炬燵の中で句が出来ぬ
一番の味方はやはり銭でした
一人居に懐寒い十二月
身体は休んでいるが気は重い

鳥取県 橋 谷 静 江

びっくりだ偶に孫からサブライズ
引き出しの掃除なかなか捗らぬ
三度目にやっと見つけた探し物
おだやかな時をすごして花生ける

鳥取県 橋 本 整

前向きに世間を泳ぐ匙加減
斜めから口角沫を飛ばす妻
上品な正座を愚痴る足の指
高齢者支える船が頼りない

松江市 相 見 柳 歩

懐かしい酒でゆっくり根が生える
法律が平和の砦なら同意
プレゼント渡す直前どう言おう
少子化の犯人捜しやめようね

松江市 中 筋 弘 充

不整脈の心当たりを聞く主治医
ホームでは我儘言わぬ偉い義母
薬塗る仕事忘れた薬指
薬指より仕事ができる糸切り歯

松江市 山 根 邦 代

年重ねスローテンポで日が暮れる
あれこれがカクレンボしてオニの役
ストレスを電話に託す友の声
抜けた歯に罪なすりつけ歯科通い

出雲市 黒 目 英 男

過去は過去あと十年は生きたいな
赤ヘルに勇気をもらいいい年に
今日もまた明日を信じて生きている
のんびりと勝ち負けなしのマイペース

雲南市 菅 田 かつ子

ニューフェイス囲んで楽し趣味の会
楽しくて時間がすぐに過ぎてゆく
前向きに生きよ生きよと言うたとして
振り向けば貧乏神がにつこりと

安来市 原 煩 悩 児

半年振りに三代揃うて初茶の湯
去年今年三代揃うて酒気がない
子供でも戦争ごっこは誰もせぬ
原爆で終えた戦争また安保

瀬戸内市 片島秀月

寒い宵妻白鳥ごと湯浴みおり
月の戸を閉めて早寝の老い暮し
病妻の賀状は今年代筆す
寂しさを消す一杯の酒を飲む

瀬戸内市 宮宅比佐恵

無駄かとも思うが義理もかかせない
留守電で気楽にできたおことり
過去は過去日日シンプルに老いたいな
齡重ねやと人間見えてくる

玉野市 片岡富子

かわらけ投げ願う間もなく落ちて行く
ライブ後冬の冷たさ擦り抜ける
人懐こい犬と目が合い会話する
ほっこりとしやべるエアコン暖かい

竹原市 土井輝恵

ヘルパーと二人でケーキクリスマス
逆縁を聞いて長寿が色褪せる
年一度夫婦で受ける惚けテスト
筋トレも脳トレもするしんどさよ

竹原市 六田半徳

八朔の取り入れ済ませ春を待つ
ジョウビタキ早くおどけた顔見せて
まひの手を右手でさすり無事祈る
来年のカーブ新人頼もしい

広島県 日谷寛

正義感生まれバリバリ上機嫌
子が育つひかりひろびろ上機嫌
美しいころキラキラ上機嫌
正面を向いてはれば上機嫌

宇部市 高山清子

軽い嘘ついて急場をやりすごす
たてまえの陰で本音がうずきだす
声出して笑い笑わぬ目の上司
うつり気なお天気老いを振りまわす

下松市 有海静枝

待つことは簡単そうに立つ巨木
水つけを捨てた落ち葉が風と旅
ぶつけた分あなたは楽になったかな
境目にグレーゾーンが何故足せぬ

松山市 近藤修二

猫の目が闇夜に光り冬近し
平行線どこまで続く平和論
もういいかい寒波到来まあだだよ
身内の死孫の誕生救われる

高知市 三谷松太郎

反り竹を直したくなるDNA
老い面がムンクで時にモディリアニ
川柳の詠める家内に気もめて
クモの巣にモミジ一葉風に舞う

北九州市 小松紀子

ジャンボに当たたら夢二つ三つ
老病死わたしもアナタも平等
良いところを見つけ自分をほめてやる
借りもない貸しなどないわたし色

福岡県 本田 さくら

夕日差す明日の催しきつとマル
百道浜母と貝掘り遠い日々
飛行機雲二本並んで何話す
携帯が若者の胸わしづかみ

唐津市 岩崎 實

どうしても信じられない妻はいる
何くそと言葉をくれし友がいる
どうして天へ昇ると言うけれど
動かない窓に木枯し吹きすさぶ

唐津市 吉富節子

近頃は夫に似てきた子の動作
水害は心配ないが原発あり
近頃ははなやぐ気持なくなつた
千葉の友三十年振り夜明けまで

山鹿市 中山好汰

追憶の思いにはせり身近葬
義兄逝き心にボツカリ穴があき
冬眠の虫と一緒に暮らしたい
自然災害忘れずにして日々備え

山鹿市 前田 幸子

新年の暦届いて夢描く
温暖化桜ボケたかチラリホラ
デーサービス笑うかどからシワ延びる
老いた分通帳だけは我が懐炉

山鹿市 柳田 白沙

寒椿ところどころに憂いあり
丁寧に生き丁寧に去った君
死なないぞ眼が言つてた逝かせない
宿題を山ほど残し逝った人

那覇市 前川 真

結論は明日に投げて床につく
空炊きを焦げたやかんにしかられる
妙な癖ばかり息子が学びとる
カラオケで昭和の水を汲みに行く

沖縄県 いのり キヨ

思い付き朝一作句脳目覚め
秋口の体感温度心地良さ
一言が喜怒哀楽の浮き沈み
初生りの新鮮ゴーヤスミージ

沖縄県 高良 秀光

ビール税金飲んで悪酔いへ
生きている快気祝いは我が庭で
自画自賛よせばいいのに一人浮き
大チョンボ兆候知らず痛み知る

(宮すみれさんの句は48頁にあります)

英語 de Senryu ⑥2

麻生路郎句集『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim Horne

日あたりのいいうちだが 物足りなさに 変りない

sunny house

but it is not satisfactory to me

my first impression

酒がいつしか水になつてゐる

sake

turns to watersake

unnoticed

sunny 日の当たる *satisfactory* 十分な *first* 最初の *impression* 印象
unnoticed 知らないままに *turn to* 変わっている *water* 水

～リバーウィローのため息～世界の川柳・俳句 ②

1月号はアフリカ、ガーナのセレスティン・ヌダヌ(Celestine Nudanu)さんの川柳を紹介しました。日本人にガーナのイメージを聞くと、チョコレートとかカカオがまず浮かぶようです。ガーナは1957年にイギリスから独立し、現在はイギリス連邦加盟国で公用語は英語です。首都はアクラ、初代の首相は日本でも知られているエンクルマです。

今月も彼女の川柳と俳句を紹介しましょう。彼女が2016年10月にガーナで初めての俳句集、『ハイク・ラブソディ』*HAIKU Rhapsodies-Verses from Ghana* を出版しました。この俳句集には川柳も入っています。彼女は川柳を「主に自然を焦点に置く俳句と違って、人間の本質をユーモアのひねりを交えて詠む」と、『ハイク・ラブソディ』の中で語っています。彼女の作品を紹介します。日本語で拙訳をつけました。

market day / the stench of unsold wares / fills her stomach(市場の日 売れ残りの芋
の悪臭腹に満つ)

rush hour / hawkers trail the cars / bumper to bumper(ラッシュアワ渋滞の車を追う
売り子)

midday nap / a string of beads / her only cover(昼寝 ビーズ一連だけが彼女の覆い)

twilight / creeping shadows / cover my wrinkles(夕暮れ 忍び寄る影がわがしわを
覆う)

『ハイク・ラブソディ』には、市井の人びとの姿が描かれ、ガーナの人や暮らしが身近に感じられます。この句集はアマゾンで購入できます。

俳風柳多留一二篇研究 44

小栗清吾・細井龍夫

伊吹和男・山田昭夫

石川道子

清 博 美

358 天とう正直あばたがうれのこり

小栗 天道様は正直は、天は公平でえこひいきがないということ（「日」）。

遊里句。よく「天道様は正直」と言うが全くその通りで、張見世の中で痘痕面の醜い遊女は売れ残っているよということ。なお、「天道正直」という四文字熟語がありそうだが、意味は同じだろう。

人ハ正直おたふくがうれのこり 安五鶴2
目あき千人しやもつらハうれのこり

清 賛。同じ流れの身とはいえど、つらからう。 一七二〇

359 ぞくの気がはなれぬで後家目立也

小栗 髪を切った後家ともなれば、本来は俗気を離れて清浄な生活をしなければならぬのに、一向にその気配のない後家。濃い化粧はするは色目は使うはで、誠に目立つ存在である。

若後家の去ルものうとき作りやう明五桜3
とんだ後家はだかになつてぬり立ル

清 賛。

安元信3

360 ぬひならひほめるとどつか持つて行

小栗 縫い習いは、裁縫のけいこ（「日」）。

娘が裁縫の練習を始めたような場合を考えればよいのだろう。「上手にできたねえ」などと褒めてやると、その作品を持つてあつち

こつち見せて廻るという光景だと思ふ。
清 賛。

361 害人ものかみさんたちになぶられる

小栗 そのままの句だろう。「早く嫁さんをもらいなさいよ」だの「好いた人はいるの」だのと、かみさん達の格好のなぶりものになっている一人者。

害人ものかみさんたちがいがいがや

安四宮2

清 賛。この独り者、かみさん達に齒は立つまい。

362 ちんばひきながらまちゃんを買に来る

小栗 馬銭は、ストリキニーネの木の種子から製した薬。その少量を健胃、強壯の目的に使う。毒性が強く、犬や鼠を殺すのにも用いられ、また、江戸時代は、犬にかまれた時に用いるものとされた。番木鱉（「日」）。

犬に噛まれた足を引きずりながら、生薬屋へ馬銭を買いに来る光景。犬を直接言わない表現が技巧。

まちゃんをくださいとすねを巻て来る

一五三

清 賛。

363 そろ／＼と後家をじや法へすゝめ込

小栗 邪法は、人間としての正道にそむいた道〔日〕。

後家を誘惑する菩提寺の坊主という類句多数の一。亭主が死んだ後しかるべき期間も経って、そろそろあっちの方も淋しかろうと口説きに掛かる。説教が商売の坊主にかかつては、後家が邪法へ突進するのも時間の問題である。

若後家はいかいくとくどかれる

清 賛。坊主の口説きを待っている後家も居る。 末二15

364 よくに目がくれてぼたもちを喰ってゐる

小栗 目がくれるは、欲望や利益のために心を奪われて、道理にはずれた判断を下す。欲や金のために目がくらむ〔日〕。

持参嫁の句。持参金に目が眩んで牡丹餅〔醜女〕を嫁に貰うというお馴染み類句多数の一。金かほしさにぼた餅を喰っている

一七三

清 賛。

365 三味せんをつめてひいてゝさがさせる

小栗 三味線の撥が見当たらないので、取り敢えず爪弾きをしながら、撥を探させている光景。ただ、この主人公が誰か悩ましい。

①自分で探すことができないことに力点をおけば、替女が考えられる。しかし、替女の身分・立場を考えると「探させる」という語感に合わない感じがする。

②撥がなくても取り敢えず爪弾きでも三味線を弾かなければならないことに力点をおけば、踊子が考えられる。留守居に対し遠慮のない態度を取る様子を詠んだ句とすれば「探させる」が生きて来ることにはなる。

③「探させる」という横柄な態度に力点をおけば、妾が考えられる。自分で探すのが面倒臭いので、とにかく誰かにやらせるのである。礎稿としては一応②としておくが、決め手はないので諸兄のご意見に従う。

細井 ①だとしても、どうもピタッとしれない。③の妾、あるいは唄いと考えるなら、撥以外の物を探させようとしているのではない。但し、それらしい類句は見当たらない。

山田 どちらかといえば③。とにかく決め手

がない。

清 賛。決め手がないのは句が拙劣だから？

366 盃をまん中へ姫さしてにげ

小栗 盃を差すは、酒席で、相手の盃に酒を注ぎ、酒をすすめる〔日〕。

初々しい嫁は酒席は苦手ということになった。主題句もその一つと思うが、「真ん中へ」がはっきりしない。①誰ということなく座敷の真ん中へ盃を置いてお酌して逃げたというのか、それとも②誰に差していいかわからないので、とにかく真ん中に座っている客に差して逃げたというのか。柳雨氏は「川柳風俗志」に採って「誰とさ、ずに席の中央に置いて逃げ込む」と頭注されており、①説のようである。

盃を宿なしにして姫ハ立ち 第三39
も似たような光景であろうか。よく分からぬが、先人に敬意を表してこの説を頂戴する。ただ、座敷の真ん中に盃を置くというのは何か違和感があり、

年ばいなほうへ花嫁さしてにげ 一三二
の句もあるので、②説も捨てがたく思っている。

清 これも前の句と同じ。

愛染帖

新家 完司選

(投句) 281名

堺市 内藤 憲彦

子ども達ごらんよあれが真珠湾

(評) 真珠湾とは美しい響きだが遊園地ではない。私たちの国が地獄へと突き進んだ出発点。子供達よ、そのことを忘れないように。

奈良市 大久保眞澄

滑舌は悪くなつてもへらず口

(評) 若い頃のようにテンポ良く喋ることはできなくなったが、負けず嫌いは衰えていない。言いたいことは言わせていただく。

池田市 太田 省三

方丈記トイレの中で讀んじる

(評) 行く川のながれは絶えずして……。リズミカルな名文もたまに読み返さないと忘れてしまう。誰にも邪魔されないトイレは最適。

鳥取市 前田 楓花

「里の秋」聴いて女の子にもどる

(評) 幼い頃に覚えた歌は生涯忘れない。「里の秋」の三番は特に切ない。♪……ああ父さんよご無事でと、今夜も母さんと祈ります。

堺市 矢倉 五月

恋人ごっこしましょ電飾御堂筋

(評) 晩秋から正月過ぎまで、ロマンティックな光に彩られる御堂筋。「恋人ごっこ」から恋が生まれることなきにしもあらず。

河内長野市 藤塚 克三

しゃぶしゃぶもじゃぶじゃぶにする食べ盛り

(評) 細やかな味わいなどより「量」がおいしい食べ盛り。一枚ずつ上品に「しゃぶしゃぶ」ではなく、ドサツと入れて掻き回して……。

豊中市 松尾美智代

十歳も若い人とは競わない

(評) 二つか三つならまだしも、十歳ともなれば「世代の差」。体力も知力も感性も敵の方が上。経験の力もヤングパワーに及ばない。

西中市 西田美恵子

若い子が話す知らない日本語

(評) 「激おこぶぶん丸」ぐらいなら推定できるが、「バリビたい」にはお手上げ。いつの間にかこんなものが日本語になったのだ?

熊本市 杉野 羅天

絶世の美女も来ていた大相撲

(評) 相撲は一瞬で勝負がつくので、あとは別嬪さんを眺めていたいのだが……。土俵上でもウロウロしている力士や行司が目障り。

神戸市 細川 花門

もう少し生きてみようか閑だから

(評) 誰しも「もう少し生きてみたい」と思

つてはいるが、その理由が「閑だから」とはユニーク。閑でボケないようにしよう。

倉吉市 中村 毅

ガンバレー迂闊に言えば叱られる

箕面市 中山 春代

頑張らないもともと私みそつかす

奈良県 安福 和夫

孫の顔憂い帯びると俺に似る

松戸市 山下 明子

自問自答悦にいる孫誰に似た

沖繩県 森山 文切

傷ひとつなくて疑われる脚立

鳥取市 奥田 由美

医師ほどに患者観察待ち時間

交野市 田岡 九好

どのように乗ったか枯葉バスの中

豊中市 木藤こみつ

マクドナルドのハンバーガーはウエルダン

大阪市 江島谷勝弘

ちいさめのボタもち一つ落ちてきた

田辺市 岡本 昇

悩み事ともかく寝よう朝が来る

大阪市 笠嶋 恵美

気前良く捨てろ捨てろと御念仏

鳥取県 児玉 規雄

賽銭は投げてお布施はそつと出す

豊中市 貝塚 正子

「君の名は」孫との会話囁み合わず

寝屋川市 岡本 勲
にぎやかな妻を静かにする鏡

大阪市 柴本ばつは
鈍いようでも浪花女はやりまっせ

奈良市 森中 博一
大仏さん外国人を半眼で

鳥取市 永原 昌鼓
石浦も神っていたな十連勝

広島市 岸本 清
ピコ太郎真似て心身ときほくす

鳥取県 門村 幸子
余力ないが安眠力という宝

唐津市 坂本 蜂朗
正直な写真まじまじ現在地

和歌山市 福井 菜摘
繻いづく蝶がもの言う一周忌

長野県 丸山 健三
味噌汁が変わらぬ朝を連れてくる

不器用であるが杭にはされている
馬珂貝があぶくを吐いている地球

桜井市 安土 理恵
十二月ポスト立ち位置落ち着かぬ

羽曳野市 中川ひろ介
のど飴も控えなさいと血糖値

船溜まり残る昭和の世帯船
鰯鍋は肝炒り直し白子入

八尾市 高杉 千歩
昨日も明日も食べて寝るだけケアハウス

和歌山市 平田 元三
放置する古い空家も粗大ゴミ

京都市 榎本 宏子
バクハツの芸術だらう敷き紅葉

堺市 村上 玄也
民主主義国家が右傾する兆

岡山県 紫 しめの
どこまでも燃費の悪い夫である

松江市 石橋 芳山
ケンカしてしばらく冷水に浸かる

三田市 上田ひとみ
言い訳のだから角ゴシック体

お酒さえ飲めばなんとか乗りきれ
特別に言いたいこともない年賀

沖縄県 島尻 卓
心理学驚天動地児童自死

鳥取県 斉尾くにこ
気の弱さ克服できず歳を取り

冬の寒さも闇の黒さも忘れている
うれしいなきみのオーバリアクション

大阪府 高杉 力
浮かんだ句書いたレシート見当たらず

アンコール曲の譜面も用意され
誰も来ない日片付けはあと回し

節約はしても一点豪華主義
節約はしても一点豪華主義

神戸市 富永 恭子
上質な言葉と出合う師走雨

橋本市 石田 隆彦
心を磨くことばもやわらかい

岡山市 丹下 凱夫
長風呂をしても名句が出来もせず

箕面市 広島 巴子
川柳もあれこれそれになる予感

鳥取県 竹信 照彦
川柳もアートだ次はノーベル賞

神戸市 山崎 武彦
季節がもうあかん言うてる温暖化

安来市 原 煩惱児
文芸欄見たよと友の便りあり

和歌山市 古久保和子
いつも何か探しつつける犬の鼻

松原市 森松まつお
もう一步前へTOTOに指示される

貝塚市 吉道あかね
瞑想が居眠りになる日向ぼこ

高槻市 初代 正彦
カジノとはずばり言わずにアイアール

米子市 後藤美恵子
バス廃止に動脈硬化おこす村

神戸市 山口 光久
弁解を監視カメラが許さない

大阪市 若本 安代
漱石のアンドロイドはいい笑顔

米子市 竹村紀の治

呑み屋にも喫茶店にも僕の席

神戸市 能勢 利子

下戸がつぐビールはいつも泡六分

堺市 奥 時雄

骨酒で魚成仏させてやる

和歌山市 武本 碧

缶チューハイ二個でいつもの癖が出る

札幌市 三浦 強一

熱熱を吹いて独りの酒と鍋

那覇市 前川 真

酒の精忘れた記憶こじ開ける

八幡市 今井万紗子

気分よく飲んでる顔が一番や

茨木市 藤井 正雄

辛抱をしるとライバル注ぎにくる

弘前市 稲見 則彦

飲みかけの四合瓶だが記憶ない

大阪市 井丸 昌紀

赤ちようちんで飲み直してた名幹事

三原市 笹重 耕三

年末の酒に飲まれている不満

唐津市 仁部 四郎

キリストも釈迦も御存知屠蘇の価値

大洲市 花岡 順子

やれやれと玄関先で寝てしまい

神戸市 松井 文香

午前さま無事確かめて後は無視

大阪市 佐藤 忠昭

今日日本社句会済んだら梯子酒

笠岡市 藤井 智史

ちよい呑みもできぬマイカー勤である

大阪市 古今堂蕉子

座つたら立てぬ疲れはマキシママ

米子市 成田 雨奇

金持は自慢したくて庭作る

岡山県 山縣のぶ子

緩やかな定規に代えて母を訪う

藤井寺市 鈴木いさお

もう少し勇気があれば別れてた

河内長野市 山岡富美子

地球儀が歪んできたか転び癖

大阪市 田浦 實

逆さ地図眺めて見える新日本

大阪市 平井美智子

しだとはわかっていても試すM

寝屋川市 伊達 郁夫

軍手脱ぎぶかり湯舟に浮いてます

香芝市 大内 朝子

厚かましいおばちゃんを見て笑えない

豊橋市 藤田 千休

あの鐘を鳴らさなかったテレビ局

沖縄県 あらさくら

背中ボン重い腰あげ壇上へ

枚方市 海老池 洋

発想の転換をする股覗き

倉吉市 岡崎美知江

断捨離を決断させた震度6

倉吉市 山中 康子

いさぎよく断捨離したが買えば金

堺市 羽田野洋介

自分では優しい人のつもりだが

宝塚市 太田としお

どなたでも七つの顔を持つてはる

奈良市 阿部 紀子

こんなにもしんどい時も爪は伸び

堺市 澤井 敏治

点滴中もヒゲは黙って伸びている

大阪市 大川 桃花

パパと孫の世話が大変ママお産

鳥取市 谷口回春子

孫が呼ぶおやつ欲しい時にだけ

和歌山県 森下よりこ

仏壇に孫の好物供えとく

三田市 谷口 修平

死ぬまでにも一度バブル来てほしい

岡山県 田中 恵

目覚めてもしばらく団子虫になる

枚方市 寺川 弘一

血液検査100点ですと言われたが

横浜市 川島 良子

高級クリーム誰も変化に気付かない

四條畷市 吉岡 修

神さまの喧嘩で地球四季狂う

東大阪市 佐々木満作

三回りも若い主治医に論される

府中市 岸田 武

パソコンに診察されたようなもの

大阪市 榑尾 奏子

伊達眼鏡何を隠しているんだい

島取市 夏目 一粹

腹いせが上から順に下りてくる

長岡京市 山田 葉子

観覧車降りたらロマン消えている

塩竈市 木田比呂朗

日記には思い出せない丸印

豊中市 水野 黒兎

一週前の手帳の記号意味不明

島取市 岸本 孝子

一筆箋少ない文字に思い込め

河内長野市 森田 旅人

花束を抱え男の退職日

下松市 有海 静枝

本人のチェックなく出る遺稿集

大阪市 藤田 武人

傘持ってフルスイングの決めポーズ

島取市 倉益 一瑤

にわか雨いい口実に使えそう

神戸市 上田 和宏

トランプを後知恵たちが追っている

大阪府 米澤 俣子

家中で一番背丈縮んでる

沖繩県 高良 秀光

まだ捨てぬ夢はこれから二輪草

羽曳野市 吉村久仁雄

やる気スイッチ入れて受講のシニア塾

大阪府 小柏こずえ

声出して笑うだけでも元氣出る

高槻市 片山かずお

チョイ悪の方が人生楽しそう

三田市 東内美智子

落葉掃く作業衣の肩また落葉

三原市 鴨田 昭紀

金持ちの音と貧乏人の音

高槻市 安田 忠子

古写真どれも若くて美しい

河内長野市 村上 直樹

本心は心の襷の裏のウラ

西脇市 七反田順子

人力車外人さんが引いてはる

河内長野市 渡邊 修

女房とショートメールで用が足り

米子市 中原 章子

引つ越しに一紙断る良いチャンス

今治市 渡邊伊津志

揺れながら糞虫じつと春を待つ

三田市 上垣キヨミ

蟹の鍋話の続き後回し

宇部市 平田 実男

余命あと十年というブラン立て

岸和田市 雪本 珠子

裏道を抜けたら月が笑ってた

唐津市 山口 高明

星の降る夜だ人生語ろうか

山口市 青木 隆子

最後まで見て気がついた見た映画

京都市 清水 英旺

そこそこの人がラ抜きで喋らはる

島取市 吉田 弘子

生前退位譲位も無理な割烹着

東かがわ市 川崎ひかり

それぞれに合わぬ時計の三世代

神戸市 近藤 勝正

この寒さ返したくない免許証

八尾市 村上ミツ子

自分で決めた締め切りを守れない

米子市 生田 和之

後期とはよくも名付けたお役人

八尾市 山根 妙子

その時の気分で歳を記入する

和歌山市 磯部 義雄

伸び代を信じ息子へ出す学費

藤井寺市 田付 絹枝

身は痩せず蘭茎が痩せてアツブアブ

奈良県 谷川 憲

アトム読み原子に夢を見た昭和

八尾市 宮崎シマ子

病人に言葉を選ぶクリスマス

共選欄

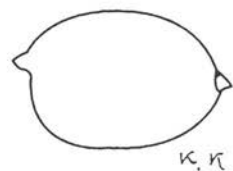
檸檬

檸檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 368名)



「チクチク」北野哲男選

轟とあべのハルカス群を抜く
チクチクと胃が催促をするお酒
チクチクと嫌みを含む美辞麗句
チクチクと攻められハート牌が入る
チクチクと厭み言い合う倦怠期
諍いの痛みチクチクすきま風
チクチクと針のセリフを持つ妻よ
忘れてた事をチクチク妻の愚痴
古傷をチクチクつく妻である
チクチクと妻の小言はエンドレス
チクチクは性に合わないどんとこい
皮肉でもズバリと言って欲しかった
もひとりの私が責める胃の痛み
チクチクと小骨が混じるジョーク聞く
チクチクと胸にこたえる虐待死

箕面市	寺井	柳童
三田市	堀	正和
東大阪市	北村	賢子
和歌山市	坂部紀久子	
京都市	清水	英旺
神戸市	奥澤洋次郎	
高槻市	富田	美義
枚方市	藤村	亜成
大洲市	中居	善信
豊中市	松尾美智代	
生駒市	飛永ふりこ	
八尾市	田邊	浩三
犬山市	金子美千代	
島根県	伊藤	寿美
堺市	近藤	治子

「チクチク」安土理恵選

やんわりと包みチクチク京言葉
チクチクと私に迫る余命表
チクチクの始まり世間話から
反抗期チクチク母を責めた悔い
チクチクと胸に痛いわその言葉
度忘れか惚けかと妻の軽いジャブ
注射持ち言わずもがなを医者は言い
女房の小指噛んだ歯今虫歯
怒鳴られた方がましですその小言
ちくちくと嫌味話の輪が崩れ
着るたびに亡母の針目が懐かしい
会うたびに免許返す日聞く息子
天辺の椅子で胃ぐすり飲んでいる
虐待といじめの活字胸を刺す
人の腹チクチク触るもんじやない

大阪市	井丸	昌紀
岩出市	藤原はのか	
高槻市	富田	美義
大阪市	大川	桃花
上尾市	中村	伸子
神戸市	山崎	武彦
堺市	奥	時雄
篠山市	長澤	喜弘
大阪市	藤田	武人
奈良市	宇賀	史郎
枚方市	小林	わこ
河内長野市	渡邊	修
奈良県	渡辺	富子
橋本市	石田	隆彦
大阪市	近藤	正

チクチクと疼いた恋の青春譜	和歌山市	北原 昭枝
断ち切れぬ思いチクチク胸を刺す	高槻市	島田千鶴子
気晴らしのチクチク愚痴が趣味になる	河内長野市	辻村 ヒロ
チクチクと細かい人や意気地無し	河内長野市	穂口 正子
約束の小指チクチク眠らせぬ	藤井寺市	鴨谷瑠美子
チクチクの逆手も覚え定年日	唐津市	仁部 四郎
嘘つけぬ針千本のネコジャラシ	西脇市	七反田順子
チクチクとつくイケズの極意なり	奈良市	大久保真澄
今更にチクチク痛む親不孝	西宮市	亀岡 哲子
褒め言葉か嫌みなのが超微妙	河内長野市	大島ともこ
古傷がチクチク覗くクラス会	小野市	田中 辰夫
失恋の欠片チクチク刺す未練	横浜市	川島 良子
あの顔でまあチクチクと責めてくる	上尾市	中村 伸子
ちくちくと嫌味話の輪が崩れ	奈良市	宇賀 史郎
チクチクへやめてと叫ぶ胸の内	岡山県	山縣のぶ子
チクチクと胸の住んでる君の影	貝塚市	石田ひろ子
チクチクと心底探る友が来る	大阪市	近藤 正
袖にして胸がチクチクまだ痛む	防府市	坂本 加代
呆けなやとチクチク刺激くれすぎる	大阪市	古今堂蕉子
チクチクと嫌み未練があるらしい	貝塚市	吉道あかね
姑はチクチク舅はボソボソ	堺市	松永 庄三
丁寧な言葉の語尾が胃にチクリ	三田市	久保田千代
チクチクと胸刺す母の置手紙	鳥取市	谷口回春子

聞き上手チクチク本音言われる	藤井寺市	鴨谷瑠美子
病む人に嘘ついた日の歯の疼き	大阪市	平井美智子
もう無心バッチワークの針運び	堺市	矢倉 五月
河豚の肝チクチク舌を刺す怖さ	松原市	森松まつお
チクチクも鍼の刺激は心地良い	堺市	坂上 淳司
まあ一服チクチク言うのその後や	八幡市	今井万紗子
チクチクに返す忠告ありがとう	寝屋川市	籠島 恵子
痛くない腹探られてうざきだす	大阪市	坂 裕之
チクチクと噂聞くのは辛いこと	富田林市	中井 アキ
君の世辞どうもチクチクするんです	堺市	澤井 敏治
チクチクと言われた人を介護する	藤井寺市	太田扶美代
妻の愚痴ちくちく効いて病だれ	札幌市	小沢 淳
チクチクと嫌み未練があるらしい	貝塚市	吉道あかね
菟弱も豆腐も御免針供養	尼崎市	清水久美子
恩着せのチクチク毛穴から沁みる	和歌山市	楠見 章子
呆けなやとチクチク刺激くれすぎる	大阪市	古今堂蕉子
地獄行き針の筵で修行中	男鹿市	伊藤のぶよし
過去の罪チクチクチクと返し縫い	鳥取市	福西 茶子
要するに言いたいことは何ですか	三田市	上田ひとみ
何食わぬ顔でチクリと刺していく	藤井寺市	高田美代子
チクチクと活路を開く継ぎ歩攻め	高槻市	初代 正彦
バラの花一筆箋に刺がある	西脇市	七反田順子
大局のチクチクなんて何の其の	神戸市	松井 文香

チクチクの嫌み雷よりこたえ

亀の子で擦られ氣持ちよい頭皮

女課長チクチク刺のある訓辞

チクチクの皮肉啖呵で切り返す

雑巾を縫った昔がなつかしい

良心が針の筵に座らされ

地獄行き針の筵で修行中

君の世辞どうもチクチクするんです

柔肌を恋しがってるボクのひげ

チクチクの髭の剃り跡思ひ出す

何気無い姑の言葉が胸を刺す

天辺の椅子で胃ぐすり飲んでいる

反抗期チクチク母を責めた悔い

九条を針の筵に座らせる

年金をチクチク針で攻めてくる

刺のある花に男は触れたがる

尿酸値高いと告げる足の指

チクチクと失くした筈の胃が痛む

チクチクと神経痛の予報官

秀句

チクチクと言われた人を介護する
要するに言いたいことは何ですか

チクチクと免許返納迫られる

加西市 山端なつみ

松江市 中筋 弘充

宇部市 高山 清子

八尾市 宮崎シマ子

三田市 辻 開子

枚方市 海老池 洋

男鹿市 伊藤のぶよし

堺市 澤井 敏治

池田市 上山 堅坊

出雲市 伊藤 玲子

藤井寺市 鈴木いさお

奈良県 渡辺 富子

大阪市 大川 桃花

豊橋市 藤田 千休

大阪市 川端 一步

大阪市 升成 好

池田市 太田 省三

富田林市 中村 恵

札幌市 富永 恵子

藤井寺市 太田扶美代

三田市 上田ひとみ

米子市 竹村紀の治

チクチクと女同士はやりにくい

嘘つけばチクチク痛む場所がある

僕だって時々良心が痛む

チクチクはバワハラですかセクハラか

チクチクと言うてはりますうちの人

セーターはもう脱ぎ捨てていいですか

良心が針の筵に座らされ

大きくは叱れぬ人が刺す小針

衣食住足りると膝が痛み出す

金婚へひと目ひと目と縫い上げる

チクチクの言葉へ嫁の倍返し

栗のイガほどの小言を聞いている

チクチクの間合い測って共白髪

美辞麗句チクチク痛いことを言う

後で効く言葉巧みな誉め殺し

チクチクの嫌みマナーモードで聞く

嫁と母そしてボクとのサバイバル

痛いからバラを抱きしめたりしない

千人針銃後にあった火のページ

秀句

棘のある言葉は鎧だったのだ

サボテンの小さな刺に挑まれる

良心を捨てて刺さった棘がある

海南市 堂上 泰女

紀の川市 楠原 富香

奈良市 米田 恭昌

神戸市 細川 花門

奈良県 長谷川崇明

佐賀県 真島久美子

枚方市 海老池 洋

橿原市 居谷真理子

三田市 堀 正和

大阪市 原田すみ子

藤井寺市 増井ヨシ枝

鳥取市 岸本 孝子

唐津市 仁部 四郎

弘前市 福士 慕情

下松市 有海 静枝

貝塚市 石田ひろ子

弘前市 稲見 則彦

奈良市 大久保眞澄

西宮市 緒方美津子

大阪市 栃尾 奏子

大阪市 津村志華子

河内長野市 中島 一彌

橘高薫風句抄

〔橘高薫風川柳句集〕平成十三年発刊

行き返り牛はおんなじ歩巾なり
象の小屋鎖ひきずる音ばかり
似は似ても狼の影犬の影
逃げるための脚を氈鹿さずけられ
紫の椅子の愁いはわが愁い
青春は旗翻えるごとくなり
湖の孤独は雲を映すのみ
一線を自分で引いて淋しがり
宰相の私生児として生れ落ち
俗中の俗ライターを和尚持ち
クラブ振る作家となりぬこの人も
パチンコの玉にも愚弄されて去に
複雑な世相とオモチャ屋も思い
病院の風呂から藤の棚が見え
病室に林檎健康色過ぎる

重症へ冬の母が届けられ
肺病が癒った時に寿命が来
僕の齡啄木はもう死んでいた
手術台思想も恋も捨ててのり
酒徒あまた李白の気概すでになし
酒の手のあがりしのに四十過ぐ
裏切った方も酒量が増えてくる
本心を明かした酒がまだ醒めず
稲門の出とアル中は別のこと
居酒屋の楽書帖に詩人の名
飲み仲間誰が誘うたわけでなし
二次会のここも早稲田の歌になり
炬燵から片手だけ出し飲んでいる
鶯の啼く庭に來た執達吏
執達吏オーバー帰るまで脱がず
某月某日 税吏のメモの怖さ
税務署へすかたん言うて押し通し

「防 ぐ」

(投句 229名)

西 口 いわゑ 選



口ださず笑みで防御の妻の勝ち
 老化を防ぐ異性の友がひとり居る
 五欲と理性正しく生きる矛と盾
 笑う声病を防ぐ呪文です
 防波堤だった父母介護する
 毒少々飲んで免疫つけている
 雪の道へつぱり腰の君に会う
 好奇心頭の老化防ぐ役
 団子虫になって妻の攻め防ぐ
 風よけの筈の妻から凄い風
 期限切れ防災食を食べる幸
 難聴が口撃防ぐ役に立ち
 老化を防ぐサブリに恋の色つける
 駆けつけ警護だれが防ぐかあなたの死
 防災がすすまないのでに再稼働
 無防備にコンニャクに頬叩かれる
 気が弱く目立たぬように群れにいる
 女です鉄のガードで生きてます
 サビ止めの効果か君は腐らない
 列島を防ぐ安倍さん信じたい

高槻市	富田	美義
藤井寺市	太田扶美代	
枚方市	寺川 弘一	
高槻市	島田千鶴子	
岡山県	紫 しめの	
札幌市	小沢 淳	
西宮市	福島 弘子	
三田市	北野 哲男	
藤井寺市	鈴木いさお	
堺市	内藤 憲彦	
和歌山市	上田 紀子	
堺市	奥 時雄	
京都市	榎本 宏子	
羽曳野市	吉村久仁雄	
堺市	遠山 唯教	
松江市	石橋 芳山	
鳥取市	池澤 大鯨	
佐賀県	真島久美子	
神戸市	富永 恭子	
倉吉市	山中 康子	

女三人防音壁を作らねば

五七五楽しくアンチエイジング

逆風も笑い飛ばして生きのびる

九条が防いでくれて平和です

押し寄せる老化を防ぐのは気力

さえぎるものいっさい拒む冬木立

悪いことしません両手つり革に

無防備に立つてはいられないホーム

白杖にそつと手添える勇氣なく

すきま風カイロ心に貼ってみる

防災は訓練ごっこでは済まぬ

予防線解けてやさしい風に逢う

佳 句

黙秘権子もそれなりの自衛策

防潮堤海と話はもうできず

十五歳防備の備えなく進む

花育でこころの老化防いでる

群れなして天敵防ぐ雑魚の知恵

人

プライドを修理に出しておとなしい

地

防人の唄を奏でる岬の灯

天

アスファルトジャンゲル脱むカメラの目

軸

無防備になお美しく野の花よ

大阪府 米澤 淑子

山口市 青木 隆子

香芝市 大内 朝子

三田市 多田 雅尚

神戸市 山口 光久

奈良県 渡辺 富子

大阪市 高杉 力

河内長野市 木見谷孝代

大阪市 磯島福貴子

三田市 野口 晶子

高槻市 松岡 篤

八幡市 今井万紗子

紀の川市 宇野 幹子

橿原市 居谷真理子

大阪市 柴本ばつは

豊中市 松尾美智代

和歌山市 福井 菜摘

富田林市 片岡智恵子

茨木市 藤井 正雄

三浦 強一

「変身」

(投句 229名)

丹下 凱夫 選



どこよりも脳の変身いそぎます
変身し苛めてみたい苛めっこ
落款を押すと変身する色紙
裕次郎真似てかけてたサングラス
Aカップお出かけする日Dカップ
生まれ変わるならだんぜん男です
お宝はウルトラマンの第一号
ウィッグで十歳鯖を読むつもり
私のすっぴん隠すペンネーム
伊達直人変身止めて名乗り出る
カミングアウトしてから化粧派手になり
四コマ目口紅の色変えただけ
20キロ痩せた夫に惚れ直す
分かりやすいビジョンが会社変えていく
息子が娘になった話を聞かされる
カップメンウルトラマンは食えず去る
パパだって変身したい朝帰り
百面相を見飽きたという鏡
ピンヒールはいて走っている私
過半数占めれば強行するのです

四条畷市 吉岡 修
沖繩県 島尻 卓
札幌市 三浦 強一
弘前市 稲見 則彦
三田市 福田 好文
犬山市 金子美千代
大阪市 江島谷勝弘
鳥取市 福西 茶子
防府市 坂本 加代
三田市 多田 雅尚
堺市 矢倉 五月
紀の川市 楠原 富香
尼崎市 清水久美子
奈良県 谷川 憲
高槻市 片山かずお
笠岡市 藤井 智史
弘前市 高森 一吞
男鹿市 伊藤のぶよし
三田市 上田ひとみ
三田市 堀 正和

何万年も変身できぬ核のゴミ
変身をしたのに誰も気づかない
クラス会みんな上手に化けてくる
三度目の変身かなりきつい面
変身をしてでもせんでも君が好き
誰が相手でも変身したくない
おばあさんの舞妓体験お断り
すばつと断捨離変身した我が家
ビチビチが皺しわ歳月の無情
真ん中に明るくなつた孫がいる
エイヤーと気合いを入れて一回り
変身の術を覚えた丸い背な

佳句

こつそりと夜に鱗を剥いている
赤い丸描けば白布がずつしりと
ふるりの根っこ変身などしない
変身はしたが必殺技がない
あと少し骨に変身するわたし

人

少しずつ尻尾を切つて人になる

地

ぐつすり眠り変身する準備

天

へんしんと叫ぶ子供の真剣さ

軸

自分探しの旅ですワンカップ

大阪市 宇都満知子
高槻市 初代 正彦
高槻市 原 洋志
岡山市 永見 心咲
神戸市 山口 光久
米子市 成田 雨奇
奈良市 大久保眞澄
大阪市 柴本ばつは
香芝市 大内 朝子
鳥取市 夏目 一粋
倉吉市 大羽 雄大
堺市 澤井 敏治
紀の川市 辻内 次根
橿原市 居谷真理子
三原市 笹重 耕三
松江市 石橋 芳山
大阪市 古今堂蕉子
倉吉市 牧野 芳光
佐賀県 真島久美子
沖繩県 森山 文切

初し教室

題一人形

居谷 真理子

「人形」、面白い題ですね。いろんな人形を思い浮かべてみましょう。投句では雛人形が圧倒的に多かったですが、男雛や女雛、官女達など個別に詠んだ句はありませんでした。では、今月も「参」は参考句としてお読み下さい。

原 いやになる自分自身のう頂点 秀光

秀光さん、すみません。三句ともお題との関連性が見つけられませんでした。原句とはかなり離れますが

参 有頂天だったあの日は木偶だった

原 帰りたいみちのく恋しと泣くこけし 里子
帰りたい、恋し、と同じような言葉が重なりました。

参 みちのくが恋し恋しと泣くこけし

原 人よりも泣き方上手浄瑠璃は

なつみ

人形を主人公にして

参 浄瑠璃にのせて人より上手く泣く

原 青い目の人形古希過ぎ息災か

勝正

参 青い目の人形もまた古希を過ぎ

原 人形の家そろそろ建て替えねば

寧

参 人形の家もそろそろリフォームに

原 ひな人形チラシ商戦年の暮れ

雄大

参 ひな人形のチラシも入る年の暮れ

原 白に赤ロゼを加えてひな祭り

崇明

参 祭りは白酒でしょ！などとは申しませ

原 緋のもうせんも浮かぶ美しい句です。お

洒落に決めましょう。

参 白に赤ロゼで大人のひな祭り

原 人形は暑さ寒さにぐち言わぬ

満寿恵

うーん、その通りなんです

参 人形の愚痴など聞いたことがない

原 淋しげな白い顔のせ流し雛

敬子

「淋しげな」は読者の想像にまかせた。

参 流し雛空を見ている白い顔

原 山里に案山子人形展覧会

勝治

参 山里に案山子並べるおもてなし

原 雛人形母と飾った香りあり

(高)弥生

参 雛人形母と飾った日の香り

原 招き猫お客さん呼び盛況だ

英男

参 招き猫客を呼んでる自負がある

原 雛段へグリーンジャーが勢揃い

風露

参 雛壇へ勢揃いするグリーンジャー

原 風入れる古稀を過ぎて雛人形

律子

参 雛も古稀やわらかい風入れましょう

原 アンティークドール青い眼うるむ異国空

参 アンティークドール異国で眼がうるむ

原 愛着がたくさんあるが供養へと

参 愛着を断って人形供養へと

開子

原 変りびな世相写して変りびな

参 様様に世相映して変りびな

福貴子

原 人形のような顔してきついこと

人形もいろいろです。具体的に言った方が

句が生きそうです。

参 きついこと京人形の顔をして

原 人形残し娘は家を後にした

忠貞

娘さんは結婚？自立？留学？それが分から

ないので作者の気持ちが掴めません。

参 娘は自立部屋にボツンとお人形

原 あやつりの人形のように踊らされ

昭枝

参 あやつりの人形として踊らされ

原夫の名をつけた人形へべーをする 洋子

夫は「つま」と読ませますか。「おっと」

と読んだ方が句の軽みと合いますね。

参夫の名つけた人形へアツカンペー

原人形に戻った母を抱く介護 良一

「戻った」の語は適切でしょうか。

参人形になった母さん抱く介護

原人形で育ち人間に变身 安子

原ひと筆が人形に命吹き込む

両句とも十七音字ですが凝った作りです。

素直に作り変えてみました。

参人形で育ち風雨で人間に

参人形に命吹き込む筆の先

原なんとなく似ている小芥子出合う旅 博一

省略は見事。リズムを整えて

参なんとなく似てゐる小芥子に出合う旅

原ロボットが人間支配近未来 紀雄

自分に引き寄せて危機感を強めました。

参ロボットが僕をあやつる近未来

原京雛に負けぬけけしの細い眉 和之

参京雛に負けぬけけしの眉の線

原過ぎし時間ケースの人形黄昏る 道子

「たそがる」と読めば六八四となり、かな

り無理があります。

参ケースでの月日人形黄昏れる

原人形もわが友生きて九〇才

参人形も友の一人で九十歳

原ロボットに話かけては癒される こずえ

参ロボットに話しひととき癒される

原初孫の横に並んだデディベアー 洋一

参初孫の横に大きなデディー・ベア

原ベッドまわり賑やかクマとリカちゃんと 明子

参子のベッド見守るクマとリカちゃんと

原こけし達津波と共に天へ逝き (芥) 宏子

上六になりますが「も」をつけたい

参こけし達も津波と共に天へ逝き

原喋る人形同じ言葉で飽きがきた 美智子

参喋る人形同じ言葉を繰り返す

原市松人形目をパッチリと眠らない 温子

参市松人形この世見つめて眠らない

原郷里で聞く人形浄瑠璃なつかしい 節子

郷里は「さと」とルビがふつてありました

が、里の一字で良いでしょう。ふるさとの意

味もありますから。

参里で聞く人形浄瑠璃がしみる

原人形に本音を言わす腹話術

難のない安定した句です。しかしその長所

は平凡さにもつながります。独自の観点を。

参人形の本音聞きたい腹話術

【佳句】

人形も次第に命持ち始め 孔一

子ら巢立ち蟄居してます雛人形 旅人

異国の居間に色褪せたまま藤娘 のり子

ビノキオも大臣も鼻高くなり 澄子

川の子で仲良く眠るスイグルミ 由美

マネキンのように着替える披露宴 敏昭

人形に留守居をさせて街に出る まさる

人形をママの口調でお説教 治子

五十年操られてる見えぬ糸 修平

マネキンが着ていた時は華があり 真

菊人形ストレス溜めて最終日 恵子

【今月の推せん句】

指人形のそれぞれ持つっている個性

木藤こみつ

アンコありソップもありの紙相撲

中島 一彌

愛されることしか知らぬお人形

原熊知津子

川柳塔鑑賞

同人吟 楽原道夫

—1月号から

電飾が都会の冬を告げている

山岡 富美子

「電飾（デンシヨク）」という文字と音が、都会の冬を告げるものとしてピッタリだと感じた。「イルミネーション」では、人がたくさんいるのに寒々とした都会の冬には似合わない。さて、都会の夏を告げる灯りは何かというと、「ネオンサイン」でしょう。

小吉がだんだん好きになってきた

田浦 實

凶が出るよりはましたが、いつ籤を引いても小吉しか出ない「私」。大吉など、ついぞお目にかかったことがない。ところが、不思議なことに、その小吉がだんだん好きになってきたというのである。それは、小吉にふさわしい自分を愛しいと思うようになってきたからだだろう。

山彦が拭ってくれた気の迷い

佐々木 満作

「ヤッホー」と尾を引いて返ってくる山彦に気の迷いも拭われたということだが、もしかすると、大声で「ヤッホー」と叫んだときに、気の迷いはほとんどなくなっていたのかもしれない。

破れ傘やつてられないことばかり

石橋 芳山

このところ、やることなすこと全てがうまくいかない。今日もくたくたになって帰りの電車に乗った。改札を出ると雨が降っている。そうだ、善意の傘があつたはず。あつた、あつた。安いビニール傘でも借りておこう。勢いよく傘をひろげると、ビニールが破れて、骨も折れているではないか。痛っ！折れた傘の骨で指が切れて血が滲んでいる。嗚呼。

夕焼けを見に行くだけの時刻表

木本 朱夏

あちこち旅をして回るために見る時刻表も楽しいが、乗り換えに五分しかないような場合、急かされているような気分にもなるものだ。対して、この時刻表はゆったりとした贅沢な気分を味わわせてくれる。夕焼けを見に行くのも一つの旅である。

とりあえず座るきれいな人の横

高瀬 霜石

この図々しさがうらやましい。私なんかまだまだ意識し過ぎて、きれいな人の横に座ることができないが、とりあえず座れるようになっていたいものだ。きれいな人の横に座ったということだけでも楽しい気分になれるのだから。

曲がつてる腰だが物が拾えない

杉本 義昭

一読して大笑いした。曲がつてる腰にわれを感じないのは、自己を凝視した上で生まれるユーモアのおかげだろう。

雲ひとつないので帽子脱いでます

伊達 郁夫

晴天の日差しを避けるために帽子をかぶるのが普通だが、作者は逆に、雲一つないからこそ帽子を脱ぐのだと喝破した。帽子を脱ぎたくなるようなさわやかな日本晴れだったのだ。

やまびこの自分の声に惚れ直す

寺川 弘一

「ヤッホー」と叫んだ声、自分でもなかなかいい声が出たと思う。そうして返ってきたやまびこが、また惚れ惚れとするいい声。このような、屈託のない自己愛に溢れた句もまた楽しいものだ。

トランプさんのようにでっかい熟柿

初代 正彦

でっかい熟柿をトランプ氏のようにだと見立てたところが秀逸。トランプ氏が顔を紅潮させて興奮して演説していた姿を思い出す。白人特有の、興奮して鼻が真っ赤になっていたところなどは、なるほど熟柿そのものだった。

一日一善妻から笑い取っている

大坪 一徳

妻を一日に一回笑わせるには、大変な努力とエネルギーが必要であり、何よりも妻に対する恋心を持ち続けていなければとうてい出来ないことである。大した「二日一善」である。

地下鉄の駅で拾ったいちようの葉

北野 哲男

誰かの肩にでもたまたま載ったいちよ

うの葉が、地下鉄の駅にまでたどり着いたのだろうか。あるいは、風に吹かれて飛んできたのだろうか。それはともかく、地下鉄の駅にまで晩秋の気配が漂っていることは確かである。

現実には甘くはないとカラス鳴く

倉益 一瑤

理屈など要らぬカラスにある矜持

工藤 千代子

昨秋は、私の住んでいる近辺でもカラスが多かったように思う。ヒッチコックの「鳥」を思わせるほどに、電線にカラスが並んでいた。彼らは、ポリ袋などあればめざとく見つけて、食べられるものがないか中身を点検する。大きな蓋付きのポリバケツでも、嘴で蓋を回してバケツの中のゴミをあさる。自然の餌が少ないという現実には負けることなく、生きるためなら何でもするという、その生命力のたくましさは、大したものだともいえる。

特別な用もないのに落葉踏む

古久保 和子

たとえば、茸を狩るために山に分け入って落ち葉を踏むというのではない。また、

落ち葉を踏もうと意識した上で落ち葉を踏んだのではない。街中の公園でも歩道でもよいが、つい落ち葉を踏んでしまった時の感触を味わえばよいのだと思う。特別な用もないのに、その感触に惹かれてしばらく踏み続けている落ち葉。

さびつかぬうちに拾って匙である

平尾 菜美

アスファルトの道の端にきらりと光る物が見えた。近寄って見ると銀色の匙。少し曇っているが、銀の匙に見えないこともない。さびついていたら単なるゴミ。さびつかぬうちに拾ったからまだ匙だといえる。もちろん、それを磨いて使う気はないのだが。

その他、チェックした句を挙げておく。

螺子一つ緩めて溜めるエネルギー

小谷 集一

美しい雲善人が群れている

山本 希久子

少し風邪引いて記念の旅終わる

松尾 美智代

敵はまだ井メシを食っている

吉村 久仁雄

水煙抄鑑賞

—1月号から

仁部 四郎

傷心の僕に便座の温かさ

細川 花門

着想に感心。便所はなかなか句語に使いにくいものといういわば固定観念をさ
らりといまして、あの空間の持つ安堵感
を表現してみた。

義理で出た葬式なのに涙拭く

松本 ゆかり

近所か勤め先か、はなしをしたことも
ろくになかった。それでも参会者などの
話を聞けば、自分のこれまでの人生に重
なる部分もあったりする。下句に納得。

経験だけで他人の批判する狭さ

坂上 のり子

いかに修羅場をくぐってきたかを自慢
して、えてして自分の思い込みを押しつ
けたがる人がある。学歴の有無はともか
く、広い視野でものごとを考えた。

旨い酒月火水木金

巖田 かず枝

上句が楽しい。人生奮闘の姿が中句下
句に在る。「吞ませてあげたい」の句だと
読めば、上句は更に嬉しくもなる。

新聞の広告で読む週刊誌

梅里 南天

「で読む」がポイントの表現。実際に買
うのであれば、二、三人で割勘というのが
生活の知恵。

故郷に先祖の墓と戸籍だけ

児玉 規雄

墓地は高速道に占領され、本籍地もマ
ンションの一室に移したという時代だが
温い心はつながっている。羨ましい句。

持ち時間少ななし本は選びたし

小畑 宣之

読みたい本というものは年齢とともに
傾向が固まってしまいがちだが、下句に
広い視野があつて共感を誘う句。

赤ちゃんも上下関係わかつてる

高岡 弥生

「上下関係」はいささかカタイと思つた
が、考えてみればナルホドで、大人たち
がスキを衝かれたような句。

もう白寿夜爪切つても怖くない

吉田 知之

「夜に爪を切ると……」に覚えのある人は
多い。上句と下句で、人生生き抜いてき
た自信を示したところ。

だんまりの委員も数の内と言う

源田 啓生

それでも○○委員会という制度は必要
なのです。採決で意思表示はできるので
す。作者もはっきりした意思を持つ人。
いくらでも儉約できる過疎である

森下 よりこ

開き直つたかの句。政治への批判なり
抵抗を込めての「儉約できる」か。元氣
十分な句と読みたい句。

昼と夜使い分けます顔と舌

相見 柳歩

「舌」は、発言だろうか、飲食だろう
か。どんな情景を想像したらいいのか謎
があつて面白い句。

マウンドに頭を垂れて去つた人

上村 夢香

実力発揮できずに持場を去つた人。自
分はどうであつたか。その人の心のうち
を思い、また自省する。慎みのある句。



誌上大会にチャレンジ!

先日、「認知症予防」の記事を読んでいたら、「チャレンジ精神を失うと認知症に繋がる」という項目がありました。心を閉じ込めるな好奇心を持ってということでしょう。

「川柳塔まつり誌上大会」の締め切りは二月二十日です。「どうせ没…」とパスするつもりの方皆さん、「認知症予防の良機会!」と積極的にチャレンジしてください。

ひらめきは手すりの切れたあたりから
舊が開くいのち万歳するように

一冊の旅へ作者にいさなわれ

いい旅だったとキーホルダーを買う

心まで貧しくならぬよう笑う

後ろから抱き締められた春だった

右は第一回の特選句です。優れた作品は課題吟や自由吟の区別なく一句独立して味わえるものです。いや、課題を外すことによって一層味わい深くなるように思えます。

最初の句は少し難しいことを言っているようですが「手すり」を「他に頼ること」の比喩と読めば理解できそうです。

晩学の森をわくわく歩いてる

優しさをやさしくされてから学ぶ

水彩のタッチで君という時間

海の絵の前で魚になつてゐる

日が昇るやつぱり有難うと言う

エンディングノートの中で飯を食う

赤松ますみ

寺川 弘一

居谷真理子

内藤 憲彦

出口セツ子

上嶋 幸雀

細田 裕花

下田 幸子

吉井菜々子

平尾 正人

岩佐タン吉

森中恵美子

上の左六句は第二回の特選句です。晩学の森で意欲を失くして俯いている人もいますが、好奇心を失わず「わくわく」と歩んでいる人もいます。また、思い遣りや優しさは自分が受けてはじめて身に沁みて分かるもの。時間の表現に「水彩のタッチ」は斬新ですが、これも課題吟であるからこそ生まれたものであり、課題を外してこそその味わいでしょう。

しあわせが来るまで冬を編んでいる

春はもうゼブラゾーンの辺りです

人魚にはなれそうもない風呂上がり

挙手の礼しながら落ちていく椿

花の闇一番好きな人と居る

おろしりんごは現世のようである

右は第三回の特選句です。最近女性の活躍が目立ちますが、男性が一人だけとは寂しい限り。頑張りましょう!

左は第四回の特選句ですが、見事に全員が女性で、八木千代さんと居谷真理子さんは二度目のゲット。弛まぬご努力とチャレンジ精神のたまものでしょう。

旅の雪わたしを包むのは私

包んだらこんな小さくなりました

生きてゆく重さばかりと象の鼻

幸せの財布は丁度よい重さ

ヌーボーとした日溜まりに半世紀

海鳴りが止まぬ少子化のあした

なお今回から各選者の特選は二句になりました。どのような作品が現れるのか今から楽しみです。発表は五月号ですが参加しなければワクワク感も味わえません。

八木 千代

中岡千代美

平井美智子

居谷真理子

松本 柊子

山岡富美子

安原 博

美馬りゅうこ

真島久美子

八木 千代

武藤 敏子

小川 柳女

『麻生路郎読本』余滴 (39)

「新川柳」の路郎 ⑤

葉 原 道 夫

「新川柳」五五号（明治45年7月）に、路郎は次の六句を発表している。

短夜のうた

水昌の如き心に夜が映り

うつとりと話にほれし夜もありき

* 眞珠色の月の光よ戀もなき

力なくころぶ蒲團の冷めたさよ
此儘にまどろみに入る疲れかな

荷十君に

淋しとや人の世はみな獨りぼち

* 前回の「余滴」で、当時の路郎が目指していた詩の境地が、「眞珠のやうな美しさと柔み」であると指摘したが、この句などは、それに当たるか。

「新川柳」五七号（大正元年9月）に、
「噫明治四十五年七月三十日」と題して、

明治天皇の死を悼む句が掲載されている。
江原三郎（八句）、安藤玄戒（二句）、麻生
二郎（五句）の内、路郎の句は全句挙げて
おく。

泣けよ泣け世の終りぞと沈む目に 三郎

雨の銀座黒き旗のみうなだれて

諒闇や花悉く黒く咲け

玄戒

憂愁の眼二重橋へ二重橋へ

二郎

黒き森人に恐怖の色見えぬ

帝劇はさびしげに淋しげに立つ

すゝり泣けばすゝり泣く聲砂いきれ

影の如く歩みぬ喪章淋しうて

「二郎」は誤植ではなくて、本名の「幸二郎」の「幸」を取ったものである。雅号の「路郎」でなく、「二郎」を用いたところに、明治天皇の死を悼む敬虔さがうかがえる。

「新川柳」六二号（大正2年2月）「各地通信」に、路郎の書簡が掲載されている。

（今、湯から出て二階の机の前に座った。

机の上には買った計りの日記や使ひ古した辞書や誰れや彼れから来た年頭狀が散らばつて居る。電燈が昨夜中央公論を讀むため低く降るしたま、になつて居るので吊り

上げた。新年の夜の情調がただやふ。

* 1 新川柳の表紙がだん／＼新しくなるのを嬉しく思った。* 2 「玻璃と涙」は可い。加山君は詩人だと思った。

一月十日 麻生路郎

* 1 「新川柳」六一号の表紙。目次に、「表紙挿畫 青牛…古城…撫山畫」とあり、表紙は最初に名前がある「青牛」の手になるものだと思われるが、「青牛」「古城」「撫山」については、いずれも未詳。



新川柳

第六十一號

* 2 「新川柳」六一号に、掲載されている加山登努久「玻璃と涙」は、次の八句である。

默すれば落つる涙よ涙は夢よ

玻璃戸の戀夜霧は涙誘ふもの
裏山へ通ふ泉をうらむ身よ
戀の窓微かに鳴つた玻璃のねたみ
一人居て君が眼想ふ蠟涙や
淋しげな椿見つ玻璃に頬の觸れて
屋根草に君想ふ湘南は暖かや
去る人とこぼれ玻璃戸の落椿
路郎は、この八句全体を読んで、「加
山君は詩人だと思つた」と評価したの
だろうが、特にどの句を評価したのだ
ろうか。筆者がチェックしたのは、「戀
の窓」「淋しげな」の二句である。

「新川柳」六三号（大正2年3月）に、
次の五句を発表している。

幾千の詩反古残して土に入り
死際の目に落日が見えるかい
息をする處を見れば生きて居り
本箱をあけて見てまた閉めて
朧夜のドン底を行く靴の音

「新川柳」六四号（大正2年4月）に、「三
階一號室より」と題して、次の一六句を發
表している。

煙草捨つ日蔭の花の淋し又影

その影を覗め居し若き人は歩き出しぬ
なやましう楊枝噛むなり旅に居て
寂しいからとて三階から人を見る
二人居て二人は言はず春日射す室
髪分けて雲脂搔いて又今日も暮る
物言はぬ顔に煙草のけむが舞ひ
靜也、三味彈で過ぐ旅の夜を待つ
鐵瓶提げた影が淋しうつる畫
聲音におびへる春の夜の寒し
一人と知りて淋し寂し今日も暮なん
雨、雨、雨、頭がうづく壁の灰色
あさの光に力なし茶をすゝる
われ一人めざむ心いたき旅と知る
墨汁の落ちて擴がりぬわれ二十六
顏藝に足藝につまらなさばからしさ
筆者がチェックしたのは、「鐵瓶提げた」
「あさの光に」「墨汁の」の三句。

「新川柳」六四号（大正2年4月）「各地
通信」に、路郎の書簡が掲載されている。

「先夜は失禮しました、皆様にも*貴兄
よりよろしく、何れ御伺ひいたします、喜
代志氏と五万石氏と美佐吉氏に逢ひたいと
思ひます、五万石氏は私の好きな人です、
喜代志氏は幾つ位の人だか想像もつきませ

ぬ、たゞ先年私が當地を御訪ねした時に逢
ふても見たかりしと御親切な御言葉を頂戴
した御禮に拙い面だが一度御目にかけた
と思つて居ます、美佐吉氏は横濱での最も
若い官能に生きて居る詩人だと思ふからで
す、この若いと云ふ意味は年の若いといふ
こととは關係が無いのです、詩以外の詩論
と云つては大層ですから感想のやうなもの
でも書いて見たいと思つて居ます

三月十七日 市内本町上州屋旅館

麻生路郎

* 明治44年8月17日に、路郎が川柳社
を訪れた時に会つた人物を筆者は岩崎
半魔だと考え（前年6月号「余滴」、
この「貴兄」も半魔だと思った。とこ
ろが、「新川柳」五〇号（明治45年2
月）の「川柳社同人年表」によると、
明治44年1月に「半魔退社」とあるの
で、路郎が会つた川柳社同人が半魔で
ないことが明らかになった。となると、
「貴兄」は横浜在住の「川柳社同人」
の、安藤幻怪坊・安斎一安あたりだと
考えられるが未詳。

塩川喜代志は、「新川柳」の編集兼
発行人。路郎が川柳社を訪れた時に、

「短詩社の麻生氏來社せられし由一寸逢つても見たかりし」と書いて、路郎が囁みついた相手である（前年6月号「余滴」）。柴田五万石は、路郎が川柳社を訪れた時に会っている。大谷芙佐吉の作品「若草」（「新川柳」六一号）を挙げておく。

新しき心蓄の梅に似し

鼓とはさて氣紛れな春の神

盛装の家族と酌んで春ながう

初日さす其時街は静かなり

新春の句の物足らず今朝の春

諒闇の春の句聞かう一茶居ば

福壽草黄金色とは誰が愛でし

春の神の残んの紅や梅に散る

明け残る月鈍し我にのぞむ春

新春の大氣に觸れて血の赤かう

「新川柳」六六号（大正2年6月）「各地通信」に路郎の書簡が掲載されている。

（五日の*モンゴリヤで義嫂は出帆しました、私は見送つてから直ぐ其足で久し振りの東京へ歸りました、

何んでも新しく生々として居てうれしく感じます、滞濱中はひとかたならず御交誼を

給はり何んとも御禮の申上げやうもありません、諸兄によろしく。

四月十日

麻生路郎

* モンゴリア号は、アメリカやヨーロッパに航行した蒸氣船である。義嫂が向かったのは、アメリカやヨーロッパではなく上海だと想像する。孫安石の「日本人が見た上海イメージ」という論文によると、上海の日本人コミュニティは一般に日清戦争（明治27〜28）以降に形成され始め、日露戦争（明治37〜38）の後本格化し、第一次世界大戦（大正3〜7）を境に大きく発展することになったそうだ。路郎の兄が一旗あげるために上海に行っていたのを、義嫂が追いかけたのだと想像するのである。上海へ渡航するには神戸港からの出発が普通だったようだが、「おおた葉一郎のしょーと・しょーと・えっせい・赤い靴を追いかけて」に、（明治40年に）アメリカで母子家庭に育った後年の世界的造形芸術家イサム・ノグチ少年がサンフランシスコから日本に向かった時、乗船した約2000人乗りのモンゴリア号は横浜経由で最終

目的地は上海であった。神戸港ではなく横浜港から上海方面に出国することもある。（とある。）

大正2年1月15日「番傘」が創刊したが、路郎は東京にいた。「番傘」（昭和34年8月）の「水府自伝19」によると、「番傘」の創刊後、路郎が（1月の末ごろに）帰阪、私と共に当百の留守宅を襲い奥さんから御馳走を受け、遠慮なしに牛飲馬食をほし（いまに）した」とある。「新川柳」の「各地通信」に、「私は見送つてから直ぐ其足で久し振りの東京へ歸りました（傍点筆者）」とあるので、一月の末頃にはまだ、東京の住まいを完全に引き払つたわけではないことがうかがえる。

路郎が帰阪したのは、海外流出の許可願いと、病気の姉の看護のためであった。海外に行きたいという思いは、多分に兄の影響があつたのではないか。「番傘」4号（11月27日）「大阪より」に、（元氣な路郎君が病（筆者註「肺炎か」）に罹つて、西區京町堀堀上通三丁目一三へ宿替しました）とあり、海外渡航の夢ははかなく消えてしまった。

オリジナリティーのある句

岡山県 池田 たか子

退職後、知人から「趣味に川柳を始めませんか」と誘われ、四名で赤澤逸翁先生に数か月お世話になり、その後、矢掛川柳会へ入会しました。「川柳に先生はいません、自分の気持を素直に表現する文芸です。上手な句も下手な句もありません」との言葉に安堵したのを憶えています。

家庭的で温かい雰囲気の場合、柳詠の作成、発送等を通じて豊かな知識と、貴重なアドバイスを糧に、自然や社会を広い視野と心の目で客観視する大切さを、川柳から学びました。

また尊敬する諸先輩、柳友との川柳談義、人生経験、暮らしの知恵など語り合い、病気や家庭の事情でたびたびの頓挫にも、励ましと協力に支えられ何とか続けています。

オリジナリティーのある句を心掛け、川柳がプチ自分史になればと思っています。

今後ともどうぞよろしく願います。皆様に感謝いたします。

ものを見る目

箕面市 大浦 初音

知人にすすめられ何も分からぬまま、川柳の道に入り五年余りになります。

俳句より季語のない分取っ付きやすいかな、また、ボケ防止に良いかなと、安易な気持でふみ込んだ川柳でした。

でも、人間を詠む奥深さなど、やればやる程難しく驚いています。ただものを見る目というものが少し変わったように思います。花を見、月を見ても心にひびくようになりました。

「川柳あまがさき」は、和気あいあいの楽しい雰囲気、長浜美龍会長には当初からいろいろ声をかけていただき、またまわりの皆様に助けられ、今日まで続けられたように思います。

このたび同人のお話をいただき、まだまだ未熟者で分不相応だと思っておりますが、これからは一層精進せねばと心新たにしております。今後ともよろしく願ひ申し上げます。

川柳は奥が深い

松山市 栗田 忠士

平成十一年「川柳にきたづ」という小さな柳社（川柳まつやま）に加盟）に入会。これが川柳との出会いでした。その後各種川柳大会に参加するようになり、初めて入賞した句が「男だな黙ってめがね拭いている」でした。男の哀歎を詠んだ句として私の好きな句の一つです。

四年前、平成柳多留に投句。「すごいなあ龍を初めて描いた人」（課題は「龍」）が奇しくも奥田みつ子氏の選に入りNHK会長賞を受けました。晴天の霹靂でした。

平成二十六年柳友に勧められて川柳塔に入会。誌友になってから八か月で応募した五句が川柳塔賞（準優秀作第二席）に選ばれました。これも驚きでした。

その時の五句中の一句

ひらめかぬ時は歩幅を変えてみる

気軽に飛び込んだ川柳でしたが、始めてみるとどうしてもしてその奥の深さは計り知れません。川柳は人間の哀歎を詠む、人間諷詠の文芸と言われますが、これが奥深いのです。同人に加えていただいたのを機にますます句作に励みたいと思います。よろしくお願いします。

寝転べば畳一帖ふさぐのみ
私の大好きな句です。

路 郎

川柳の楽しさと奥深さ

防府市 坂本 加代

平成二十三年三月一日、東北大地震。人家を呑み込む大津波。その大自然の驚異にショック。同じ頃我が家にも辛い出来事があった。四月八日、私は初めて近くの観音祭りに出掛けた。その時の思いを川柳にしてA新聞に投稿したら掲載された。これが私の川柳第一号となった。

そして秋、A新聞主催の読者と選者との交流という企画があった。川柳、俳句、短歌の各選者のお話と質疑応答という内容。川柳の選者は田辺忠雄先生で、初めてお会いできた。これがキッカケとなり翌年一月から発足した湯田川柳会に入れていただいた。メンバーは一〇人で先生はみんなの意見を聞きながら互選方式で会はスタートした。皆初心者なので教科書として新家完司著『川柳の理論と実践』を使つての勉強会である。私は尊敬する田辺先生、新家先生に出会つて川柳の楽しさと奥深さを知った。

あれから五年経ち、このたび川柳塔同人の仲間に入れていただき、川柳塔まつりにも初めて参加した。全国の皆様と一堂に会し感激と充実感でいっぱいになった。これから楽しみながら川柳の道を精進してゆこうと思う。

私の好きな一句

あきらめたとき美しくなるこの世
新家 完司

川柳はライフワーク

熊本市 杉野 羅天

多くの方のご指導ご協力により歴史ある川柳塔の同人に今回お仲間入りさせて頂きました羅天です。宜しくお願ひ致します。2年前の「川柳塔まつり」が私の最初の句会、大会出席でした。それまで10年間はほぼ独学の状態でした。最初のきっかけは高野宵草さんから豆本を頂いたり、熊本川柳会誌川柳塔誌を毎月見せて頂いていたことです。

ある時麻生路郎の一句に打たれました。たった十七文字の一行詩で人の職業の神髄まで見抜いてしまうその力に感動しました。当時私は50代後半でしたので、やる以上はライフワークにしたいと思い、自身に3年間の基礎基本を課すことで入門しました。私生活では趣味の多い私ですので「川柳宣言」をした時は家族も職場の者もまたかという様な笑いだったと思います。基本が終盤になると熊本川柳会も終会を迎え、宵草さんから変わりにたくさんの本や資料を頂きました。

川柳塔より「麻生路郎読本」を購入し、それ以降は路郎「十五戒」のみの私でございます。まつり出席後、川柳の輪が広がりました。私にとって川柳は自己を陶冶する為の川柳ですので苦痛苦難ばかりでしたが、楽しさも少し加わりました。

現在「わかば川柳会」(吉野ヶ里)「川柳葦群」(柳川)会員
イイをしてご覧と歯医者真面目也 羅天

田中道博くんのこと

岡山市 丹下 凱夫

頑固で一途な男である。愚直で気位の高い男である。温い男である。熱い男である。寡黙でシャイでおしゃれな男である。とにかく個性が強い。灰汁が強い。それでいて常識人である。本人はへそまがりだと言っている。多分そうであろうと私も思う。私に川柳のきっかけを作ってくれた男、田中道博くんである。いつも誇りに思っている。

背なを押す風をうるさいと叱った 田中 道博
ついて来い月に日の丸建てに行く

私の大好きな句である

田中 道博

好きだなあ銭の音また聞いている
生き恥をさらし堂々生きている
一番に逃げる大きな顔をして
夜を走る貨車に満天の星がある
活断層の上に原発つくる阿呆
地震の亀裂に咲いたペンペン草
夜汽車の遠い汽笛がとどく夏
駅弁とワンカップ豊かな旅になる
腐れ縁そんな温さで生きている
老いた貨車よお前もへそまがり
コトコトとただコトコトと貨車一途

矢掛川柳会平成二十八年度に発表された作品の中から抜粋した道博くんの十一句である。川柳塔の皆さまに読んでいただきたくお節介な一文を書かせて頂きました。

日本語の美しさを表現

羽曳野市 中 川 ひろ介

切っ掛けは、陵南の森ふれ合いフェスタの投稿、すぐに電話をいただき入会を決めました。はびきの市民川柳入会一年半後、鈴木いさお、徳山みつこさんより同人のお誘いがありました。

没句でも捨てがたい味と励まされ、自身、絵画を趣味としている関係で、切り取った景色気付を伝えたい。ええ格好自意識過剰笑い草。子供の様に正直に。を心掛けて励んでいます。

川柳を作ることを通じて憎悪より愛を、恐りの言葉より思いやりを、そういう乱暴な言葉と決別し、かつ日本語の美しさやさしさを表現して行きたいと思います。

十月から川柳塔誌の発送係を命じられ仲良くやっています。紙芝居をつくり介護施設を回りボランティアで送迎サービスやっている毎日です。どうぞこれからもよろしくご指導、ご鞭撻をお願いします。

背比べどんぐり達のベレー帽

ひろ介

この土地に花や実の成る種を蒔く

ひろ介

川柳の魅力

岡山市 永 見 心 咲

川柳に踏み入ったのは退職後です。今思えば早期に始めればよかったかと微かな後悔があります。

民間企業に在職中は社内新聞の発行。行政サイドに移ってからは産・官・学・民によるゴミ減量化の広報誌を作成しておりました。その当時川柳をしていれば、四コマ漫画的に川柳を連載し、より多くの関心を興起できたのではないかとも思うのです。当時お世話になった山口大学漫画同好会の作品に、風刺のきいた川柳を並べることも出来たのに……。

ともあれ、今は川柳の魅力にどっぷり浸かっております。何事も形から入ることで理想を現実とする背伸びのメリツトを目指す私ですが、川柳もおなじです。句詠力も願みず、とにかく沢山の大会に参加したいと実践中です。

諸先輩方の佳句やお人柄に触れ楽しい時を過ごしております。川柳塔同人というポジションは面映ゆい感じですが、推薦していただきましたご厚意に感謝申し上げます。

何処かの会場でお会い出来ましたら「みさきさん」とお声掛け頂ければ誠に幸甚に存じます。

川柳の全国マップ塔で塗る

更なる誌友、同人の拡大を祈念いたします。

小さな「ケジメ」

三田市 野口 晶子

私の里家は短命の家系だ。父も伯父も従兄弟も六十歳を期に、亡くなっている。確率は半分。未だ病弱ながら、薬で命を繋いでいる人がいるからだ。今日も生きている事の不思議さ。そして感謝を合わせ持ち、必死に生き、もがきながら動き始めた。私は六十歳で川柳を始めた。

誰かに残したくて、句を作っている訳ではないのに、入選をする喜び。全没をする「皆が通った道だよ。そして上手になる。」と先生に励まされながら。

デジタルは、あまりに正確すぎて、取り付く島もない。アナログは優しい曖昧さがある。幸せな事に、昭和人間である私は、アナログ人間だ。だから、まだ明日の朝も目ざめられると、余裕を持てるのだろう。的はずれな夢も追いかけられる。「どうせ、私なんか」と言えるのは、そんな事ないよと言ってくれる人と、時間があると思っているからなのだろう。

今、同じDNAを持つ父を越えた自分を誉めている。人生に、小さな「ケジメ」を付け続ける。自分と違うものを持っている人に出会い、不安になりながら、私は今日も川柳を一句作っている。

川柳の効用

大阪市 平賀 国和

私と川柳との出会いは、単身赴任している時に読んだ「続おじさんは文学通川柳編・時実新子」を通じてでした。宮仕への窮屈さを慰められ、人生や社会などについて教えられる思いがしたものでした。

平成二十五年に退職した後、趣味の囲碁に加えて川柳を学んでみようと、朝日カルチャーセンターの「楽しめる川柳」教室に入學しました。そして講師の先生方に厳しくも温かく教えて頂き、仲間と共に川柳を楽しんでいます。

その後先輩の勧めもあって川柳塔の誌友となり、二年ほど前からは南大阪川柳会で勉強させて貰っています。

朝日新聞のなにわ柳壇にも投句を試みるようになりました。たまに入選すると妻も喜んでくれますし、川柳は家庭に会話と笑いをもたらす効用もあると思うこの頃です。

川柳を学び始めてから四年目です。まだ力量不足だと思っていますが、このたび同人に加えて頂くことになりました。これを契機に一層川柳に励みいろんなことを学んでいきたいと思っています。西出楓葉先生、前たもつ先生、同人に推薦して頂きありがとうございます。皆様どうぞよろしく願ひ申し上げます。私の好きな一句

初光ここに人間陶冶の詩

薫風

二〇〇一年 川柳の旅

岡山県 紫

しめの

昔々、「二〇〇一年宇宙の旅」という映画があったが、私が川柳を始めたのが、その二〇〇一年。それから、今に至るまで川柳の旅が続いている。出世するでもなく、休眠するでもなく、ふらりふらりと旅が続いている。

時々は誉められて浮かれてみたり、時には水面下で沈黙してみたり、ゴールのない旅が続いている。いや、ゴールがないからこそ、こうして川柳が続けられるのだと思う。段級審査や昇級試験があるなら、天邪鬼のわたしは、すぐに川柳をやめていたに違いない。決まり手や技がある訳ではない、只々その人のセンスを問われるからこそ、こんなわたしでも続けていられるのだ。

「五七五？川柳？わたしにも出来るかも」と思わせてくれた大先輩に感謝。わたしの川柳の旅は、まだまだ続きそうです。

「ぼやき川柳」を聴いてから

三田市 村田 博

「半月板損傷」小さい時より野球、柔道、卓球、ヨット、ゴルフとスポーツ大好き人間にとってMRIの検査結果は残酷な宣告でした。手術、松葉杖、リハビリ、もうスポーツは出来ない、これから何を趣味にして過ごすか模索していた時、耳に入ってきたのがNHKラジオの「ぼやき川柳」でした。これなら出来るかなと思ひ、当時住んでいた寝屋川市の「川柳ねやがわ」高田博泉会長に電話をして見学させて頂きました。平成二十五年五月の事です。二ヶ月後の七月の句会で私の句が賞（月間賞）に選ばれました、これで止める口実がなくなり、以後どつぷり川柳に漬かっています。

自家菜園体に元氣植えてます

博

昨年三田市に転居し、現在「川柳さんだ」に所属しています。川柳さんだは結成十五年と新しいのですが、八ツの句会を擁し非常に元氣のある句会で、大いに刺激を受けています。

他に城北、南大阪の句会にも参加しています、どの句会も後の反省会は皆勤を続け諸先輩より暖かい、きついアドバイスを受け大いに勉強になっています。

堀正和会長、北野哲男前会長より同人にとのお話、まだまだ未熟ですが元氣な句、楽しい句作りに励みます。

川柳を始めたきっかけ

沖縄県 森 山 文 切

沖縄の森山文切と申します。この度は同人に加えていただきありがとうございます。ご挨拶の機会をいただきましたので、川柳を始めたきっかけについて述べます。

私は鳥取生まれで、父は四十年來の川柳塔社同人である森山盛桜です。ずっと川柳をやれと誘われていましたが、数年前まで川柳はしていませんでした。小さい頃から父は休みの日も川柳ばかりで、あまり遊んでもらっていないということが根底にはあったかもしれません。

祖父は二十年ほど前に亡くなりましたが、父は今その年齢に近くなりました。数年前帰省した際、父がふと「もうすぐ爺さんが死んだ年齢になる」と言いました。私はその時初めて、父の死をリアルに感じ「今父が死んだら私が一番後悔することは何か？」を真剣に考えました。答えは、川柳をしないことでした。父は人生の大部分を川柳に捧げています。その父の川柳を私自身の言葉で人様に説明できないことは、大きな後悔になると思いました。

次の日から、ネットや誌上大会に片っ端から投句を始めました。父に言わせれば「親の敵のように」川柳をしています。いつか父の川柳を私の言葉で説明できるようになる日まで、この姿勢は変わりそうありません。

川柳に魅せられて

香芝市 山下 純子

三年前の年の瀬、デパートに婦人服のバーゲン探しに出かけた。店の先客だった上品なご婦人と少し言葉を交わした。私が時々、新聞にエッセーを投稿している事を知っている馴染みの店員さんが、そのご婦人を「この方は俳句の先生」と紹介してくれた。「俳句ではなく川柳です」とおっしゃられたのが西出楓楽先生との出会いだった。「川柳って楽しそう」「一緒にしませんか。ご住所を」「はい」。

その十数分が私と川柳との出会いでした。

五七五の知識しかないまま、年明けて楓楽先生講師のカルチャーに入学。先生のお人柄とクラス仲間を支えられ、すっかり川柳の世界に魅せられてしまった。

この度、未熟な私を同人に推薦して下さった先生、諸先輩の方々に感謝しつつ、今後の人生を川柳を学びながら、実りあるものにしていきたいと思っています。

バーゲンを回れば終わる妻の乱

楓 楽

句集『天秤座』の中に、その日の私のような句を見つけ、思わず笑ってしまった。

よろしくお願いたします。

こんにちは 新同人です

再びの川柳に燃えて

笠岡市 藤 井 智 史

高校三年生の時、地元の税に関する川柳に応募したのが川柳を始めたきっかけです。

二十代の前半は、オール川柳（雅号・柁木郷志）や地元の新聞の川柳に投句、NHK学園川柳入門で学んでいましたが、仕事が忙しくなった為、作句を休んでいました。

二〇一〇年に、久しぶりにフラッと地元の新聞に応募佳作に選ばれたことで、火が付きました。

地元の井笠川柳会、岡山県久米郡久米南町の弓削川柳社に入会し、井笠川柳会の高木勇三先生から、分かりやすく、楽しいご指導を受け、多くの先生方、柳友から様々なことを学び、県内外の大会へ参加してきました。

井笠川柳会の大会へいつも参加して下さり、かさおか川柳公園の入りに句碑を建立されている、私の憧れの存在の一人である小島蘭幸先生からのお誘いがあり、川柳塔社の誌友となり、また川柳マガジンのブログで世界中を明るくして下さっている、カラオケ大好きなもう一人の憧れの存在である新家完司先生、二人の先生のご推薦を受け、この度、同人となりました。

決まった句風にとらわれることなく、さまざまな表現に挑みたいと思います。皆様、宜しくお願い致します。

朝日なにな柳壇 今年の十秀

— 28年12月17日 朝日新聞発表 — (太字は本社同人)

川柳塔社相談役 西出 楓楽選

最優秀句

長寿国古稀喜寿傘寿まだ半端

江森ミチ子

秀句

大きめのポケットに夢詰めかえる

井本 健治

今もなお水府路郎の素晴らしさ

穂口 正子

冬の風また風呂屋さん消えている 岩佐ダン吉

荒れないよしっかり食べた朝ご飯

平尾 定昭

羊水のごとし湯船で生き還る

森田 旅人

名軍師抜きで名将語れない

越智 宰

真つ直ぐに違いは無いが頑固者

坂 裕之

はよ食べやはよ風呂はよ寝ママの機嫌

澤井 敏治

二杯目に少し熱めのお茶が出る

鈴木 栄子

番傘川柳本社主幹 田中 新一選

最優秀句

かつらとは知らず女神の髪掴む

浅野 一

秀句

ささやかな幸せ耳が遠くなり

黒澤 政雄

最高の笑みで縁取るありがたう

松熊 克衛

思いきり笑い命に水をやる

西村 武

野火走るあまたの悔いを消すように

細見喜四郎

好きなようにさせてにっこり妻の勝ち

坂 裕之

あす生きる元氣探しにおしやれする

澤井 敏治

全身に昭和とどめて今生きる

尾垣賀津子

幸せの条件わすれあぐらかく

中井 桂子

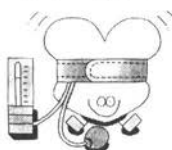
二人とも歩けるうちにフルムーン

平賀 国和



(投句221名)

今年一番という寒気のため、二三センチ降った雪に都会は弱さを露呈し、豪雪地帯では屋根の雪下ろし中の事故が後を絶たません。



テレビに映し出される映像に、自然の前の人間の非力を思い知らされるのですが、そんな時でも、いや、そんな時だからこそよけいに皆様から寄せられたナビの作品からあったかさを頂きました。では、一緒に。

荳岡市 藤井 智史
チョコ一個貰って空を飛んでいる

(評) 義理チョコにボランティアチョコ、他人からどう言われようが、その嬉しさを説明する術はございません。

箕面市 出口 セツ子
ワクワクを溜めてあしたのエネルギー
(評) ワクワクを溜めるなんて、いいな

あ。こちらまで前向きになれるエネルギーを頂きました。

和歌山市 上田 紀子
善人になろうなろうと奮闘中

(評) 善人になろうとした段階で、この方はすでに善人に違いないでしょう。善人だと思ひ込んでいる悪人沢山います。

豊中市 水野 黒兎
冷蔵庫魍魎魍魎が奥に住む

(評) ほんとホント、冷蔵庫の奥の方から得体の知れぬおそろしい物が時折出て来るのです。

佐賀県 真島久美子
柔らかな春です恋をしています

(評) すべてのものが柔らかく感じられるのは春のせいばかりではなく、恋をしているからかも知れませんね。

枚方市 海老池 洋
AIに脅かされる名人位

(評) 名人位だけではなく、人工頭脳というものに人間が追い詰められる日も近いのではないかと思っています。

弘前市 高森 一香
何もかもさらけ出したら踊れそう

(評) なにもかもさらけ出すには勇気がいるけれど、その後は踊ったり跳ねたり、何だかって出来てしまいそう。

明石市 梶谷 和夫
失敗はしないと医者に囁かれ
(評) ドラマに出てくるセリフをそのまま

ま言うお医者さまが居たら、それはそれで結構コワイですよ。

香芝市 大内 朝子
女つて独占欲のかたまりよ

(評) 女の業とか言われていたことも、最近のニュースなどでは男の側も負けてはいないと脅かされます。

西宮市 亀岡 哲子
天国とスマホで話ししようか

(評) 指先ひとつで世界と繋がるスマホなら、そのうち天国へ行つた人と本当に話せるようになったら...

三田市 上垣キヨミ
万歩計万へ届いたことが無い

紀の川市 辻内 次根
政治ショー二人羽織の仲違い
沖繩県 高良 秀光

鳥取県 斉尾くにこ
酒やめて酒のリスクを思い知る

池田市 太田 省三
再生をします破れたハートでも

河内長野市 大島ともこ
ストレスも給料なのさ管理職

男鹿市 伊藤のぶよし
ご希望ならお測りします幸せ度

大阪市 若本 安代
沸点は百度泣いても笑つても
三田市 堀 正和
名女優太る痩せるは御手の物
また一つ葉が増える検診日

榎原市 居谷真理子

健康な心まっすぐ君を恋う

大阪市 石橋 直子

よく笑い手足動かし齡忘れ

塩竈市 木田比呂朗

二合なら大丈夫だと言うカルテ

寝屋川市 森 茜

ひらめいてきそうばかばかしてきたぞ

横浜市 川島 良子

話し相手に引っ張りだこの介護ロボ

大阪市 柴本ばつは

後戻りできないところへ来てしまった

長野県 丸山 健三

ほんとうは医者も本音が言えませんか

米子市 八木 千代

前頭葉にパンチを試みています

貝塚市 石田ひろ子

デイズニールランド命洗濯しています

和泉市 横山 捷也

家族には知られたくないヘソ踊り

大阪市 坂 裕之

さあ遣るぞ今日も楽しく走り抜く

奈良市 山本 昌代

尽きるまでジャズに聴き入る秋の月

唐津市 仁部 四郎

棒祿は科学の子だぜ未来の子

西宮市 西口いわゑ

そんなにも頑張ることはないのです

八王子市 川名 洋子

ヘソクリが妻の所有になつていた

上尾市 中村 伸子

ご用心限界越えるやも知れぬ

可児市 板山まみ子

お互いの病氣自慢でお茶を飲み

大阪市 藤田 武人

受験票晴れやかに今サクラサク

神戸市 松井 文香

老いらくの恋かくしてもかくしても

米子市 生田 和之

百万の退陣デモも何のその

大阪市 栃尾 奏子

一つずつ等しく抱いている命

青森県 松山 芳生

遠い日の傷に忘れてきた鱗

奈良市 大久保眞澄

偏差値を機械ではかるおつもりか

弘前市 浅田 隆樹

厳寒の水は指先から動悸

神戸市 富永 恭子

どうであれ氣になるのです未来像

三田市 北野 哲男

宇宙船燃料補給する我が家

東京都 川本真理子

近頃は病氣を遊ぶようになる

尾道市 大本 和子

爆走のハートへ灯る赤ランプ

奈良県 長谷川崇明

落ち着いて深呼吸して計ります

大洲市 花岡 順子

ちょこまかと動き惑わす猫じやらし

和歌山市 磯部 義雄

鉢巻きを締めて上がらぬ棒グラフ

吹田市 山本希久子

長寿国老人の乱起こりそう

奈良市 森中 博一

ミステリー君の心は計れない

三田市 野口 晶子

さそつてもいらないのに来た元彼女

富田林市 古田 千華

以上と未満心得て呑むにこり酒

八尾市 前田 紀雄

貧血か金欠病か判らない

神戸市 山口 光久

思考力低下の理由何だろう

尼崎市 清水久美子

自意識が過剰でいつもバンクする

和歌山市 武本 碧

消し炭のように火が付く熱い人

枚方市 丹後屋 肇

絞ったら汗が出てくる苦なのに

和歌山市 古久保和子

妄想が膨む誰も止められぬ

4月号発表

(2月15日締切)



(平本 勝彦 画)

柳箋に2句

本社 一月句会

◇一月六日(金)午後一時
アウイーナ大 阪

席題「踏む」 長浜 美籠 選

求愛の鶴が雪踏むここ釧路

新しい靴玉砂利を踏んで来る

ブレーキを踏まない妻で火の車

踏ん張ったお陰ちよこつと花咲かす

ドジを踏む名前書かずの年賀状

再婚へ二の足を踏む老介護

ライバルに踏みにじられた言葉尻

薄水を踏んで娘の朝帰り

ブレーキを踏んだつもりはもうあかん

お年玉孫の値踏みに狼狽える

踏襲は親子四人の晴れ舞台

故里の地を踏めぬまま北の島

踏み込んだ意見が明日を切り開く

無駄足を踏んでばかりの半生記

気にくわぬ人だヒールで踏んでやる

大ふぐり踏まないように春の土手

踏ん切りが悪いのは円満の秘訣

麦踏みという遠い日の風物詩

地団駄を踏んだ昨日に臍を嘔む

私を踏み台にして子は果立ち

踏み出せば新たな風にきつと会う

踏み込んでいけば風の渦になる

踏み絵かも知れぬ台榭打たされる
保険屋と妻が私を値踏みする
臆病の足踏みばかり向い風
あの人踏み台ならば喜んで
青空を味方に今日もベダル踏む
踏まぬよう妻の地雷を縫って生き
なんばでも僕でよければ踏んでくれ
懲りもせず同じテツ踏む二日酔
横綱を夢みて今日も四股を踏む
虎の尾を踏んで左遷の地に朽ちる
踏み込んで未来地図描く子の進路
さてどうしよう五百円踏んでいる

西出 楓架

山崎 武彦

山野 寿之

川端 一步

今井万紗子

島田 誠一

江島谷勝弘

森松まつお

久保田千代

萩原 狸月

村田 博

中岡千代美

今井万紗子

小島 蘭幸

升成 好

榎本 舞夢

田中 章子

市坪 武臣

木本 朱夏

大内 朝子

大内 朝子

住

踏ん切りがいつたきっぱり好きと言う

徳依わたしのためにあるようだ

踏み越える筈だと神が出す試練

玉砂利を踏んで平和願ってる

ベダル踏む日頃の憂さが飛んでいく

人 何事も場数を踏んで味が増す

地 反抗期靴のかかとを踏みつぶす

天 殻脱いで踏み出す勇氣から希望

軸 ああ高期地団駄踏んだ日も昔

ああ高期地団駄踏んだ日も昔

ああ高期地団駄踏んだ日も昔

ああ高期地団駄踏んだ日も昔

兼題 「父」 山野 寿之選

子沢山昭和の父のデカイ傘
口答えタブーであつた父の前
直角の囲いひらかぬ父でした
迷い子はパパを呼ばずにママ連呼
今際の父たつたひと言ありがとう
父が逝き自由きままに過ぐす母
生きさまで男の姿みせた父
まあいいか父が残した処世術
北風を真つ正面で受ける父
汗流し寡黙な父の坎ナくず
卓袱台の芯を支えた遠い父
改札で父が待つる里帰り
玄関に小さくなつた父の靴
奔放な母のタクトに踊る父
母の口通して父の愚痴を聞く
年金の夜だけ父の位置がある
父の日の佛前好きなカップ酒
正月も休めぬ父の重い靴
痛なんて酒で治すと父らしく
父無口心の傷へしめた捻子
通夜の席父のB面聞かされる
気難しさ孫の前では見えぬ父
荒れた手と誇りにおもう父の肩
母だけが知る不器用な父の愛
敵しかつた亡父の叱咤が道標

上垣キヨミ
上山 堅坊
安土 理恵
村田 博
佐々木満作
金川 宣子
久保田千代
川端 一步
藤井 宏造
七反田順子
内田志津子
石田ひろ子
澤井 敏治
出口セツ子
小野 雅美
伊達 郁夫
清水 英旺
若松 雅枝
松岡 篤
関 よしみ
北野 哲男
原田すみ子
遠山 唯教
栃尾 奏子
市坪 武臣

気が付けば父の轍の後を行く
野放図な父でもやはり父は父
腰払い父に食らつた反抗期
年重ね亡父そっくりになる鏡
カラオケも酒もおやじを越せぬまま
今更に父に怒鳴つて欲しかった
ゴッドファーザーあの一瞬のうたかた記
玄関に入れば鬼がパパの顔
アメリカが見えた親父の肩ぐるま
腕相撲父越えた日の寂しさよ
農の血で土と話をした父
運動会必死に叫ぶ声は父
泥を這い棚田と生きた父だつた
佳

松尾美智代
村上 直樹
村田 博
大内 朝子
吉岡 修
前 たもつ
長川 哲夫
鈴木 栄子
荒川 純甲
西出 楓葉
北野 哲男
丹後屋 肇
渡辺 富子
米澤 徹子
あまのとな
柴本ばつは
海老池 洋
新家 完司
山本 進
伊達 郁夫
木本 朱夏

初句会ニコちゃんマーク揃い踏み
マークした星は絶対逃がさない
山勘でマークシートを塗りつぶす
手作りの賀状わたしのマキキング
ロゴマーク付けて私の風揚げる
死神にマークされないうつ生きる
世界中マークしているトランプ氏
カレンダーマークは妻のものばかり
マークした彼女残念亭主持ち
お出かけのリズム狂わす傘マーク
なにもかも小池マークにする都知事
ここまでとポトルにマーク付けられる
マークせずマークもされず生きて
親友もマークしている好きなひと
ロゴマーク一字違えた模造品
デイサービスへ初心者マーク付けて行く
マークした男はいつも去って行く
愛も恋もマークがずれたスケジュール
マーク追う監視カメラが減らせない
トランプの第一声が気に掛かる
鉛筆は三菱 僕の友である
神ってるマークシートで合格に
意味深な語尾ねマーク引いておく
筋のいい球児をプロの目がマーク
大手術耐えてにつこりVサイン

兼題 「マーク」 大内 朝子選
上垣キヨミ
喜田 准一
清水 英旺
山岡富美子
関 よしみ
田中 章子
内藤 憲彦
原田すみ子
松岡 篤
能勢 良子
上山 堅坊
中村 恵
江島谷勝弘
山田 葉子
村上 玄也
鈴木いさお
細川 花門
鴨谷瑞美子
緒方美津子
前田 紀雄
川端 一步
金川 宣子
栃尾 奏子
升成 好
初代 正彦

キスマーク釈明すれば火に油

松岡 篤

ウールマークへためらいつつも洗濯機

中岡千代美

美人には知らず知らずに目でマーク

宇都満知子

もみじマーク付けたくはない自尊心

村上 玄也

黄門は葵の紋でけりをつけ

長高 俊雄

マークした筈の階段けつまずく

市坪 武臣

マークした選手応援する箱根

久保田千代

税務署にマークされない青テント

山口 光久

貧乏神がわたしをマークしてゐる

西出 楓楽

周りからマークをされてつく力

鈴木 栄子

頂点に立てばマークがきつくなり

佐々木満作

ノーマークの男でずっと平止まり

石田 隆彦

佳

ツベルクリンの腕のマークでわかる齡

木藤こみつ

ノーマークの人にも神は味方する

川端 一步

ウールマークの君に抱かれて冬を越す

藤井 宏造

心ぶらでマークした人今の夫

安田 忠子

マークシート作文力も試したい

中川ひろ介

人

初めての胎動記す母子手帳

古今堂蕉子

地

夕焼けがきれい明日は晴れマーク

松尾美智代

天

花マルを付けた男と生き延びる

渡辺 富子

軸

にこにこのマークでこの世渡り切る

兼題 「触れる」 山岡富美子 選

パソコンのタッチパネルで事始め

新家 完司

折りに触れ思い浮かべるのが供養

鈴木 栄子

ふと触れた傷がだんだん深くなる

金川 宣子

弥陀の手も温かかった昼下がり

三宅 保州

やわらかい手だったフォークダンスの手

あまのこーな

にこやかな話術忘れぬ医師の脈

山野 寿之

魂の芯まで触れる寒の月

海老池 洋

若者のパワーを貰うハイタッチ

新家 完司

突然だが妻にハグした意味はない

吉岡 修

手と手が触れただけでは好きになれません

片山かずお

誕生日ふと生命線に触れてみる

矢倉 五月

優しげな顔わたしの弱味つつく

古今堂蕉子

手品師のどこに触れても嘘が出る

鴨谷瑠美子

残り時間に触れると割れるシャボン玉

山本希久子

核心に触れると空気が止まる

伊達 郁夫

人情に触れてファイトが湧いてくる

久保田千代

指で目で鼻で触つてメロン買う

大久保眞澄

気配りが心の傷に触れている

升成 好

150年ハイカラさんに触れた街

長川 哲夫

すまへんお金のことはノータッチ

江島谷勝弘

女性に触れぬように両手は吊り革に

片山かずお

嫁ぐ娘の髪にも触れられぬ親父

山田 耕治

触れ合いが減って荒んできた世間

村上 玄也

人の手で触れてはならぬものがある

居谷真理子

触れ合おう手をさしのべる耳も貸す

緒方美津子

退院日ナースの温いハイタッチ

山野 寿之

キyunとくる言葉で触れてきた賀状

山本 昌代

触診はコンピュータに触れただけ

谷口 義

残り時間の端がすかすかに手に触れる

太田扶美代

熱々と分かつてののちよつと触れ

中岡千代美

介護する手を温める冬の朝

石田ひろ子

逆鱗に触れても自説曲げられぬ

山口 光久

スマホの指先時代の風に触れ

山本希久子

どうせなら触れてみるよりわし掴み

安土 理恵

古傷に触れると雪崩するところ

西出 楓楽

触れるのは日に葉が効いてから

山田 葉子

傷口に触れる世間の乾いた目

木本 朱夏

佳

ことわつてもみじのおてて触れました

指宿千枝子

魂に触れる新書と夜を明かす

渡辺 富子

指先で紡ぐ点字の物語

山本 進

そつと触れ終身刑にされました

伊達 郁夫

本物に触れる気合の素手素足

矢倉 五月

人

触れられて一途な紐が解け出す

森 廣子

地

SNSで触れ合えますか こころ

西出 楓楽

天

春ですよ私に触れてみませんか

栃尾 奏子

軸

アランドロンに触れたとたんに目が覚めた

兼題「余裕」 村上 直樹 選

伸びしろにまだ余裕のあるホープ
 長生きで余裕あるのに預金ゼロ
 京の寺ひたる利休のわびとさび
 三食が足りて川柳する余裕
 健康と金と優しい妻がある
 余裕あるジョークにも見えヒコ太郎
 うるう秒ただ一秒の余裕分
 ロボットが余裕の一手指す時代
 月五万小遣いあればいいのにな
 戒名も頂き墓も建てました
 爾々と箆筒預金を貯めている
 金箔入り飲んで余裕の殿気分
 欲しいだけあげると言えるお爺ちゃん
 イントロも余裕で聴いている十八番
 糞虫の糸の長さにある余裕
 無印の俺にはプレッシャーがない
 独り居になれてゆとりの八十の旅
 割り勘の十円まけてくれた友
 貧乏を楽しみながら生きた母
 はろくそに言って笑って夫婦独楽
 団栗の余裕どっちに転んでも
 余裕ある時にボロリと出た本音
 モナリザの笑みで夫の愚痴を聞く
 片足で靴下履ける元気で
 ふる里に靴脱ぐ場所がある余裕

清水 英旺
 奥村 五月
 長高 俊雄
 鈴木いさお
 古今堂蕉子
 飛永ふりこ
 木藤こみつ
 川端 一步
 江島谷勝弘
 石田ひろ子
 前田 紀雄
 原田すみ子
 坂 裕之
 矢倉 五月
 伊達 郁夫
 三宅 保州
 指宿千枝子
 藤井 宏造
 鈴木 栄子
 緒方美津子
 山岡富美子
 松岡 篤
 渡辺 富子
 前田 紀雄
 山本 昌代

満腹にまだ別腹という余裕
 本番へ余裕が出来た稽古量

鈴木いさお
 油谷 克己

兼題「めでたい」 新家 完司 選

補助線を一本引いてから余裕
 深い息できる男が勝ち残る
 スペースに余裕があつてよく喋る
 しくじりはまだ伸びしろが有る証拠
 冬の空なんでも聞いてやると言う
 無知という余裕と知恵という焦り
 八十路の余裕三角を丸にする
 聞く方にまわって裏を読んでいる
 ライバルが逝つたと昼寝するうさぎ
 百歳と決めたら毎日が愉快

佳

晩学の森で転た寝する余裕
 奥の手があつて窮地にたじろがず
 じつくりと聞き正論を説く余裕
 残高か余命表かと日向ぼ
 子の未来伸びるのりしろ無限大

人

大器晩成ゆつくり波を待っている
 雪の日は雪と語っている余生
 天

底辺をゆつくり歩く好きな道
 軸

五合酒まだ堂堂と黒田節

居谷真理子
 山口 光久
 内藤 憲彦
 岩佐タン吉
 吉村久仁雄
 山本希久子
 山田 耕治
 澤井 敏治
 川端 一步

初代 正彦
 村上 玄也
 宇賀 史郎
 山岡富美子
 北村 賢子

久保田千代
 海老池 洋

榎本日の出

元朝の空気きりりと大鳥居
 大吉を引いてスタート西の年
 皆揃い金箔が舞うお正月
 お元日先ず頼祭で乾杯だ
 神前に合格の礼告げる春
 元氣な子生まれましたと電話する
 祝箸新しい名を書き加え
 正月写真家族が一人また増えて
 ぼち袋また一人増え倍めでた
 お正月団地に子等の声響く
 茹で玉子今年も御節と真ん中
 メタカの子程のめでたさ老いの春
 とにかくも和解めでたい真珠湾
 歳時記に鶴彬忠が載るらしい
 初孫が嫁ぐ水引鶴亀
 おとんがランドセル背にありがとう
 ボーリングブルー賞が転げ込む
 赤紙をくぐった白寿さくら鯛
 みどり児を両手に抱ける三が日
 米寿から百へ寿ぐバースデー
 テロいない日本の初春を喜ばん
 貧乏神がノロウイルスで寝込んでる
 食べ歩きそれで十分おめでたい
 健康と笑顔があれば極楽だ
 錦織になつて小遣いやると孫

上垣キヨミ
 石田 隆彦
 関 よしみ
 江島谷勝弘
 坂 裕之
 榎本 舞夢
 北野 哲男
 原田すみ子
 山根 妙子
 山田 葉子
 前田 紀雄
 細川 花門
 内藤 憲彦
 岩佐タン吉
 緒方美津子
 七反田順子
 森 廣子
 緒方美津子
 長川 哲夫
 山野 寿之
 川端 一步
 澤井 敏治
 榎本 宏子
 前田 紀雄
 古今堂蕉子

なんにもないことがめでたいこと知る

山田 葉子

初日の出心にパッと花の芽が

飛永ふりこ

ルーレット弁財天がVサイン

栃尾 奏子

高齢免許全開制覇まだ乗れる

今井万紗子

占いで決めためでたい日のスーツ

榎本 宏子

シャンパンを開けようおめでとう離婚

中岡千代美

よく怒る上司ようやくご定年

村上 玄也

一人してドンペリ開ける定年日

村田 博

傘寿すぎはいはい趣味の会に行く

上山 堅坊

瑞雲がたなびいている古稀の脳

居谷真理子

めでたいなピリケンさんも言うてはる

七反田順子

シャンパンがまだかまだかと聴く祝辞

矢倉 五月

佳

お化粧ののりも嬉しい初鏡

木本 朱夏

ネギ背負った鴨が古酒まで提げて来る

澤井 敏治

親切に囲まれてますひとり者

榎本日の出

めでたいと百枚書いて寝正月

山田 耕治

母ちゃんに家族が贈る金メダル

榎本日の出

人

路地裏の地べたも温め初日の出

あまのとな

地

通学路見守り隊は喜寿傘寿

山岡富美子

天

地も揺れず弾も降らない三が日

居谷真理子

軸

高齢者から准高齢者になった

句会 燦 燦

十二月句会を読む 岩 崎 眞里子

置き換えただけで整理をした気分

また一年なんにもせずに終わりそう

再会の契り果たせぬまま師走

整理とは、物を置き換えるだけでなく捨てる事でもあった。

災害にテロと不安渦巻くままに一年も過ぎようとしているが、

何とか新年を迎えられそうな処まで来た。先ずは、そのことを

喜びとしよう。それにしても、年々会いたい人が増えていく。

物忘れ朝な夕なに進化する

存在感影絵のようになって来た

千切れた釦父が器用に付けている

物忘れとは忘れちゃいけない事を忘れること。進化すると：

どんどん忘れて、忘れられない部分だけが残る。それは影絵の

ような世界かも：と思つたら、釦付けをする老いた亡父の姿が

浮かんで来た。たぶん全細胞に染みこんでいる記憶である。

気分よく生きております自然体

祭り太鼓若者たちを呼び戻す

自然体で：と言われても何だか良く分からなかったが、気分

が良いかどうかが基準であったのだ。自然体で快活な人達が繰

り広げる故郷の祭が、若者の心を惹き付けられない訳がない。

迷い道たつたひとりの星月夜

猫の目で見ればこの世は万華鏡

迷いに迷つてとつぷりと暮れた道。心細さに空を見上げれば

満天の星月夜。独りとは独り占めでもあると気付いた暗闇は、

孤独を内包した解放でもあった。その横を「それがどうした」と

言わんばかりに猫が、悠然と次年へと歩いて行つた。ひよつ

として猫は、通年を牽引しているのかも知れない。

耕治

勝弘

和夫

敏治

富美子

雅枝

楓楽

玄也

良子

朱夏

お地獄壇

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いいたします。

編集部

あかつき川柳会(大阪) 山本 昌代報

我が城を終いの栖にするベッド
読解力向上子等に川柳を
人間の門戸開いて知る悟り
漱石の生涯百年門僂ぶ
影二つやがて一つになる良夜
お疲れさん句会帰りへ月の声
極楽に終の住処を予約する
ドアホンを鳴らしサンタがやって来る
政治家の影に黒子が潜んでる
可憐さの奥に秘めてた嫉妬心
おばちゃんのアメにも馴れて住む浪速
階段に残る人影原爆忌
隣国の少女像から落とす影
かれんにも冬芽が競う花晶
母泣かす駆け付け警護無事であれ

哲男 隆昭 壽峰 朝子 穂夫 穂子 蕉子 茶助 秀夫 高鷺 一志 福貴子 鮎子 シマ子 九条男

門灯の死角で愛し合う二人
おばあちゃん聞いて聞いてと恋語り
死に神が手招きしてる白い影
自衛隊員こんなはずではなかったと
資源だと言ひ張りゴミに住んでいる
後妻業僕も立てねば影武者を
門前払い何度も耐えて今の愛
一世紀バックしそうな世界地図
僻地でも終の住み家と木を植える
捨てられた子猫思わず抱きしめる
師の影を踏んで胡麻播る揉み手する
万博にカジノ府民はそっぽ向く
人類へ大きな影を落とす核
レベル4両手の爪色くすんでる
北斎も声を上げたか逆さ富士
「星影のワルツ」千回は歌つとる
老いたつて僕のマドンナまだ可憐
淋しくて影をピンクに塗って見る
住み馴れてコンクリートもふる里に
朝の贅銀杏踏んで城回る

克己 浩子 紅絵 俊雄 Kすけ 康信 堅坊 ひろ子 栄子 久美子 英夫 義泰 忠昭 行兵衛 秀夫 愿 廣子 のぶ久 たもつ

京都塔の会

山田 葉子報

よかつたなあ紅葉が待つて呉れてます
軽くカッ入れば動く洗たく機
豊洲のことはやきもきしてる問題だ
生年月日引算なんてありません

篤子 福子 弘子 肇

ボンコツ車肩で風切つてるキューバ
道端の花に素性は問ひかけぬ
ボンコツも油注入蘇る
飯盒を見ると青春キユンとなる
待ち合わせ彼女の来ない花時計
泉仙のご馳走冬をつれてくる
敷もみじ錦織りなす真如堂
降りかかる火の粉消し方わからない
冷飯の頃懐かしむ創業者
京の庭屋根まで届く碑のもみじ
やきもきと電車の遅れ待つホーム
四十年ボンコツの炬を再稼働
トランプの波紋地球を駆けめぐる
邪が多く帰依を托して手を合わせる
八十路過ぎボンコツ街道まっしぐら
適齡期やきもきさせる親不孝
団塊が追い付いてくる高齢化
頬擦りを今にも待つっている楓
ボンコツの夫婦に今日はすきま風
漂いながらこの世の旅もあと少し
やきもきは周りご本人はケロリ
やきもきして待つております救急車
やきもきとする事も無いひとり膳
早飯の哀しい癖が直らない
戦中戦後生き飯つぶを無駄にせず
紅葉散る今年も生命延びました

欣之 昭 弥生 満子 朝子 宏子 忠子 洋志 健一郎 保子 千枝子 求芽 靖鬼 ふりこ 元一 英旺 哲子 則彦 益子 葉子 かずお 光久 美智代 扶美代 楓楽 泰夫

膝コクリ腰はギツクリ眼は霞む
やきもきはもういや虎ファン辞める
一匙の粥に顔き父は逝き
弘之 文代 美津子

ブラザ川柳(大阪)

梶原

弘光報

車座で戯れなごむ古希米寿
まだ未熟サイズも違う民主主義
真夏日に沢登りして見る水面
好きだから視線を外す照れ隠し
混浴に照れているのは男共
ハグしたら子供のように照れた母
空いた席同時に座り照れ笑い
二刀流まさかまさかが二億越え
受け狙い冗談飛ばし空気冷え
江戸っ子の冗談洒落もべらんめー
冗談がいつかホントになるかも不
心眼で肉眼見えぬ人の底
克三 五月 政夫 和代 修 清乃 正子 淳司 一彌 悦夫 弘光 久美子

はたる川柳同好会(大阪)水野

黒兎報

国の心棒心配ないと言えば嘘
年の瀬は妻の指揮棒活躍し
棒鱈のピンと干された晴れ姿
野菜高悟った顔でモヤシ食べ
退職後悟り開いて妻の後
悟ったらゴミもホコリも愛おしい
味付けは濃いめ内緒で白湯を入れ
順子 正子 信男 奈津子 堅坊 郁子 勝

濃い化粧役者はいつも二面相
東京の濃さに驚くうどんつゆ
年末に怠けのつけがやって来た
末っ子にお譲りたんと来た昭和
末吉のみくじそろそろ期限切れ
平凡の中にしあわせ隠れてた
愛の手をそとと差し出す募金箱
長一 黒兎 桂子 純子 春代 美佐子 柳童

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

湯を立てる子供の仕事昔事
湯たんぽで昼夜暖とる老いの幸
湯舟にてこれが極楽仕舞風呂
湯の町もキャンセル続き大打撃
骨量が減らないように陽に当たる
大事になあだんだん減っていく命
減量に失敗をした相撲取り
病んでから体重の減る恐ろしさ
余命聞き明るさ保つじらしさ
アルバイト皆勤賞をくれた孫
いじましく貯めたへそくり羽がえ
余震にも耐えて児童の音楽会
リハビリの杖びつしりと汗をかく
いじましい根性母はすぐ叱る
夢の種枕の中に蒔いておく
シャボン玉みんなの夢を背負ったまま
年甲斐もなくデツカイ夢を食べている
玲子 康子 日出子 智恵子 けいこ 荻江 雄大 瑞枝 龍子 英子 由紀子 醉美蓉 節子 茂夫 石花菜 次男 紀美恵

村上直樹選

オートファジーノーベル賞で恩返し
苦しんで苦しんで産む楽の種
生きたとは死ぬとは友の見舞終え
欲望という名の箱に底がない
飯粒を大事に拾う喜寿米寿
拝むうち石ころだつて神になる
伸び代があるから叱る抱きしめる
真つ直ぐな道真つ直ぐに来た無冠
空見上げ雲に叱られ励まされ
まだ立てる歩ける明日は四股を踏む
昇 直子 國治 ヨシエ 正美 久美子 洋 霜石 わこ 貴恵

佳句地十選

(1月号から)

谷口義選

大ジヨツキほどの相談なら聞こう
神様が出ておわすまで鈴鳴らす
苦しんで苦しんで産む楽の種
百歳を目指す女の果し状
盆栽の生前退位済ませて
半額券二枚でタタになりますか
みんな行く道誰も戻って来ない道
あご引いてそれだけのなにに首捻挫
親切な妻だがどこかしら他人
読みながら光源氏は嫌なやつ
郁夫 芳光 霜石 哲子 勝弘 いさお 理恵 あや乃 瑠美子 眞理子

夢食べた獲のお腹は真つ黒け
来年は「夢つてる」を流行らせた
夢えがき販路ひろげた芝生売り
夢ばかり追っていましたが親不孝
夢適う嫁さん迎え春が来た
体力は減るが減らない好奇心

川柳塔まつえ吟社(島根)相見 柳歩報

朝刊の文字の香りに幸を読む
好きな本読んで笑顔の百五歳
二人して歩むドラマを読み合わす
良書読む心の中に虹がでる
ロボットが手の内読んで指す将棋
失敗をしたから読めるものがある
故郷の記事は何度も読み返す
安心はできない亀がいる限り
冷蔵庫いっぱいにしてまず安心
安心になった日本が揺れている
心寒くて花とケーキを買いました
一献に寒い話が奮起する
復興を騒ぐ割には風寒い
限りなく黒に包んだ北の国
寒かった雪の思い出父母がいる
バスツアー隣の席が咳をする
ドレッシング嫌だイヤだとマヨネーズ
嫌なことつい言っている口を拭く

風露
鬼一
重忠
野蒜
祐子
照彦

幸子
ちえこ
草庵
輝山
久絵
雪代
堂太
桂子
涼子
妙子
文子
左余
あきら
哲子
知恵子
注湖
芳山
ゆき

雨降りはいやと人間だけが言う
気がつけば嫌な大人になりそうで
あの人は嫌いだけれど気になるね
丁度良い好きでもないし嫌いでも
いつ迄もささくれ立った私です
魚心蹴ってダイヤへお嫁入り
ふるさとへ帰る宝を撫でて来る
宝物いっぱいあるよあれにこれ
宝物わたくしだけのひみつです
飽きもせず宝競べで冷める酒
宝って何食べて寝て食べて寝て

はびきの市民川柳会(大阪)永田 章司報

にこつと山茶花わたしをONにする

国会で砂上樓閣話題する

無知蒙昧泰然自若と言っておく

嫌いだと言われ好きだと言う余裕

身に余る体重だけが余裕ある

ボケットにそつとねじ込む茶封筒

あかんべえしながらメールにはにこつ

カレンダー笑った猿のあと一枚

緊張が溶けてにっこり初対面

つらくても気持一つで余裕で

にこつとも出来なくなった決算書

余裕より早く早くが口癖に

椎茸は主婦の味方の値段です

柳歩
瑞人
朋子
みちを
青帆
美智子
弘充
紗季
ひすい
とも子
寿代

みつこ
洋一
久仁雄
シルク
かつ美
高鷺
光男
ひろ介
喜久子
フジ
安男
美喜
さくら

年金までカットするののか安倍さんよ
物言わぬ赤子の返事唯にこつ
川柳も出来て今では超余裕
一言でにこつとさせるお人柄
有頂天に鬼がにこつと呼びかける
淡い恋楼閣のよう砂の上
未熟な愛が砂の器に盛られてる
阿りの言葉に溶ける角砂糖
訪ねたらにこつと笑うだけの父
吉報の受話器にこつと弛む頬
お金には親のおかげで余裕ある
敗者砂まみれ勝者涼しい顔

長柳会(大阪) 辻村 ヒロ報

まっすぐに生きる尊さ知る背中

転けてません素振りも見せずスツと立つ

人生の勝負け所詮死後評価

照れながらバージンロード父の胸

フルムーンで世界遺産へ手をつなぎ

照れながらそつと腕組むルミナリエ

ありがとう言えば照れてる父の背な

初恋の人にはつたり頬染める

冗談にも言えぬ禁句で散る火花

肩書きを捨てて自由が寂し過ぎ

臨月の新郎新婦照れもせず

ジョーク一つ言わぬ通じぬ石頭

雄太
ヨシ枝
アヤ子
清
泰子
一文
いさお
壽峰
ちづる
欣之
真一
章司

ヒロ
由夏
弘美
旅人
洋二
直樹
幸子
マサ
靖博
和子
淳司
隆彦

きれいだね女房に言つて叱られる

一生の幸せ戦しない国

肩の力抜けて正解増える日日

人生は自分磨きでいまだ石

正博
正美
ふみ
孝代

川柳茶ばしら(愛知)

金子美千代報

筋肉痛後期高齢三日あと

妻よりも犬の気持がよくわかり

チクチクと頭を責める二日酔い

打ち直す下手な注射に腹が立ち

中性にならないように化粧する

平凡な日々スバイスの五七五

雅美
まみ子
三樹夫
週行
かつ子
美千代

川柳同友会みらい(鳥取)吉田

陽子報

十七歳切れたどうしたもんじゃろう

飛び火せぬ位置で話を聞いている

父母の経験しない歳を生き

功名より向上心に力入れ

投身の蛙に慈悲を施さず

おいしいの笑顔に負けて栗をむく

秋茄子を仲良く食べる嫁姑

辞書開く明日の夢に帆を上げて

トランプ氏わたしも強い個性ある

ハンドルをうまく切れない曲がり角

ポプデイルン時代がやっと追いついた

スーパームーン今堂々のメタボです

天皇は終身雇用されている

菜美
華蓮
和之
章子
一瞬
和代
美恵子
葵
みちこ
亜矢
真帆
陽子
游子

予備知識あるが地震に間に合わず
被災地のブルーシートは眠れない
無骨より熱ほとばしる顔が好き

川柳さざやま(兵庫)

北澤

桐民報

菜園に高い野菜の出来嬉し

今日と言う抜き差しならぬ大晦日

君が代はモンゴル勢が上手です

ついでにとあれこれ用を頼まれる

ため息がばつと笑顔に変わるとき

ワクチンの接種も済んだ意志強く

自作自演堂々挨拶係奉式

電気中無言でスマホ指ダンス

美しい手書きの句報師の遺産

友の計報聞きて涙の一人酒

盗まれてへそくり全部ばれました

川柳塔唐津(佐賀)

仁部

四郎報

歩行器にたよりて巡る家の中

コスモスの牙では敵を防げない

傘寿の会君も私も瘦せ我慢

開発に森消え熊も町に出る

はどほどに叱れと母が娘を諭す

川柳塔なら

大久保眞澄報

マンデーとフライデーあり使い分け

SLの煙は少年期の慕情

紫音
安子
公弘
かほる
哲男
稠民
真由
開子
幸子
照代
美智子
善輔
さゆ子
四郎
蜂朗
節子
高明
史郎
良一

白黒をはっきり決めた友が去る
ブラックな企業避けては働けず
黒ずくめの女ばつんと終電車

黒を着る謎の女になりたくて

片づけた部屋が他人の顔をする

札束は魔法なんでも片づける

親友の死後の整理で見た手紙

片づけた場所を忘れた老いた百舌鳥

老いじたく諦め切れず捨て切れず

片づけが面倒くさく店屋物

年金が軽く片づく多数決

片付け魔高じて遺品整理業

ずる休みしてから戻る蟻の列

ふる里にいのち休める川がある

親戚をみんな殺したズル休み

人間をときどき休むひとり酒

手を休め生命線に聞いてみる

風邪気味と仕事休んで卯酒

終末の片付け出来ぬ命乞い

ピンコロもボツクリも空き待ちらしい

終活のイロハ飛び交う熟女たち

孫就活妻はベルコの説明会

人生の終りにそつとありがとう

戦ノ一杉歩んだ終の道

終活はまだまだ趣味の予定くむ

緞帳が降りて現実に戻る

心電図ふと一本の線になる

博一
妙己
克己
榎子
富子
勝弘
優
賛郎
おたか
紀雄
恭昌
比呂志
辰雄
俊八
恵美子
甚之市
崇明
萌子
倫
ふりこ
和夫
孝子
タン吉
堅坊
理恵
喜八郎

終活よりもまず就活の年金者
たそがれてブラックゾーンに居るひとり
煮えきらぬ位置で心が暗くなる
ブラックホールの世界で遊ぶ重力波
懺悔と共に昭和の黒い過去畳む
思い出の隙間にひそむ黒い影

南大阪川柳会

津守

柳伸報

風雪を耐えて明るい寒椿
バーティの明るさに舞う熱帯魚
清貧にいつも明るい茶の間の灯
嫁が来て明るくなった過疎の村
正夢になった棚はた菊花賞
メール問題のお蔭棚はたの勝利
会長に棚上げ過去は感謝する
棚田ある景色良いとこ憶れる
神棚に孫の入試の願い札
コンビニの目線に並ぶ人気菓子
女子会のテーマ亭主の棚卸し
トランプは移民の父を棚に上げ
神棚に貧乏神を祀ってた
地獄耳もつてリストラから逃れ
言い逃れ上手になった午前様
絶対に逃れられない育児義務
のがれること知らぬ男の四面楚歌
のがれた先は掌の上だった

眞澄 柳弘 完次 盛隆 國治 將文
あや子 裕子 志華子 国和 ばっは いさお ルイ子 柳右子 タカ子 直子 俊雄 実 東風 恭昌 和雄 篤 弘 昌紀

甘えられる親でありたし子を責めぬ
ご利益はきついこの坂越えてから
きついの母の言葉は愛の鞭
おしおきはきつい虐待とは違う
身の程を悟るウエストのサイズ
ぜんざいにケーキ大福ひるまない
貧困が鴨緑江を渡らせる
くじ買った日より陽気になる私
度忘れも度重なれば大目玉
齢重ねだんだん人を懐かしむ
年寄りの事故見て返す免許証
あきらめぬ努力へきつと虹が立つ
虐待の親を子どもは選べない

城北川柳会(大阪)

近藤

シマ子 修 あさ子 なぎさ 柳弘 勝弘 克己 更紗 柳伸 一步 博 栄子 たもつ

正報

後期だがまだまだ弾むペンを持つ
忘れたはずの想い肴に独り酒
いのちの光神にいただき今いきる
年忘れ繁昌亭で大笑い
投函の葉書がボツケに七日間
もう一年あと一年を紡いでる
うきうきの仮面を脱いで部屋で泣く
還暦がことわりもなくやって来た
チエックアウトの部屋でケータイ騒いでる
アイポッド耳に栓して開かぬ猿
ありがとうはにかむ孫に心浮く
幼児に戻つて野山走りたい
飴ちゃんをそつと二つもくれた女
一粒の米の尊さ知る昭和
つくづくと今年を思う夕茜
逆光にしばし戸惑う志
秋深し隣松茸うち秋刀魚
出来るなら母の子としてもう一度
原点は自信を呉れた二重丸
胸に住む鬼を宥める除夜の鐘
失敗の山乗り越えて来た自信
修練を積んだ自信は裏切らぬ
私の眼に狂いはなかったマイウエイ

満作 和夫 たもつ 杵香 榮子 縣 笹 実 素子 公子 千恵子 弘委智 高志 勝弘 直樹 志華子 堅坊 柳弘 一步 郁夫 義昭 満洲夫 朝子 賢子 一粹報 洋々

川柳ふうもん吟社(鳥取夏目)

一粹報

刃こぼれの恋に未練が立ち上がる
思い切り泣いてダメージ軽くする
成仏が出来ぬ導師が下手っぴい
軍刀の刃こぼれ父は語らない
しとやかさ私に少しあればいい
五輪旗につばをしている内輪もめ
娘の料理下手っぴいでも父は褒め
下手っぴいと言われ火のつく五七五
下手っぴい投句で恥をさらけだす
ごめんねが言えて素敵な老夫婦
なにげなく触れた手恋の導火線
一三〇万の蟹指一本は何ほだい
刃こぼれの銃持たされて自衛隊
刃こぼれをしても豆腐はまだ切れる
刃こぼれの鈍で改憲論をぶつ
ダメージが作り笑いに見え隠れ
ダメージは聞いてしまったある寝言
どこへ行く聞いて欲しくて化粧する
おとこ遍歴包み隠して嫁にゆく
もう二度と立ち直れない老いの恋
ダメージは見ての通りの恋やつれ
ダメージで天狗の鼻が折れちゃった
刃こぼれをうまく使える年の功
刃こぼれを起こすと怖い選挙戦
夫の言い訳既に刃こぼれ起こしてた
映画館減って昭和もさびれゆく
愚妻とは書くが頭が上らない

一 瑤 無限 金 祥 秋 月 美 佐 枝 節 毅 天 翔 凱 柳 八 郎 文 香 蟹 郎 敏 夫 清 信 賢 悟 龍 彦 善 平 勲 章 とも 湖 野 蒜 茶 人 振 作 紀 美 江 妻 子 回 春 子 み ゆ き 雅 女

ダメージの災いなしと知事行脚
倒壊した墓のダメージ計れない
どこへ行く三途の川を渡つたら
トランプ勝ってT P Pよどこへ行く
老眼も良い家の埃が消えている
成人は父母を遠くに置く暮らし
浮き雲よお前はいいな風まかせ

岩美川柳会(鳥取)

山下

節子報

脱皮した孫がびちびち帰る来る
携帯はオフ気まぐれな風になる
三行半インクが散って読めません
びちびちの論吉吸い込む熨斗袋
電話魔に仕事の予定わやにされ
武士道に切腹という散華あり
音もなく散った没句の愚痴を聞く
電話には飛んで出たがる孫がいる
枯葉散る別れの夕べ芋を焼く
年金の値下げ法案夢が散る
いさぎよく散るハマナスに山桜
散る前に言っておきたいありがとう
裏ばなし拾ってますよ電話口
古稀の花散って米寿の花つぼみ
子育ての一幕にある糸電話

幸 子 茂 登 子 昌 鼓 由 美 子 美 穂 行 男 一 粹 一 粹 一 瑤 天 翔 茶 子 美 恵 子 蟹 郎 た め 菖 子 幸 安 敏 子 重 忠 雅 女 弘 子 公 子 節 子

夏を呑む豆腐屋を呑む冬も呑む
昔の恨み今懐かしく終らせる
終点の一つ手前に棲む迷い
ため息もいろいろあつて終電車
言っておく末期の水は芋湯割り
縁切った愛が微熱のまま続く
たんばも私も翔んだ自由席
終着の駅に揺がる夢舞台
守り抜いた最後の柿の実が落ちる
熱燗でキューと一杯飲む至福
留学へ熱き想いの夢馳せる
直線と斜線飛び交う通夜の席
背負うもの今日一日は置いておく
残された麦藁帽子まだ熱い
久しぶり同窓生とはしご酒
八起き目の少年はまだ火の玉だ
斜めから熱い視線が刺さる類
終着の花野でこころ遊ばせる
しがらみの女の道が揺れすぎる
清濁を丸ごと飲んでいく器
愛憎の喜怒哀楽は終の園

きやらぼく川柳会(鳥取)成田

雨奇報

笑みもらう沢山咲いたあさがおに
居ることは居る貧相な福の神
暑い夏焼いた背中が自慢です
同期会残れる者は六人に

正 治 伸 雄 田 鶴 子 常 男 清 未 知 澄 子 朋 子 慶 子 壽 峰 高 鷲 仁 武 人 惠 一 文 奏 子 寿 之 よし み 晴 美 欣 之 森 子 あ や こ 雨 奇 汪 かね 子

銭出して大山の水飲んでゐる

メダルラッシュ夏バテなんかしられん

とり出して洗濯出来ぬ我がこころ

年拾ひ五体バラバラ散歩する

突然に笑顔残して風となり

こんな日に羽化をしたのか雨の蝶

リオバラも歌と踊りで盛大に

年令に逆らう元氣ブール行く

夏過ぎてコスモス咲いて風涼し

自分流人のする事氣に入らぬ

雨ばかり待ち遠しくて雨に会い

コンバイン秋空までも刈つていく

尾っぽ振る空想の世界好き

集中雨生活こわす狂う水

植山もいっぱいになり待機中

川柳塔打吹(鳥取)

野口

節子報

柳友もこころ逝つた秋の空

西東コロコロ変る震源地

余震にもコロコロ落ちる赤瓦

余震でもコロコロ寝てる妻がいる

空き缶もコロコロ転げ終電車

コロコロと良くぞ太った君が好き

コロコロと地震で落ちた鬼瓦

許したら胸のしこりが消えました

陽の当る方に向かつて生きていく

紀の治

桐子

恵子

正二

多美子

千代

登実枝

治代

ひろこ

宏之

美草

美佐子

瑞枝

美智子

美穂

息をするだけならいらぬ維持装置

ボランティア生きる楽しみかみしめる

生きてます現況届今日も出す

目が覚めて今日も生きてるありがとう

米寿でも元氣で生きて煙作り

老いらくの恋もしてます生きてます

親よりも一寸長生きするつもり

人生の九合目まではやつと来た

芋のつるみんな本氣で生きている

生きているうちはてくてく歩きたい

楽しみの種は毎年蒔いている

この頃は少し斜めが生きやすい

八頭身自分の影にはくそ笑む

到るところに影を残して逝つちやつた

影伸びて赤提灯が恋しかり

月影に冷たく光る青い屋根

満月が陰に隠れた隙狙い

影絵から飛び出して来た軽い嘘

夕暮れに影をしまつてやり直す

竹原川柳会(広島)

古田

太虚報

よし決めたスーパームーンに背を押され

決まったの初孫見るも夢でない

何よりも黒田が決めた男氣よ

多数決で決めても恐い民主主義

此の人と決めて五十年揺るぎない

照彦

美美子

紀美恵

瑞子

久芽代

重忠

滋

貴恵

美知江

石花菜

三津子

美ツ千

龍枝

節子

清

公恵

道子

重利

芳光

決断の女の手へ潮満ちる

神様が決めた業です受け留める

親を看る話決まらず茶が冷める

種ふわり未来信じて発芽する

味のよい島のみかんの後継者

坂ひとつ越えて未来の風と逢う

ふたりばつちになった未来を語ろうよ

真つ赤か夕日に弱音吐けません

青天へ赤とんぼになるウォーキング

昔昔ランドセルは赤だった

しあわせを生むあかぎれの母の指

晩秋をひとり旅なら赤コート

赤信号を無視する少年の翼

朝焼けは北斎越えの絵画です

バンザイバンザイ赤一色の夢を見た

たくさん引き出しを持つ人に会う

世は豊か老人会もおしゃれして

今年の自画像年齢通りに出来上がる

秒針もビタリ電波時計に最敬礼

晩秋を彩るコスモスの憂い

和歌山三幸川柳会

武本

碧報

騙し絵の中に留まる片思い

おくやみの言葉に句読点がない

本物の名器は素焼から光る

僻地だが栄転だよと妻を説く

敬子

輝恵

栄香

淑子

白狐

鬼焼

蘭幸

笹舟

幸子

笑子

寛

千代美

昭紀

京子

慶子

歩美

栄恵

半徳

比呂子

厚子

碧報

敏照

智三

碧

義雄

歲月が私の顔に刻まれる

片減りの靴で毎日医者通い

生き残るためには変える旗の色

子の罪は責任半ば親にある

やむを得ぬことが大手を振る時代

万人が納得のいく策はない

仕方なく叩いた手にも宿る罪

残念なDNAを継いでいる

將軍のジョーク敬礼して笑う

品の良い軽いジョークをデザートに

冗談がちょっと辛子が効きすぎる

冗談が下手で皮肉になつてゐる

冗談が過ぎてだあれも振り向かぬ

冗談を言える仲ではないと言う

冗談に優しいクスリ混せておく

冗談と一緒に火の粉飛んでくる

冗談が通じぬ席で浮き上がる

今じゃもう笑い話のラブレター

戦争を酒の肴にしない父

ふる里を吞んでしまった鳶葛

かさぶたが取れるまで飲むの水

一念を飲んで炎のページ

刺のある言葉も飲んだ回り椅子

スランプを丸ごと飲んだ秋の天

飲まされた煮え湯を糧に今日がある

飲み込んだ言葉を溶かす秋の天

倫子

絹子

菜摘

一雄

悦子

日出男

富香

知香

義泰

俣子

章子

准一

明子

美羽

よしこ

昭枝

次根

みつ江

保州

和子

あき子

幹子

みね

純子

昇

起世子

飲み込んだ言葉が喉に引っかかる

腐っても豆が鯛には変わらない

色白の豆腐にラブの牛蒡さん

家計簿のピンチを救う冷や奴

冷や奴四つの角の自己主張

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

皮肉さえ美女は美談にすり替える

三猿を演じて皮肉遣りすごす

皮肉な雨二次会の足鈍らせる

核兵器みんなで持てば恐くない

よろしいいつも一杯飲みはって

失言で皮肉な言葉の返り討ち

ヒロインをいじつて稼ぐ視聴率

皮肉でもお人好しです笑つとく

我慢して禁酒出来たの二日だけ

我慢度を体重計が拍手する

我慢するなんて私に出来ぬ芸

いじめに耐え生きたと決めた健気な子

我慢してますと妻に言えますか

我慢して無理して笑う寒いギャグ

耐えた日が深みになっている度量

二枚目の堪忍袋縫ってます

リハビリを兼ねて散歩の夫婦愛

ダイエット我慢の切れる日が怖い

攻めてくる毒舌の裏きつと愛

当代

芳一

千鶴

ひろ子

宏夫

雅美

安代

満知子

宏造

勝弘

紀子

直子

満寿恵

敏晴

妙子

シマ子

福貴子

克博

里子

美龍

俊雄

重信

まつお

ゆみ子

攻めないこれが私の答えです

手を出すな南スーダン自衛隊

攻めているつもりじゃわが下がつてた

大勢で攻めて来たなら負けるがな

物忘れじぶんを攻めるほかはない

羽生君攻めの姿勢で見事V

迷惑ちやうか自分を攻める長生きも

反論はないと云いつつ目で攻める

ガス消したサイフは持ったカギかけた

待ちに待ち臺がたつ娘を嫁に出し

川柳塔みちのく(青森) 稲見 則彦報

花の種握り続けている拳

終つたらあつけなかつた句碑除幕

文机詩人は秋の風つかむ

赤ちゃんの拳に未来入れている

詩の文字を刻んで進むカタツムリ

影武者がロダンになつて思案する

あつけない幕引きだつた豊洲地下

傷心の窪みを愛が埋めてゆく

じゃんけんぼん日が暮れるまでかくれんぼ

遠慮して拳を三つほど空ける

除雪する握り拳が解けない

二の腕を上げた拳の猜疑心

用済みのカカシ詩人の顔になる

方言詩人ふるさと愛は人一倍

日の出

美世子

昌紀

芳香

公平

廣子

たかこ

志津子

萌

舞蹴

則彦

嘉

則彦

慕情

井蛙

久美子

風来坊

重虎

芳生

小とみ

黙人

隆樹

一吞

吹喜

美鈴

あつてなく遭うかも知れぬサギ被害
侘と寂ボクを詩人にしてくれる
娘つて父より母をどうしても

柳子
のぶよし
規子

ガツポーズしている蟻が見えますか
散り終えた枯れ葉の冬
よそ者に真似ができない方言詩

龍馬
ひとし
京子

降る雪の一片が詠む北の詩
あつけない変化相撲で野次が飛ぶ
心電図まだいけるぞと波を打つ

きよし
つとむ
吞舟

多数決が好きな人生生きただけ
大相撲人気復活応援団
形見分け今時誰も手を上げぬ

初枝
花匠
花さゝ

人肌の爛とはいかぬ夏の酒
精進料理美味とお値段足るを知り
焼いもの笛が聞こえぬ年の暮れ

氏加子
一花
霜石

腐っても鯛というから鯛を買う
三年も喪中が続く雪しんしん
恋してる男の背中鮮度良好

洋子
和香子

川柳塔さかい(大阪)

村上

玄也報

慎ましく凜と生活なさってる

舞夢

駆け引きも見せてマラソンひた走る

八千代

アスリート師走の街を走り抜け

唯教

限界を悟った日から老い走る

富夫

脚の差をバトンで裁き銀メダル

かりん

ボキボキと指を鳴らして動き出す

ゆみ子

永遠にノーマアヒロシマまきのこ雲

ゆみ子

超くせ字自分も読めぬ走り書き
得手勝手飲み込みきれず聞き流す
編み棒が走るイブまで後少し

素頼馬
澄空
五月

ゆるりと胸の小骨を溶かす酒
親切が骨身に沁みたこともあり
妻だから俺の正体見破った

倅子
さくら
光雄

走れなくても歩ける足にありがたう
餌をやり野良猫増やす奇人住む
反戦へ背骨を伸ばす十二月

若芽
世紀子
和夫

ふりがさす昭和の気骨古くなり
憧れに会うと骨まで熱くなる
ええやんかのんびりするの今日だけよ

憲
扶美代
月子

しがらみを外すと風が押す走り
十二月ひたすら走るかたつむり
正体は保険目当ての妻でした

誠一
敏治
清

郷土料理この正体は内緒です
ポイントの5倍に走る嫁姑
走らずに次の電車にするゆとり

シルク
ひろ子
妙子

閻魔さまのぞいてはった気をつけよ
老人よ走らず免許返しなよ
縁かつぎ伸ばした髭も今日限り

ヨシ枝
健吾
大造

感情に走り理性は置き去りに
優しくハグしてね骨が折れるから
妥協癖ついて男の骨がない

としお
みつこ
好

遠景の野山に雪の季節来る
戦慄が走る老人車両事故
偉い人乗せて運転気をつかう

みつ江
時雄
玄也

走ってもドアは待つてくれません
岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子報

天笑

あたふたと喜劇演じて老いて行く
恩師のお蔭父を説得高校へ
未だ着かぬ右往左往の地下の街

あかね
益祥
カズ子

ラッキーと落ちた所で咲いた花
拉致家族平和いつくるもう待てぬ
侘しさに追討ちかける一人鍋

香代
和美
一子

夫逝きやつと平和になりました
鍋の時だけ偉そうな鍋奉行
今日は吉探血上手いナースさん

清
喜代志
幸子

小声では平和の使者は振り向かず
基地や拉致これで平和と言えますか
幸運が続いてなんだか怖くなる

信二
隆昭
珠子

地球儀を抱いて平和を願う夜
あたふたと決めた法律無理がある
技よりもその生き方を真似て生く

大輔
忠太
白水

期待通りに落ちたばたもち
かあさんから生れラッキーだと思ふ
雪だるま竹槍もって平和主義

英夫
ひろ子
ふさゑ

上手な字真似たいけれどまますならず
あたふたと幸せ家族演じてる
接待だけ真似て二代目の社長

弘子
益男
宗博

あたふたと日々が過ぎてく十二月
何時からか舌が真似する義母の味
解散風吹かせあたふたさせる策

洋二
義泰

あたふたと悪法つくる多数決

律雄

山ガール男を当てにしていない

靖鬼

川柳塔わかやま吟社

川上

大輪報

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井

宏造報

一年の裁きを受ける十二月

保州

成績表ちよつと見せて閻魔様

洋子

骨埋める所は貴方の傍がいい

利子

帰らなきや釣瓶落としに急かされる

知香

バーゲン場覗いただけでくたびれる

初音

ブラボーと叫んでみたい嫁がきた

みよし

暮れなずむ街で聞こえる母の声

ほのか

息吸って止めてが長いレントゲン

芳香

デパートのおせちに替えて喜寿の春

正和

ストレスもつけてスッキリ年忘れ

准一

煮え切らぬカレに付けたい覗き窓

紀恵

いくつもの修羅場を越えて今日の無事

千代

忘れるといふ幸せもあつていい

紀久子

地図にない山脈いくつ越えたやら

ヨシエ

若い娘もけつこう多い終電車

宏造

丸い石越えた苦勞を忘れ去り

秀子

金銀銅誰も彼もを幸せに

千賀子

智恵理まるつきない宝庫出しきれず

正彦

移り香を忘れずいづく赤い紐

寿子

場読みしておどけてみせる苦勞人

つな子

義理不義理みんな埋めてしまいたい

和宏

忘れよう頭がパンクする前に

日出男

カレンダーはらりと落ちてもう師走

晶子

内風呂の柚子のかおりに頬うめる

紀華

忘却も時に私を楽にする

富美子

誘惑にまけてカードが笑いだす

雪菜

なんともヤル気を出さにはじまらぬ

じろう

そのうちに言うかも知れんあんだ誰

大輪

断捨離は先ず山ほどの葉から

紀華

そぞろ寒む湯気も御馳走鍋料理

哲弘

左にチョイ右にチョットと置き忘れ

なる子

いつ噴火家でくすぶる休火山

祐康

喜寿祝い揃う笑顔に胸いつぱい

弘子

ふり向きもせぬ子見送る母が佇つ

徑子

山と言えは川と答える十四日

まつお

無事願う母の折り子を子は知らず

浩司

一人旅を見送っている無人駅

よしこ

つい軽いのりでやりましょ言つた悔い

紀乃

平穏な今日と言う日を折りたたむ

武彦

見送つた母のバジヤマを今も着る

克子

デバ地下のお節コーナー目が泳ぐ

かずお

徘徊も無事に帰つてほつとさせ

宣子

見送つたからこそ打てたホームラン

まさみ

心眼で覗くと見えるバラダイス

りこ

みな元氣頂きたくて句会出る

みつ子

叩かれて音ほどほどに吐く木魚

小雪

人力車高い目線で京の旅

歌留多

年末は運命を聴きしめくくる

武臣

ほどほどの手加減知らぬ子の怖さ

紀子

死んだってドナーカードで生き返る

正和

抱きしめてほしいからまた泣いている

千賀子

ほどほどの自慢話に笑みこぼれ

和子

大吟醸飲んで極楽覗こうか

宏造

イクメンのババに育てた妻の腕

ひとみ

川柳あまがさき(兵庫) 大浦

初音報

柳明

美籠

哲男

暇そうながードマンには道たずね

柳明

母さんはいつも小さい方選び

純

ブラボーの種を心で育てている

文香

暗証番号カードメモセにやすぐ忘れ

修平

嫌やけど勝手に選者させられる

哲男

ブラボーの種を心で育てている

順子

甲山あれをかぶるは大男

佐紀子

山の色も海の匂いも冬である

比ろ志

ブラボーの種を心で育てている

順子

片腕と言われこき使われる僕
杖よりも転ばぬように腕を組む
両腕が赤児の重さ恋しがる

両腕で抱かせて貰う笑む天使
身内だけブラボー叫ぶコンクール

無器用だが同じ歩幅で恙なし
砂浜に埋めた思い出波さらう

子は無事もニートで困る母嘆く
喝采の重みが肩にのしかかる

無事な顔見たら説教したくなり
大切にしても減る減る髪は減る

八尾市民川柳会(大阪) 土田

人間を育てて磨くのもお酒

乱れてもいとわぬ温い文に酔う
不自由の中にもきつとある自由

ふつつと葉罐の声はと昔
五臓六腑毎日煮沸するお酒

声高に愛を叫んでいる無粋
幻想の闇に棚引く冬霞

うな垂れた稲穂やがては黄金色
忍ぶ草常寄り添いし父と母

乱調のピアノは本心の嘆き
議事堂の底に煮詰まる善と悪

席替えにわくわく好きな子の隣
うらめしい目で睨んでる活づくり

煮沸してしまつたわたくしの悪意
晩鐘が逢魔が時を急かす秋

六甲川柳会(兵庫)

市坪 武臣報

ひと言が優しい風になる介護

肩に手をしめじみ諭す母の愛
風邪ひくよそつとやさしく掛け布団

老いの身を案ずる電話掛けてくる
母さんの一言すばり胸を刺す

枝葉切りすばり本音を聞いてみる
嫌なことズバリ言う妻したり顔

下戸がつぐビールはいつも泡六分
発泡酒国会議員税上げる

水の泡がビールの泡に癒される
泡の世にしたくはないが咲かぬ花

泡沫候補リーダーの名で選ばれる
熱帯が互いのしこり溶かし出す

カレンダー最後のページ大切に
フルムーンわくわくもなく箸すすむ

名を忘れ今更聞け誰だつて
今更をこれからにして生きかえる

確認は今更いらぬ夫婦愛
今更を今からに変え若返る

パンドラの箱開けてから悔いている
歳重ね返せぬ恩が増えていく

喪中ハガキ友を臉に落葉掃く

森子 欣之

武臣報

武彦

じろう

逸郎

和子

美恵子

忠貞

弘

利子

洋一

和宏

洋次郎

浩司

短所は短所余命そのまま生きるべし 光久

川柳藤井寺(大阪)

鴨谷瑠美子報

鳥返す話は避けて金儲け

金は天下の回り物でもないわ
もの好きな人だ万札貯めてはる

お金とは無縁になれぬ老いの道
拾われず小銭師走の雨の中

アベノミクス借金地獄押しつける
お金とはほとんど縁が遠くなり

故郷喪失お金で償えるところでも
神殿の前で賽銭まだ迷う

断髮式の鉢が涙ぐんでる
昔気質料理鉢になじめない

チヨキチヨキと素人庭師が腕ふるう
悪いのは鉢ではなく腕の方

咲いた花より美しく花鉢
亡花逝きされぬ鉢が増えてる

鉢では切れない熱い友の縁
亡母の鉢まだ切れ味は衰えぬ

ホテルでつせ河内弁には気イつけや
丘のホテル美空ひばりがよみがえる

あのホテルこのホテルにもあるドラマ
琴の音が流れてこちよいホテル

待ち合やすホテルロビーの人生譜
私のリゾートホテル駅裏に

光久

一歩

勝弘

まつお

キーキー

フジ子

光男

一文

みつこ

ダン吉

美代子

六代

育代

いさお

喜代子

シルク

雄太

雅枝

扶美代

絹子

信二

瑠美子

芳香

紀雄

常男

朋子

耀一

常男

豊中もくせい川柳会(大阪)藤井 則彦報

シナトラと一緒にスイングティータム 英 旺
スイッチオン戦場目指す通勤者 肇

点ひとつ書き初め惜しいとこをミス 求 芽
気を許し小さな罪が入り込む 雅 美
人生もスイッチバックの山登り 歌 留 多
木洩れ日も計算にしてみてもみじ 公 子
私に気があるらしいあの目付 玲 子
横歩き許す君は蟹だから くらり

カジノからテラ銭取ってまつりごと 健 二
惜別の君に恋文渡せずに 真理子
許すのも四度までだと子に論す 武 彦
一円を惜しんで寄附をどんとする 美津子

鉛筆が恋人になるいい余生 則 彦
スイッチオン褒め言葉だけ覚えとく 葉 子
子を許す自分も過去に同じ轍 満 作
オンとオフ切り替え機嫌よく生きる 満 子

父さんのスイッチは酒の量 (若) 玲 子
三つ股のソケット今も引つ張って 見 清
惜しいなア一言多くぶち壊し 宏 子

どうしても自分が自分許せない 美智代
死に土産やとアンデスを越える旅 耕 治
一つだけ許して春を呼び込もう 理 恵

誘われる気がしてチョコを買っておく 美佐子
儉約家惜しまずボンと義援金 正 彦
人の世にスイッチ入れる笑い顔 黒 兔

人知れず許されている昨日今日 ヨシエ
風の子を見たよすすきと遊んでた 千鶴子

大山滝句座(鳥取) 新家 完司報

てくてくとボタラ宮まで行ってきた 石花葉
哀しみは瑠璃色に変え夕映える くにこ
大声で笑って隠し通す恋 美智子
テンションは最高バカな仲間たち 芳 山
お祝を貰い香典持つて行く 照 彦

寛容な背なは大きく見えてくる 楓 花
喜びの電話静かに囁みしめる 雄 大
風呂静か浮いていないか声かける けいこ
老いたから笑い袋は大選ぶ 風 露

大地震ブルーシートで年を越す 由紀子
夢を抱くキリマンジャロも一歩から 寿 代
居酒屋で脳の電池を入れ替える 寛
交換をしてもやっぱり不良品 正 人
魂よ静かになれと雪が降る 芳 光

蟹送る芋焼酎を期待して 紀の治
蒸かし芋大きい順にすぐ消える 幸 子
モナリザになって静かな日を過ごす 麦 青
日本一投げて打つての二刀流 規 雄

若き日の思い交わしたラブレター コスモス
後が無い大器晩成徳儀 野 蒜
説得は大声だけでは届かない 道 唱
代引きの荷物が届き立てかえる 大 鯨

風やんで水が鏡にかわるとき 美ツ千

オートファジーよく解らんがノーベル賞 正 男
いのちとの交換できるものはない 小 鹿

戸車交換素直になつてきた雨戸 重 忠
命より大事なものは何も無い 鈴 野

一缶のビールで酔える良い眠り 久 子
どん底を知り最高へ登つて行く 季 楽 良
鳥取が一番大阪が一番 完 司

川柳さんだ(兵庫) 田中 章子報

再会に心が揺らぐなんてふふ ちあき
若いから言いたいことが言えるのさ 千津子
そしてまた若い詩養を磨いてる ヨシエ

若い子の輪で頑張っている頑固 涼 子
ボーナスの日は鰻井とお吸い物 花 門
天井のエビは衣で大威張り 健 二

天井がうまい地産の三田牛 周 三
牛井がうまい飯は夢の夢 徹
あの戦後井飯は夢の夢 晶 子

イクラ井さみしかろうと鮭加え 堅 坊
ミラクルな受賞しましたボブ・ディラン ひとみ
突然のこほうびにまた頑張れる 雅 尚

十億も要らんと並ぶ宝くじ 祐 康
半世紀あんだと二人居る不思議 つな子
親族に百歳二人息を呑む 歳 子

肩こりがひとり暮しに消えている 野 薫
ルミナリエ消えて鎮魂無事終わる 雄太郎
プロ野球新人の陰スター消え 健 彦
胸を打つ詫び状消えるわだかまり

思い出は指輪の跡が消えるまで
この世から消える潮時思案中

一行詩脳に雑草生やさない

ディナーまでとんとん拍子だったのに

割勘へ下戸はしっかりと食べている

とんとんと出世の裏にコネがある

トントンと胸奥つつく子の涙

とんとんと期待をさせる靴の音

ふんばって残るページを華にする

元旦に神と仏は何思ふ

小春日は心の窓も開け放つ

いい人ね一目で犬が甘えてる

吉本に笑い貰いに軽い足

寂しいなこれが最後という賀状

生きてこそ楽しい趣味と戯れる

夕陽が眩しい明日も頑張ろう

趣味と言う楽しみ抱いて年を越す

川柳ねやがわ(大阪)

籠島

恵子報

川柳花の輪(大阪)

岡本

薫報

安倍裏目ブーチン技は足ばらい

無職無収妻の笑顔に救われる

言い訳のうまい仲間先越され

スッピンのはれる笑顔朝の妻

口笛の得意を生かすボランテア

天気予報下駄で占う戦中派

口先でほめて裏ではどうかなあ

ひとことの不足で溝が埋まらない

宣子

耕治

淑子

宏造

正和

好文

恭子

美龍

キヨミ

富夫

勝正

順子

迪

博

光久

武彦

哲男

口先の三寸辺りでホラを吹く

口先で上手に裁く口達者

大抵の不孝笑顔で追い払う

割れ物と老軀に貼ってみたくなる

福耳と言われてずっと青テント

口先に出せず今年も過ぎてゆく

裏目かも知れぬが余生跳んでみる

友の顔浮かべ賀状の墨を摺る

口先の欠けた徳利へ美むらさき

ずっと君が笑顔でいるように守る

私の笑顔を上げる只です

笑顔もいいが怒った時の君も好き

愚痴零す母の口先まだ達者

口先でも聞いて嬉しいほめ言葉

歳とらぬ写真の父が笑いかけ

十二月人を許してばかりいる

壽峰

美江

朝子

洋

仁

修

麗

ルイ子

茜

賢子

郁夫

弘一

あさ子

尚世

薫

恵子

賑やかがお好きでしたと通夜の席

我が人生平凡だけど悔いはなし

反省会反省もなくお開きに

我が娘何を待つのか残り福

勇太郎

昭好

泰子

陽

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 あまがさき	14日(火) 14時締切 見える・席・やっぱり・自由吟	尼崎市女性センター・テレビエ 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
川 柳 たちばな	15日(水) 14時締切 席題・はらはら・笑う・自由吟	立花公民館(尼崎市塚口町3-39-7)TEL06-6422-6741 〒661-0953 尼崎市東園田町3-49-5 藤井宏造
岸 和 田 川 柳 会	18日(土) 12時30分開場 空気・鍛える・かと言って ランブ	岸和田市立福祉総合センター 南海電車「岸和田」駅より徒歩5分 〒596-0067 岸和田市南町9-17-818 藤井康信
川 柳 塔 みちのく	18日(土) 17時締切 分ける・じんわり・鬼・自立	弘前市松森町73「レストラン・セーブル」TEL0172-36-6614 〒036-8275 弘前市城西1-3-10 川柳塔みちのく事務局 稲見則彦 宛 TEL0172-36-8605
川 柳 ねやがわ	19日(日) 12時開場 相手・演技・財産・自由吟	寝屋川市産業会館 3F 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉 内 川柳ねやがわ
川 柳 藤 井 寺	19日(日) 14時締切 達磨・ポーズ・席題共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線「藤井寺」駅下車南へ徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
豊 中 もくせい 川 柳 会	20日(月) 13時50分締切 秘密・伸びる・丸い・自由吟	豊中市中央公民館 3F 阪急宝塚線「曽根」駅 徒歩5分 〒569-0073 高槻市上本町5-26 初代正彦
川 柳 さんだ	21日(火) 13時30分締切 気配・待つ・ヒント・難しい 自由吟	JR「三田」駅前 キッピーモール 6階 〒669-1545 三田市扶間が丘5-10-19 谷 祐康
和 歌 山 三 幸 川 柳 会	25日(土) 12時30分開場 地・ひかえ目・選ぶ	和歌山商工会議所 4階 第3会議室 〒640-8570 ニュース和歌山編集部 「和歌山三幸川柳会」宛
川 柳 塔 すみよし	26日(日) 13時開場 波紋・装う・そろそろ	住吉区民ホール 〒558-0054 大阪市住吉区帝塚山東2-4-9 古今堂蕉子
はびきの 市 民 会 川 柳 会	26日(日) 14時締切 卒業・探す・ペンキ	陵南の森公民館 近鉄「高鷺」駅北東 徒歩10分 〒583-0864 羽曳野市羽曳が丘1-11-8 徳山みつこ
川 柳 ふうもん 吟 社	26日(日) 13時30分開場 メンタル・賢い・潜む	開発ビル 2F ホール 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金洋
南 大 阪 川 柳 会	27日(月) 18時開場 上下する・くどい・手紙・笑う	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線「天神橋6丁目」駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京 都 塔 の 会	28日(火) 14時締切 温い・よいしょ・発	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒607-8231 京都市山科区勤修寺堂田70-16 榎本宏子

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

2 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 な ら	2 日(木) 14時締切 期待・ドキドキ・安全	奈良市立中部公民館 4F 奈良市上三条23-4 近鉄奈良駅④番出口徒歩5分 〒633-0054 桜井市阿部787 松本方 安土理恵
城 北 川 柳 会	4 日(土) 14時締切 迷う・ポケット・塞ぐ・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄谷町線 千林大宮駅③番出口 〒536-0001 大阪市城東区古市1-8-14 江島谷勝弘
川 柳 とんだばやし 富 柳 会	4 日(土) 14時締切 順調・カサカサ・自由吟	富田林市立中央公民館 近鉄南大阪線「富田林」駅南口から西へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子 TEL:04721-25-0603
倉 吉 川 柳 会	4 日(土) 14時締切 抱く・もぐもぐ・ぐい	倉吉市明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 ま つ え 吟 社	4 日(土) 12時30分開場 遅れ・魚・リズム・続く	松江市雑賀公民館 〒690-1223 松江市美保関町笠浦222-1 相見柳歩
川 柳 塔 さ か い	9 日(木) 13時開場 すっきり・無料・折句:ほとけ	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
あかつき 川 柳 会	10 日(金) 14時締切 暖かい・親・足許・時事吟	大阪保育運動センター (新谷町第1ビル2F) 地下鉄「谷町六丁目」駅③番出口南へ3分(道路向い側へ) 〒581-0014 八尾市中田2-312 前田紀雄
川柳大阪	11 日(土) 14時締切 寝る・妥協・週刊誌	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒534-0021 大阪市都島区都島本通4-11-6 山崎珠生
六 甲 川 柳 会	11 日(土) 14時締切 こうこつ・夕陽・福・自由吟	六甲道労務市民センター 5F JR「六甲道」駅南隣 メイン六甲ビル 〒658-0026 神戸市東灘区魚崎西町4-1-11 山崎武彦
川 柳 塔 わかやま 吟 社	11 日(土) 14時10分締切 兼 題 = 伝説・あの時・ちぐはぐ 課題吟 = 老	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒649-6253 岩出市紀泉台366 藤原ほのか 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町2-208-5 泉原道夫
川 柳 塔 打 吹	11 日(土) 13時30分締切 砂・アバウト・グングン	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光 方 川柳塔打吹 事務局
八尾市民 川 柳 会	12 日(日) 14時締切 邪推・うだうだ・好む・雑詠	八尾市淡川町・安中町集会所 1F JR「八尾」駅から徒歩5分 〒581-0083 八尾市永畑町2-1-7 土田欣之
西宮北口 川 柳 会	13 日(月) 14時締切 成功・決める・ムード・自由吟	西宮市立中央公民館 6F 阪急「西宮北口」駅南出口徒歩3分「プレラにのみや」 〒663-8112 西宮市甲子園口北町27-4-602 梅澤盛夫
ほ たる 川 柳 同 好 会	14 日(火) 13時30分締切 予定・笑う・さわやか	豊中市立蛸池公民館 阪急・モノレール 蛸池駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒兎

柳界展望

★「第35回没句川柳供養大会」は12月18日新日本

海新聞社本社ビルで開催。

参加者210名。同人成績。

天位 牧野 芳光

しがらみを切つて寂しくなつてくる

天位 斉尾くにこ

いのち抱く大地の中はあたたかい

天位 斉尾くにこ

WiFiは圏外受信箱は風

天位 藤井 智史

きつと還つてくるわたしの桜

読売川柳年間賞

坂本とも湖

憲法を破ると菊の紋が泣く

★「みはら川柳奉行誌上大会」。同人成績。

特選 米澤 俣子

築き上げた財も手ぶらで逝くあの世

特選 坂本とも湖

信頼を築くに裸対はだか

★「第31回すずむし全国誌上川柳大会『望』」。同人成績。

特選 武本 碧

お望みとあらばころ差し上げる

★「第40回寝屋川市民川柳大会」。同人成績。

秀句 宮崎シマ子

長生きの血筋憂いと喜びと

▽お詫びして訂正△

▼1月号、P 86上段7行

目、小谷集一、籠島恵子。P 101上段20行目、鈴木いさお、鈴木栄子。

▽新誌友紹介△

豊橋市 西郷紀美代

紹介者 藤田 千休

鳥取県 橋本 整

宜野湾市 島村 枝美

紹介者 森山 文切

西宮市 福田 正彦

紹介者 山口 光久

加古川市 山内 迪

紹介者 堀 正和

常任理事会 1月6日(金)

①第23回川柳塔まつりに

いて②春の誌上大会につ

いて③定例確認事項。

次回 2月7日(火) AM 10時

新同人紹介

谷口修平

哲男・正和推薦

増刷できました！

川柳の理論と実践

楽しく読み進むだけで実力がつく〔川柳の理論と実践〕。
このたび第3刷ができました。まだお持ちでない方は、
是非この機会にお求め下さい。

四六版ソフトカバー 326頁。送料+消費税=2,000円

疲れた体に効く応援歌！

大山滝（4）

大山滝句座に集う67名のアンソロジー。収録600句すべてに完司の寸評あり。人生に疲れたときパワーを貰える句集になっています。

変形四六版 208頁。送料+消費税=1,000円

〔ご注文は下記へ。ハガキかFAXにて。お支払いは到着後で結構です〕

〒689-2303 鳥取県東伯郡琴浦町徳万597 新家完司

FAX専用 0858-52-2449

編集後記

★宮城のお堀端行く黄なコート 薫風

★昨年12月初めに仙台「杜人」青森の「触光」の合同川柳会に出席。高瀬霜石さん松山芳生さんとも久しぶりにお目に掛かる。ホテルの前で何かの催しがあり、宮城県鉄魚研究会の方に鉄魚なるものを戴いた。小さなビニール袋に入った2匹の小魚を仙台から和歌山へ連れ帰る。鉄魚はコイ科の淡水魚。フナに似ているが体長3センチ、尾鰭が1センチ。せんちゃん、だいちゃんと名付けた。2匹仲良く寄り添い泳いでいる。生き物が身近にいるのは心やすらぐ。いつか羽衣のように美しい鰭で優雅に泳ぐ日を夢見ている。

★最近戴いたお葉書の中から。俳誌「船団」主宰坪

内稔典氏。「川柳と俳句をいっしょに考える機会をふやしたく」。これは

昨春秋、船団主催の俳句と川柳のコラボレーションに稔典氏と30分ほど対談させて戴いたことを踏まえてのご感想。また季語を超越した俳句と写真のコラボレーション「写俳」を発表され続けておられる伊丹三樹彦氏の川柳塔新年号の感想は「蘭幸の巻頭言・川柳の旅は羨ましい限り。私は今、俳句は感動詩、川柳は感興詩と考えています」。芥川賞作家・辻原登氏は田中新一、番傘主幹の友人。新作「籠の鸚鵡」の感想文を差し上げたところ、お葉書を戴いた。「川柳のかたはみなさん批評眼が鋭く深いですね」と。★川柳の関係で郵便物はたくさん受け取る方だと思いが、ポストに個人の郵便が入っているとて

ひとこと

これもご縁

豊中もくせい川柳会会長を見清さんから継いだのは昨年平成二十八年五月。就任の打診方々お話があったのは、その半年ほど前のこと。入会後二年半程経ち、ようやく句会に馴染んできた頃で柳歴も浅い私には半信半疑でしたが、ひたむきな説得にこれも何かのご縁と思いお受け致しました。

「前任の田中正坊さんが八十二

歳で退かれた。私も同じ歳になるのを機に交代したいので宜しく頼む」との見清さんの言葉。当会は昭和五十九年創立で、今年三十三年目という伝統ある会を継ぐ事になりましたが、有難い事に運営の仕組を先輩方が築かれています。会長というのは楽しい句会を継続する為の仕掛け人代表だと思います。皆様のご理解ご支援の下、及ばずながら精一杯励む所存です。

(初代 正彦)

も嬉しい。三樹彦氏にしても稔典氏にしても(亡き薫風先生も)、絵葉書に青いインクでさらさらとお書きだ。絵葉書を見るとき、文を読む嬉しさ。私も見習って絵葉書を利用しよう。長い手紙は無理としても筆不精解消になるかもしれない。

(朱夏)

□川柳塔誌55号(S48年10月号の目次下「如是我聞」若本多久志」から抜粋。「句というものは、いつも巧いのが作れるものではない。仕事や生活が余り忙しい時には誰でも作れないものだ。ひどく悲しいことが起きた時や、嬉しい出来事があった時も同様である。かと言ってあまりひまな時にも作れないことがある。では、どういう時に句がうまれるかというと、忙しい時、嬉しい時が過ぎ去った後で、人

(勝弘)

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(4月号)

地名

市都
道府
道
姓
雅
号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようにお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
- (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集・インスピレーション・ナビ（印象吟）への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
- (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- (4)

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から15時までにご利用いたします。

檸檬抄投句用紙

「青」(2月15日締切)

4月号発表

安土 理恵 選 — 共選 — 北野 哲男 選

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

B A

--	--

地名

市都
道府
姓雅号

切らないで下さい

きりとりせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

4月号発表表(2月15日締切)

初歩教室	一路集(2句)	インスピレーションナビ(2句)	檸檬抄「青」	愛染帖(2句)	水煙抄(8句)	川柳塔(8句)
「掴む」(3句)	「世話」	「曲がり角」	「安土」	「新野」	「西出」	「小島」
居谷	成田	大内	土理	家哲	出楓	島蘭
真理子	雨奇	朝子	恵男	司選	幸選	幸選
担当	選	選	共選	選	選	選

5月号
檸檬抄「適当」
一路集「主張」「あなた」
初歩教室「気楽」

本社2月句会

とき 2月7日(火) 13時開場・13時40分締切
—開場時間、締切時間を変更しています。ご注意ください。
ところ アウィーナ大阪 4階 金剛の間
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・67772・1441
おはなし「楽しくて苦しい川柳」
兼題「鶏」
席題「」
「ボイント」
「とうとう」
「傾く」
「結局」
会費 1000円
投句料 500円(各題2句以内)(切手可)

小島 柿花 佐々木 安土 田中 西出 新家 完司
蘭幸 和夫 満作 恵子 楓楽 司選

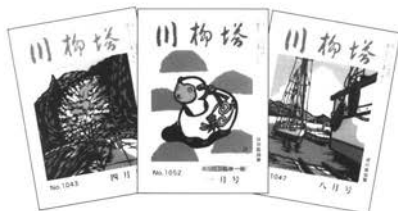
本社3月句会
7日(火) 午後1時から
兼題「損」「リボン」「ぱっと」
「似る」「怪我」

第35年度 夜市川柳募集

第9回「紅」 木本朱夏選
ハガキに3句 2月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円(送料83円)
半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)
二〇一七年(平成二十九年)二月一日発行
発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート
〒543-0052 大阪市天王寺区大道一四一七
花野ビル201号室
発行所 川柳塔社
電話(〇六六七九三三四九〇番)
振替〇〇九八〇一四二九八四七九番

川柳・俳句・エッセイ・小説
新聞・広告・ポスター・伝票等
あなたの思いをかたちにします。



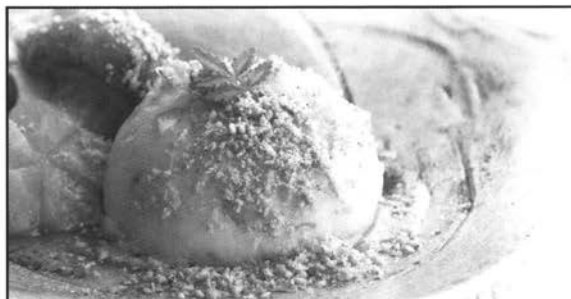
美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町9-4
TEL (06) 6372-1178
FAX (06) 6372-1196
E-mail: bikenart@ea.mbn.or.jp

オニザキのプレミアムロースト

つぎま

杵つき製法の「すりごま」



袋を開けた瞬間に広がる、

香ばしい薫り。舌と記憶に

しっかりと残る、深いコク。

料理をより美味しくする

ゴマを作りたい、真つすぐな

想いから生まれた逸品。

それが「プレミアムロースト」。

素材本来の良さを余すこと

無く引き出した、オニザキの

自信作をお届けします。



株式会社 オニザキコーポレーションセールズ
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484
東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)
TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159
<http://www.koki-envelope.com>